

京都府埋蔵文化財情報

第 25 号

高山古墳群・高山遺跡の発掘調査	増田 孝彦	1
野崎古墳群の埴輪と土器と土製模造品	小山 雅人	13
志高遺跡出土の縄文時代草創期の土器をめぐって	三好 博喜	25
盤上遊戯史から見た方格規矩紋について	小泉 信吾	33
—昭和62年度発掘調査略報—		42
1. 鳥取城跡	4. 平山城館跡	
2. 長岡京跡右京第266次	5. 南稻八妻城跡	
3. 谷内遺跡第4次		
資料紹介 長岡京跡左京第115次調査で出土した玉作り 関係の遺物について	田代 弘	52
府下遺跡紹介 37. 北野廃寺跡		60
長岡京跡調査だより		62
センターの動向		68
受贈図書一覧		70

1987年9月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



図版第2 長岡京跡左京第115次調査で出土した玉作り
関係の遺物について



(2) S K15142出土碧玉原石



(3) S K15142出土結晶片岩



(1) S K15142検出状況

高山古墳群・高山遺跡の発掘調査

増田孝彦

1. はじめに

高山古墳群・高山遺跡は、竹野郡丹後町字徳光小字高山ほかに所在し、農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の高山団地造成工事に伴い発掘調査を行ったものである。

本古墳群・遺跡は、竹野川の一支流である徳良川左岸の丘陵上に立地しており、分布調査等により現在までのところ13基の古墳が確認されている。丹後町には、神明山古墳をはじめ著名な古墳が多く存在するが、本古墳群と同様な横穴式石室を内部主体とするものとしては大成古墳群^(注1)・片山古墳群・天畑古墳群・三宅古墳群・鳥越古墳群・西小田古墳群などが知られている。このうち、大成古墳群は昭和42年に発掘調査が行われ、6世紀末～7世紀に築造されたことが明らかとなっている。また、徳良川右岸の南側の丘陵上には、小行地古墳群・セツ塚古墳群などがあり、徳光周辺は比較的古墳の密集した場所となっている。高山古墳群・高山遺跡の立地する丘陵上は、戦前～戦後にかけてその多くが開墾され、昭和40年代前半まで耕作が行われており、その痕跡がいたる所に残っている。

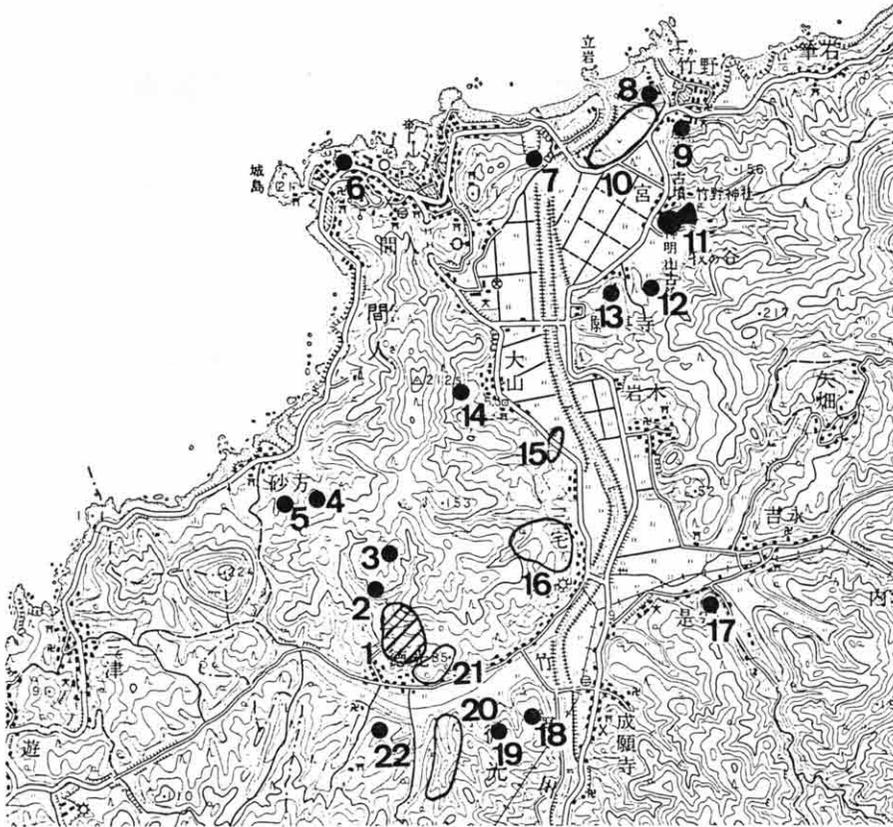
調査の対象となったのは、1号墳～6号墳までと、台地状の平坦部(試掘地A)・古墳状隆起をなす部分(試掘地B)・古墳周囲や試掘地A南端・4号墳北側で認められた拳大～人頭大の石を用いた集石・積石状に残存している部分であり、このうち、1・2号墳は京都府教育委員会が調査を行い、残りを当調査研究センターが分担して調査を実施した。

調査は、昭和61年7月19日より開始し、昭和62年3月14日まで行った。

2. 調査概要

調査の結果、明らかとなった墳丘・石室の規模、出土遺物は末尾の一覧表に示した。

墳丘は、各古墳とも尾根の張り出した部分や、自然地形の起伏部分を利用して築造されている。開墾や墓地として利用されていることから、盛土がほとんどなく石室全体が露出したもの(6号墳)、天井石全体が露出したもの(3・4・5号墳)という状態であった。墳形も円形であったものが、開墾により方形となったものもある(3号墳)。築造時の姿をもっともよくとどめていたのは4・5号墳である。



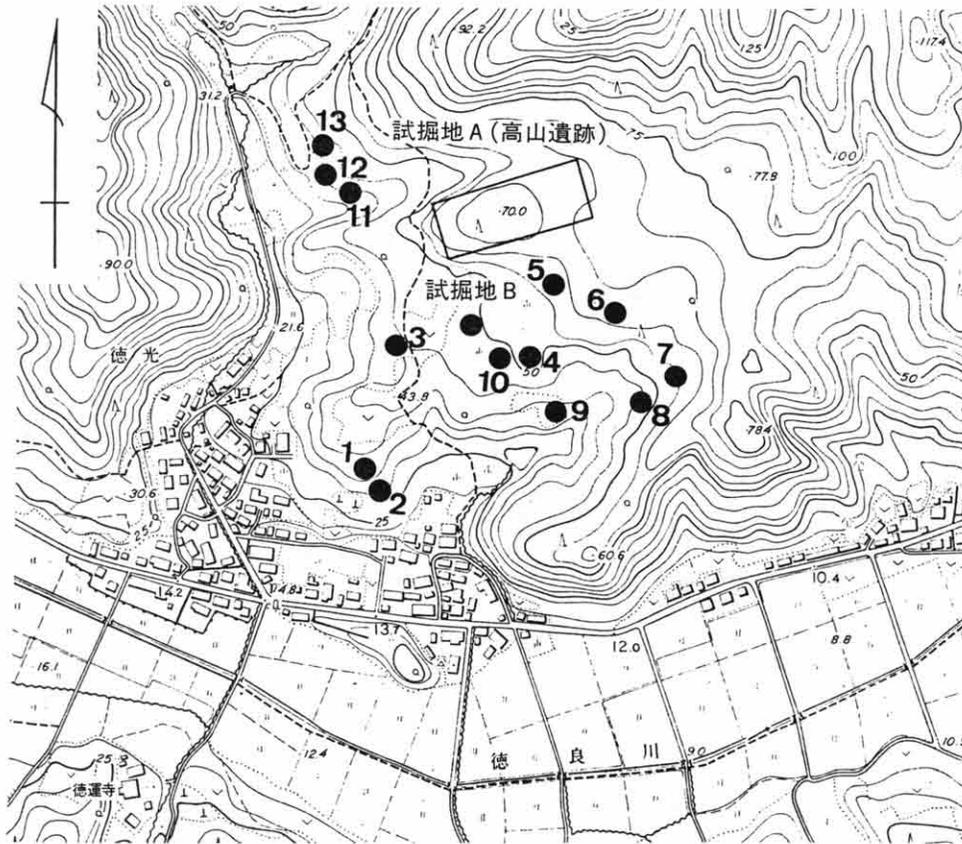
第1図 調査地位位置図及び周辺遺跡分布図

- | | | | |
|-------------|------------|------------|-----------|
| 1. 高山古墳群 | 2. 椿原古墳群 | 3. 荒神山古墳群 | 4. 砂方A古墳群 |
| 5. 砂方B古墳群 | 6. 馬場ノ内古墳群 | 7. 鼻下り古墳 | 8. 大成古墳群 |
| 9. 産土山古墳群 | 10. 竹野遺跡 | 11. 神明山古墳 | 12. 丸山古墳 |
| 13. 願興寺古墳群 | 14. 大山北古墳群 | 15. 大山古墳群 | 16. 三宅古墳群 |
| 17. アマカオカ古墳 | 18. セツ塚古墳群 | 19. 小行地古墳群 | 20. 取越古墳群 |
| 21. 段ナル古墳群 | | | |

調査を行った古墳の内部主体はすべて横穴式石室であり、片袖式(4・5号墳)と無袖式(3・6号墳)がある。比較的大きな石材を用いて石室を築造していた3号墳を除き、全体的に石室の造り方は粗雑な印象を受ける。使用された石材は主に安山岩であり、一部凝灰岩も用いられている。いずれも、付近一帯に多く分布する石材である。

高山3号墳(第3図)

無袖式の横穴式石室で、調査した古墳中、石室・墳丘とも最大規模を誇る。墳丘上及びその周辺には石仏・一石五輪塔が約40個体分が置かれており、墳丘頂部中央には祠が置かれており、その際に削平したようで、天井石が3石露出していた。天井石は2m×1.4m程度のものが6石残存していたが、崩落の危険があるため4石を除去し調査を行った。石室内部は完全に埋まっており、羨門部が最も広く、奥壁に向かうに従い狭くなっている。壁



第2図 高山古墳群・高山遺跡分布図 (1/5,000)

面の石積みは、奥壁で3段、側壁で3～4段、最下段から上段まで比較的大きな石で積み上げ、その間を小さな石で埋めている。石室の用材はすべて安山岩で、凝灰岩は一石も使用されていない。羨道部は、高さ約1m・幅約1.1mの凝灰岩の1枚岩で閉塞されていた。

玄室部分では、棺台と見られる石材の配置を4か所確認し、7世紀初頭と思われる追葬時の良好な面を確認した(第4図)。この面は、副葬品の配置が埋葬された時そのものの形で出土し、大半の遺物が木棺の横に並べられ、棺内からは装身具(金環・玉類)のみ一括して出土した。この追葬時に整理された遺物は、棺台下や側壁付近に散乱していたが、特に閉塞石周辺に集中してまとめられていた。この閉塞石内側には刀4本がまとめられていたが、うち1本は、銀製の刀装具(鍔はばき)が使用されていた。

高山4号墳(第5図)

北西側に袖がある片袖式の石室で、天井石が残存していたが、開墾により石室内に落ち込んでいた。墳丘は、東側に墓地があるためその造成時に一部削られている。尾根高位側には、墳丘と尾根とを区画する幅約2mの溝が設けられている。



第3図 高山3号墳地形図

壁面の石積みは、玄室奥壁4段、側壁のもっとも残存する部分で6段、羨道部側壁3段積みで、最下段のみ比較的大きな石材を用い、2段目より上は大小さまざまな凝灰岩・安山岩を混ぜ、積み上げている。羨道部玄門付近には、拳大～人頭大の石を約50cm積み上げた閉塞石が残存していた。

玄室内には、棺台となる石材は認められなかったが、木棺周囲を囲んだのではないかとと思われる拳大程度の石材による区画が認められた。

遺物の多くは、袖石・玄門部閉塞石付近から出土した。

高山5号墳(第6図)

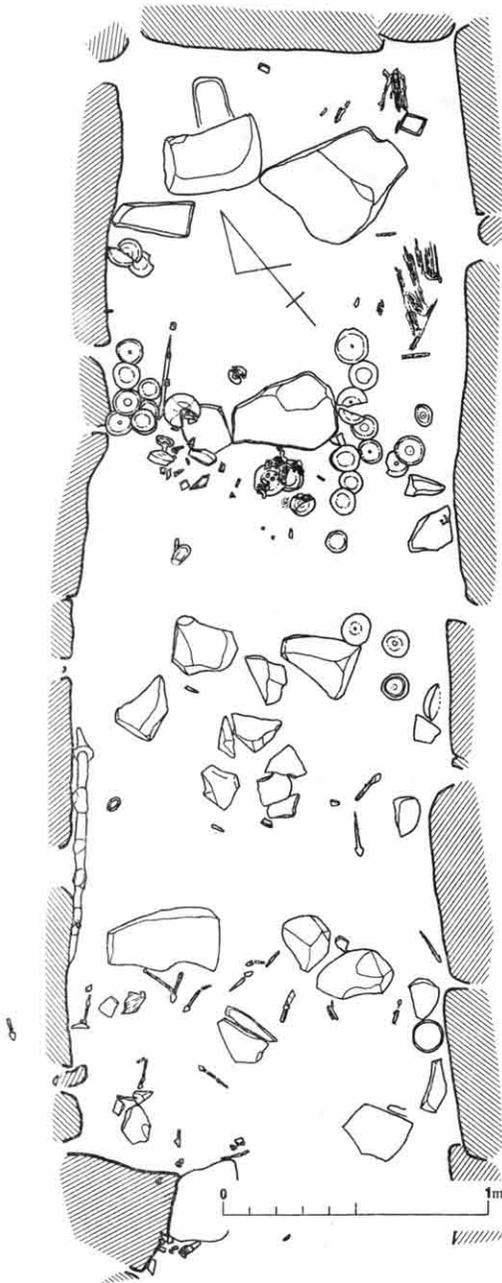
墳丘は、周囲に墓地があることや、石仏・一石五輪塔安置のため一部削られ天井石が露出していたが、整った円形を呈していた。石仏・一石五輪塔は約25個体安置されていた。

南西側に袖のある片袖式の石室である。天井石が残存していたが石室中央部に大きな根株があり、側壁が異常に内傾し、石室が倒壊する恐れが出てきたため、奥壁側天井石を除去し奥壁側より調査を行った。

壁面の石積みは、玄室奥壁4段、側壁5～6段、羨道部側壁のもっとも残存する部分で5段積みで、最下段のみ比較的大きな石材を用い、2段目から上は大小さまざまな安山岩・凝灰岩を混ぜ、積み上げている。羨道部中央には人頭大の石を約70cm積み上げた閉塞石が残存していた。また、袖石から石室前面までは、羨道幅いっぱいの排水溝も設けられていた。

玄室内床面は、拳大の礫が全面に敷きつめられており、木棺が安置されていたと思われる部分は特にその密度が高くなっている。

遺物は、袖石付近に土器類が集中し、奥壁付近では若干の土器と鉄器が出土している。



第4図 高山3号墳遺物出土状況

高山6号墳(第7図)

墳丘は、開墾により消滅し、石室だけが露出した状態であった。そのため、天井石・側壁の一部分がなくなっている。

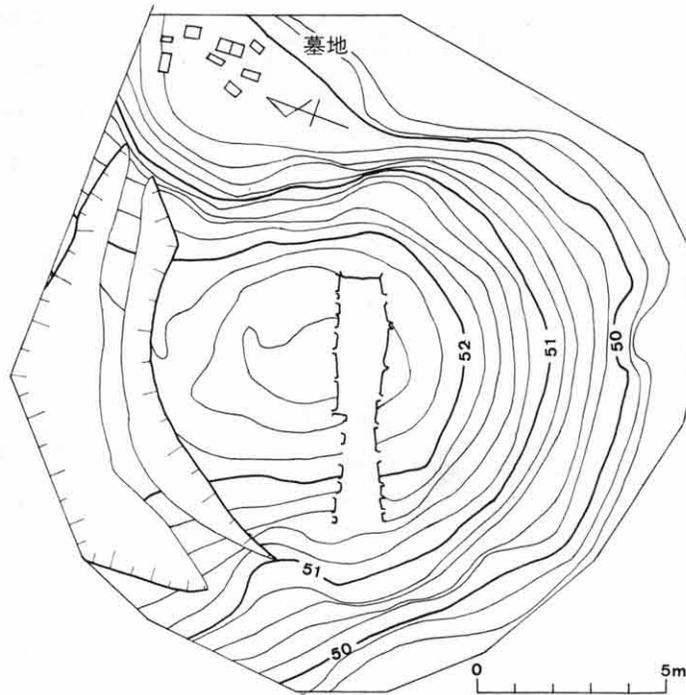
3号墳と同様の無袖式の石室であるが、安山岩・凝灰岩を混ぜた小さな石ばかりで構築されている。壁面の石積みは、奥壁で3~4段が残存し、側壁の残存するもっとも高い部分で5~6段積み上げている。積み上げた石と石の間には空間があり、土が充填されており、かなり粗雑な印象を受ける。石室の平面形を見ると、玄室と思われる部分と羨道部とはその境部分が急激に狭くなっており、両者を区別しているようである。この急激に狭くなる部分には人頭大の石を約80cm積み上げていた閉塞石もみられた。閉塞石下部には羨道幅いっぱいになり石室前面にまで及ぶ排水溝が設けられていた。

遺物の出土状況は、鉄器・玉類は各所に散乱していたが、土器類は閉塞石内側に比較的まとまって出土した。羨門付近の排水溝内から馬具と思われるものや平瓶が出土している。

試掘地A(高山遺跡)(第8図)

標高70m、5号墳の西方100m、造成予定地最高所に位置する台状の平坦な地形をなしていたもので、北・西側は谷となっており急崖な自然地形を呈する。

調査は、平坦地中央部分を貫通する幅2.5mのトレンチを設定し掘削を行った。その結果、北端の崖淵から1基の竪穴式住居跡を検出した。竪穴式住居跡は1辺5m×4.7mの方形で、北東辺は開墾により削平されほとんど残存していなかった。北西辺中央には、安山岩・凝灰岩を用いた石組みのカマドが作り付けられており、カマド周辺からは多量の



第5図 高山4号墳地形図

炭が出土している。また、住居内には北西辺を除く「L」字型にまわる排水溝も設けられている。柱穴は19か所確認したが、支柱は4本のようなのである。住居内からは7世紀初頭に比定される須恵器杯身・杯蓋・高杯・土師器甕等が出土した。他にも住居跡が存在する可能性があるため平坦地及びその周辺も含め、2m四方の試掘を25か所行ったが住居は存在しなかった。

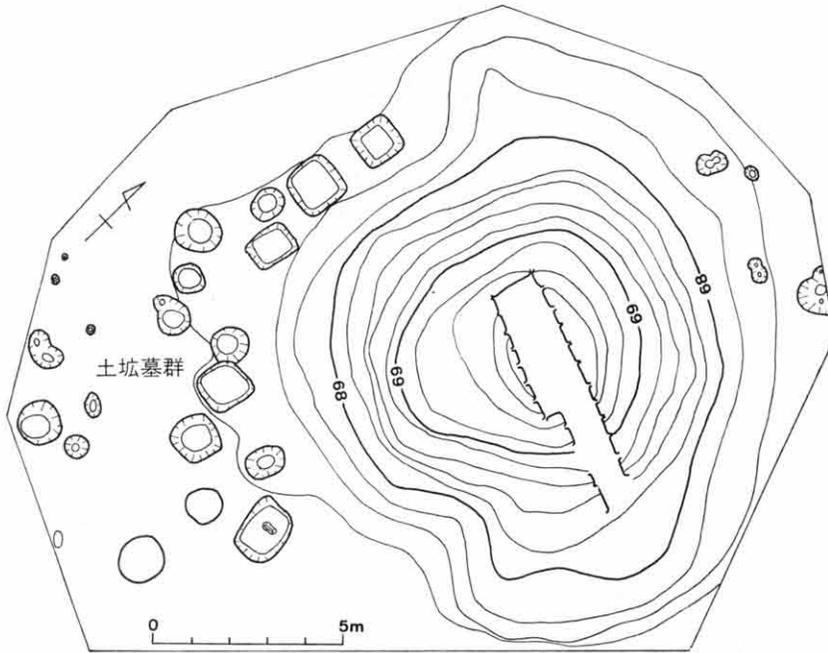
試掘地B

直径18m・高さ1.8mの古墳状隆起が認められた所で、中央部分には3・5号墳同様、大きなしいの木が立っており、しいの木周囲には石仏・一石五輪塔が約20個体置かれていた。さらにその周囲には、江戸時代中期以降の墓地が多数存在していた。

調査は、この墓地をさける形で古墳状隆起の中央部分に試掘トレンチを設定し、掘削を開始した。その結果、表土下20cmで地山面となり、古墳は存在せずまったくの自然地形であることが明らかとなった。

集石・積石状遺構の調査

高山古墳群の立地する丘陵その周辺は、石原という小字があるくらい石の多い山である。これらの石を利用して、集石・積石状をなす遺構が各所にみられた。4号墳北側・5号墳周囲・試掘地A南端に特に集中していた。いずれも拳大～人頭大の石を用い1m程度の方



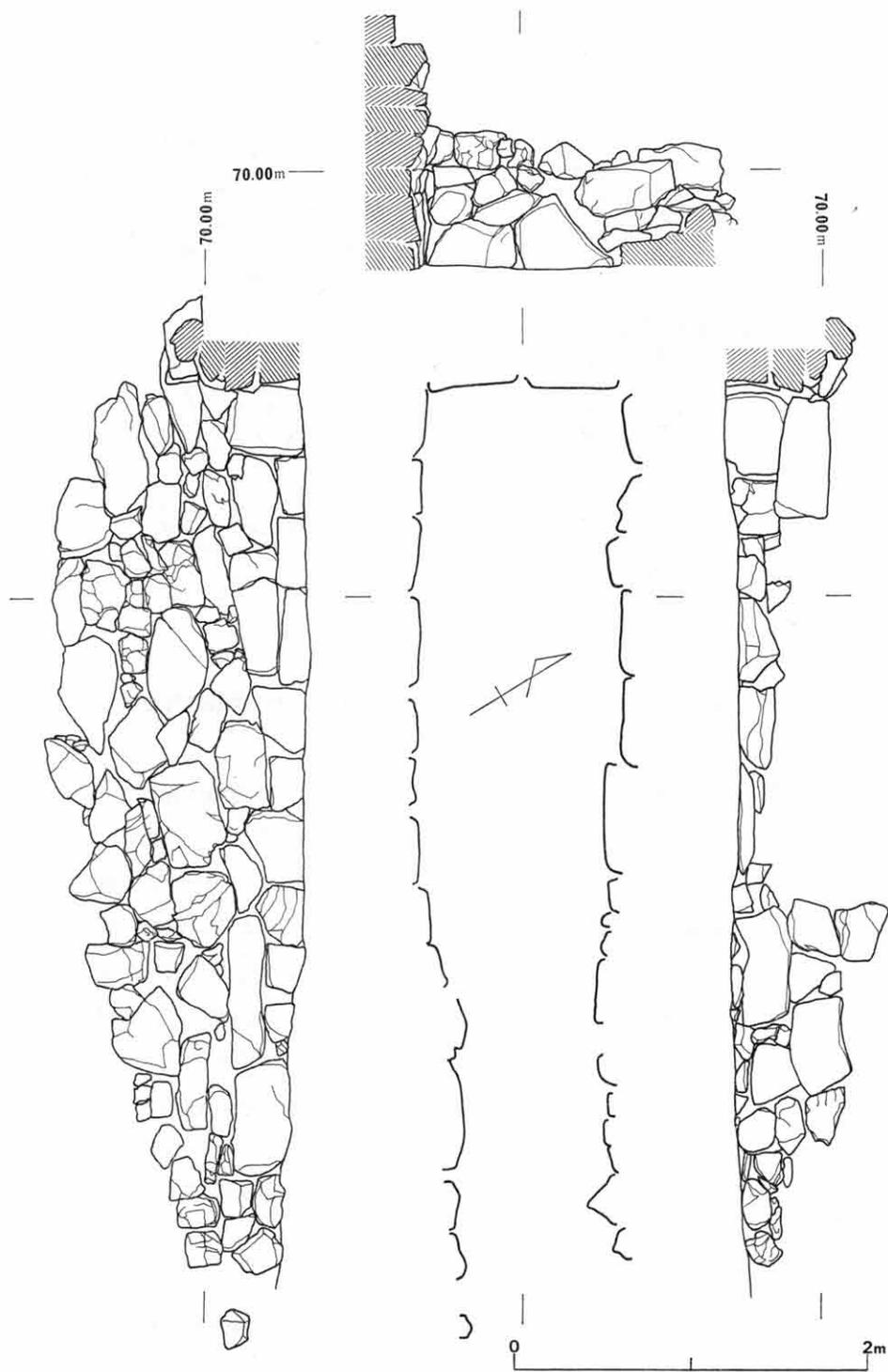
第6図 高山5号墳地形図

形もしくは円形に区画するものや、石を積み上げたものであり中世墓の可能性が考えられたため調査を行った。

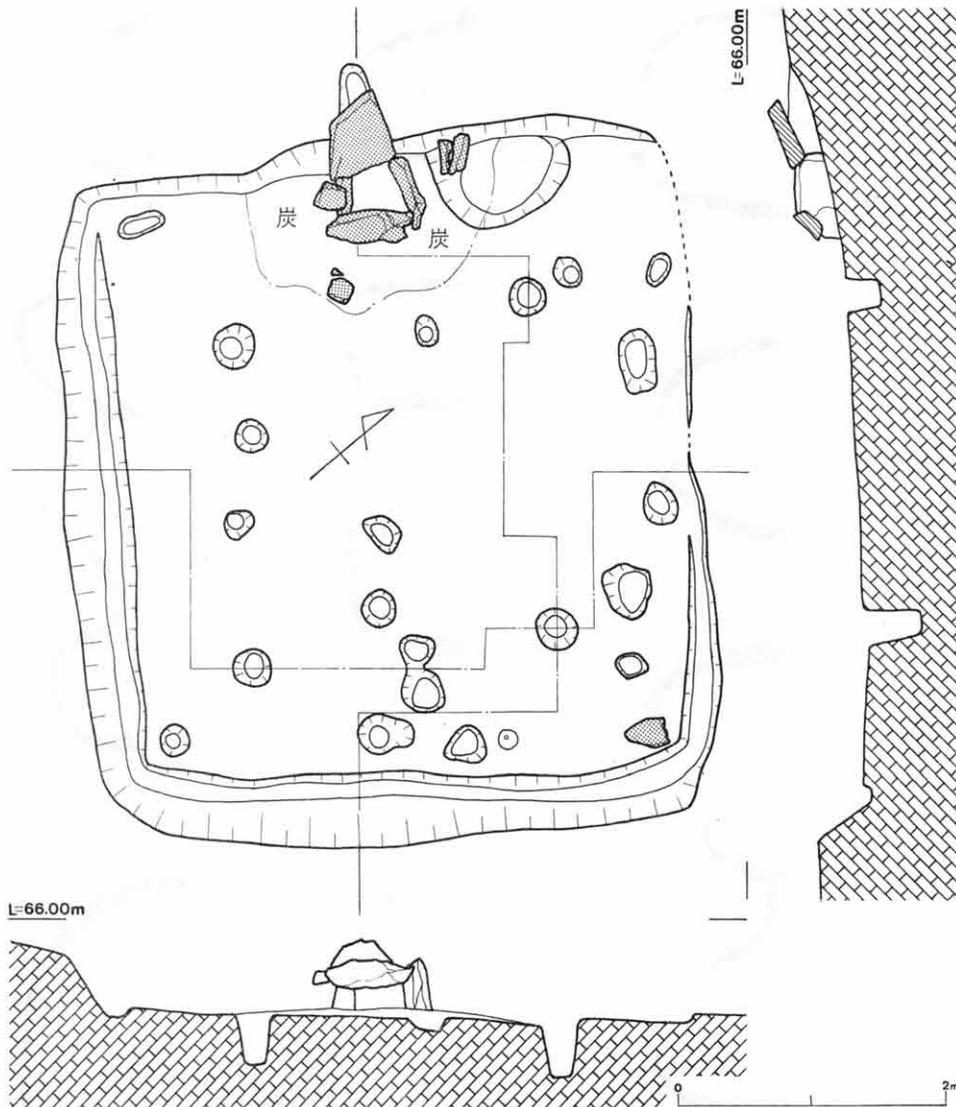
4号墳北側の直径約3m・高さ1mの積石と、直径約1mの石が約20か所集まり、長さ20m×幅6mの集石群が見られた。積石については、表面のみ拳大の石でおおい、内側は人頭大の石を積み上げていたが、墓壇・遺物ともまったく出土しなかった。集石群については、過去に一字一石経が出た経塚として伝えられている所であったが、経塚・墓壇とも確認することはできなかった。遺物は、集石中より北宋銭2枚、若干の土師器が出土しており墓であった可能性があると思われる。墓壇が存在しないことからすると、木櫃等により骨を安置した後、周囲に石を置き積み上げ、塚状にしたとも考えられる。

5号墳周囲の集石 拳大～人頭大の石により1m程度の方形・円形区画する集石が20か所認められた。集石下から土葬墓と火葬墓の埋葬が確認されたが、中には骨もなくなり墓穴だけのものや浅い掘り込みだけのものもある。確認した内訳は火葬墓3、土葬墓6、墓穴だけのもの2、浅い掘り込み9となる。土葬墓からは、多量の人骨とともに寛永通寶、釘、土師器皿がわずかに出土した。火葬墓からは、少量の火葬骨と北宋銭が出土している。

試掘地A南端 直径1.5m・高さ80cmの積石と直径1m程度の集石2か所を確認していたが伐採を行ったところ、これらを中心に22m×5mの平坦部が造られていることがわかり、全面を掘削した。その結果、平坦部全体にわたり11か所の土葬墓を確認した。いずれ



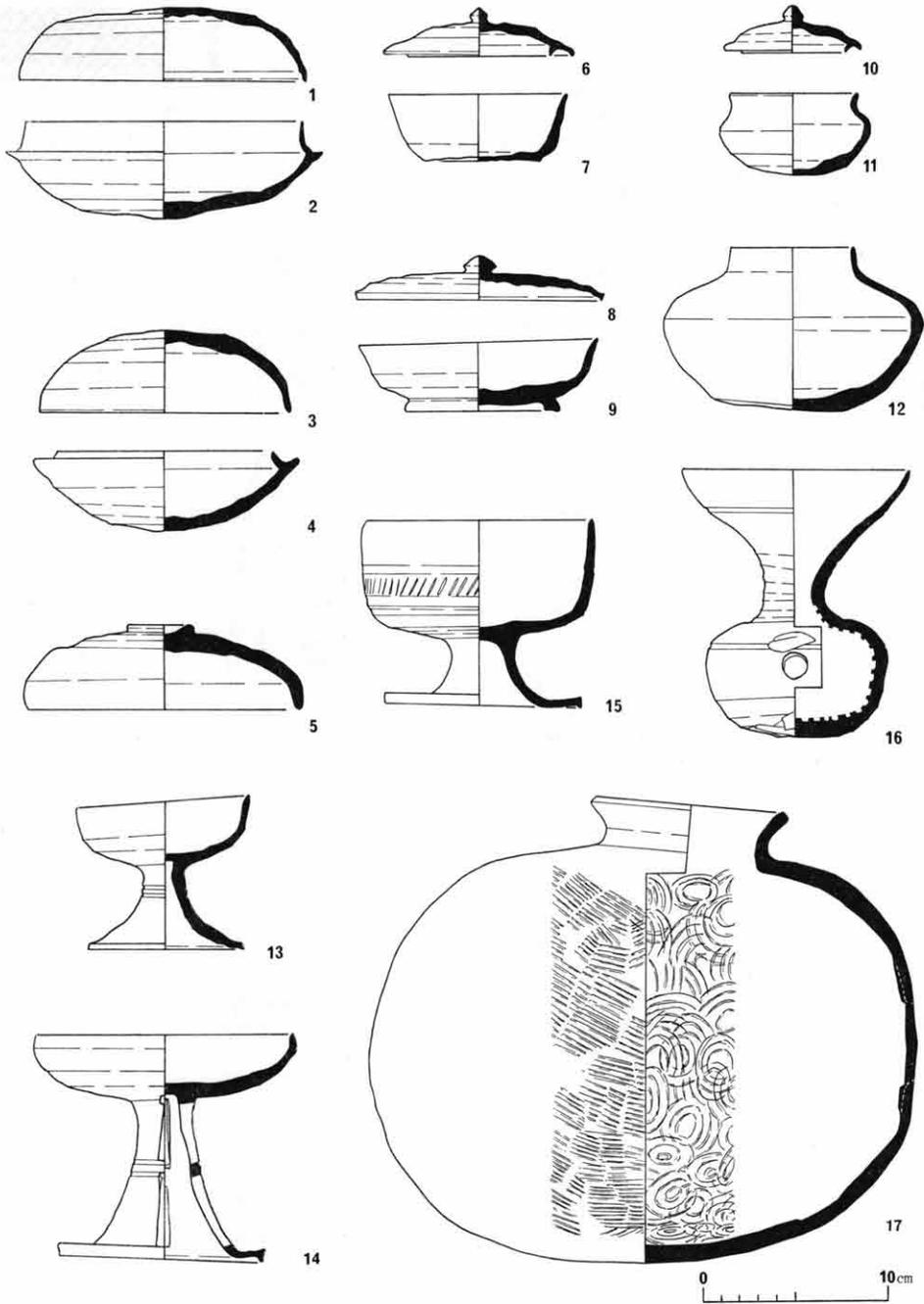
第7図 高山6号墳石室実測図



第8図 試掘地A(高山遺跡)住居跡実測図

も、人骨、寛永通寶、釘等が出土した。検出されたもっとも深い墓坑は、深さ2.5mにも達する。いずれも5号墳周囲で検出した土葬墓と同じものと考えられる。

これらの、火葬墓・土葬墓の埋葬時期については、5号墳周囲にあった一石五輪塔の一部には、天正11・12(1583・4)年の銘があり、周辺に存在する墓石の最も古いもので延宝3(1675)年であり、江戸時代中期以降の墓石は各所に見られることからすると、安土・桃山時代～江戸時代中期頃にかけてのものと思われる。



第9図 出土遺物実測図

3号墳：6, 7, 10, 11, 12, 13, 16, 4号墳：1, 2, 8, 9, 17,
5号墳：3, 4, 14, 15 試掘地A(高山遺跡)：5

3. ま と め

調査した古墳は、いずれも円墳で、横穴式石室を内部主体とし、古墳時代後期(6世紀後半～7世紀初頭)に築造されたものであることが明らかとなった。その後追葬が行われ、もっとも最後に追葬が行われたものは7世紀後半頃になると思われる。3号墳は、10世紀代に再利用されたと思われる土器も出土している。

墳丘・石室の規模、出土遺物等からも各古墳の被葬者の差を見ることができ、現在整理中であり、詳細は後日正報告にゆずりたい。なお、3号墳から出土した刀装具に銀装(緇)を使用したものは、丹後地方では、久美浜町湯舟坂2号墳、峰山町桃谷古墳に次いで3例目である。被葬者の性格については、京都府教育委員会の調査した1号墳や、昭和62年度に調査予定としている7・8・9・10号墳の調査結果を総合して考えたい。

また、調査した古墳のすべてが盗掘を受けておらず、開墾により外表・石室の一部が壊されただけで、内部は埋葬時の姿をよくとどめていたといえる。丘陵各所に散在する集石

高山古墳群調査内容一覧表

古墳番号	墳形・規模	外部施設	副葬品	築造時期	備考
1号墳	円 径約13m 高さ2.5m	列石?	雲珠1・辻金具1・鉸具・鏝・鉄鍬・釘・金環・勾玉・管玉・ガラス玉・切子玉・須恵器・土師器	6c後半～ 7c中葉 (追葬)	昭和61年度京都府教育委員会調査
2	円				// (保存)
3	円 径約17m 高さ3.4m		金環2・勾玉8・切子玉8・管玉2・ガラス玉9・ガラス小玉・鉄鍬・刀・釘・鏝・留金具・鉸具・須恵器・土師器 (土器類約70点)	6c後半～ 7c中葉 (追葬)	昭和61年度センター調査 再利用あり
4	円 径約15m 高さ1.7m		金環2・鉄鍬・刀子・釘 須恵器・土師器 (土器類約20点)	6c後半～ 7c中葉 (追葬)	//
5	円 径約12m 高さ2.1m	溝	鉄鍬・釘・須恵器・土師器 (土器類約20点)	7c初頭	//
6	円 径不明 高さ不明		金環2・勾玉2・切子玉2・管玉1・ガラス玉2・刀・鉄鍬・釘・馬具?・須恵器・土師器 (土器類約20点)	7c初頭	//

高山古墳群石室規模一覧表

(単位=m)

古墳名	石室	全長	高さ	玄室長	玄室幅	羨道長	羨道幅
1号墳	片袖	7.0	2.2	4.7	2.2	2.3	1.6
3号墳	無袖	10.20	1.83		1.10		1.45
4号墳	片袖	6.41	1.58	3.72	1.29	2.69	0.73
5号墳	片袖	6.75	1.62	3.75	1.52	3.0	0.87
6号墳	無袖	5.45	1.22		1.09		0.77

・積石などにみられるように、古墳築造が終わってからも現在に至るまで、この丘陵は奥津城として長く守られてきたと考えられる。

注目されるのは、試掘地A(高山遺跡)で検出した住居跡で、古墳群の中に古墳と同時期の住居が共存したり、石組のカマドを有するという点から、古墳との関連も考え検討していかなければならない課題である。

今回の調査は、この地域の古墳時代後期の歴史を考える上で、重要な資料を提供したといえよう。

(ますだ・たかひこ＝調査第2課第1係調査員)

注1 高橋美久二「大成古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1968)』京都府教育委員会) 1968



高山3号墳全景(空撮)

野崎古墳群の埴輪と土器と土製模造品

小山 雅 人

1. はじめに

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡のひとつ、野崎遺跡の発掘調査で新たにその存在が知られた野崎古墳群の遺構に関しては本誌前号で報告したとおりである。今回は、この6基の削平された古墳の周濠等から出土した遺物の整理結果を報告する。

今回の調査で出土した遺物の量は、整理箱20箱程度であり、整理の結果、実測まで行い得た遺物の内容は第1表に示したとおりである。表から読み取れるように、野崎古墳群の出土遺物のうち顕著なものとしては、非常に保存状態の良い円筒埴輪、綾部市内では初めての出土例となった家形埴輪、それに市内はおろか京都府でもほとんど例を見ない土製模造品が挙げられ、主としてこれらの遺物の観察結果を報告すると同時に、各古墳の年代決定の手がかりになると思われる須恵器と土師器についても若干報告したいと思う。

報文中の遺物番号は、通し番号であり、表・実測図・写真図版等においても共通である。

2. 野崎1号墳の円筒埴輪群（第1図・図版第1，4）

1号墳では前号で報告したように、周濠全周の東側を除いた3分の2において埴輪片が出土したが、特に南側で出土した4個体(1～4)は若干の欠損はあるもののほぼ完形に復原でき、西側の4個体(5～8)については、図面上で完形となる程度に復原できた(前号第3図の1号～6号円筒埴輪は、今回報告の各々1～6に相当する)。この8個体以外に

第1表 野崎古墳群出土遺物一覧

古 墳	種 類	主 体 部	周 濠 (10・27は溝1出土)					
			埴 輪	須 恵 器	土 師 器	手 捏 土 器	土 製 模 造 品	
1 号 墳	円 墳	(削 平)	円筒 1～8	11				
2 号 墳	円 墳 か	(削 平)	家形 9	12			44	
3 号 墳	円 墳	(削 平)		13～15	16～24	42・43	39～41	
4 号 墳	円 墳 か	鉄鏃3点	家形 10	25・27	26			
5 号 墳	前方後円墳	(削 平)		28～32	33～36			
6 号 墳	円 墳 か	(調査地外)		37・38				

については、細片化しており復原は不可能に近い状態であるが、仮にすべてが接合したとすれば、3個体分程度の量である。

1号墳の円筒埴輪の内、7だけは表面橙褐色、内部灰褐色を呈するやや軟質の焼成であるが、1～6・8及び残った破片すべては暗赤褐色を呈する焼成良好な土師質である。黒斑は見られない。復原した8個体は、大きさから2種に分けられる。高さ35cm前後でタガが2条の小型品(1～6)と、高さ50cm弱でタガを3本有する大型品(7・8)である。

小型品6点の器高は、最大が3で35.3cm、最小が6で33.5cm、平均して34.5cmである。口径は、最大が5で27.5cm、最小が6の21.7cm、平均24.3cm、底径は、最大が5の17.2cm、最小が6で14.0cm、平均15.1cmである。円筒埴輪としてはかなり小型である。

外面調整は、全面タテハケであるが、底部下半はナデ調整によってハケが消えている例が多い。タガを挟んだ上下のハケは連続しており、タガの取り付け前に底部から口縁部へやや左傾しながらかき上げている。

内面調整はナデが主体であるが、一部にハケが消されずに残っている。口縁から6～7cm下まではヨコハケを施している。タガの裏面にあたる個所では指おさえが目立ち、底部近くでは強い指ナデが見られ、外面のナデとともに、底部調整の痕跡を残している。

2条のタガの断面は低い台形である。円筒に粘土紐を巻きつけ、断続的な指おさえによって仮に貼り付けた後、タガの上面と側面のみを2本の指で、断面が内彎する程強くナデで固定しているが、下面については指で押さえたままになっている。

透し孔は、直径4～6cmの円形で、胴部の相対する位置に1対のみ穿たれている。

大型の2点(7・8)は、いずれも周濠の北東部で出土したものである。7は推定の高さ46.7cm・復原口径25.6cm・底径12.8cmであり、8は高さ48.9cm・口径27.2cm・底径16.0cmを測り、上述した焼成の違いにかかわらずほぼ同様の大きさである。内外面の調整は両者一致するとともに小型の1～6とも同じと言ってよい。器高に合わせて1本多くなった3本のタガの接着法も小型品と同様である。透し穴は、2段になった体部に1対ずつ直交させて、互い違いに配している。

以上報告した特徴から見て、野崎1号墳の円筒埴輪は川西編年のV期に相当する。しかし、後期の円筒埴輪としてもかなり小さく、また、タガが2本であれ3本であれ、差別なく同様の接着法を用いている点は、この野崎の円筒埴輪の特徴と見られよう。

中丹地方の円筒埴輪は、現在まで16基の古墳(綾部9基・福知山7基)でその存在が知られているが、断片的な資料が多い。後期例として、稲葉山10号墳の資料がまとまっているが、野崎例とはかなり異質である。また、以久田野78号墳の埴輪片は須恵質であり、タガの接着法も異なっているようである。^(注2)



第1図 野崎1号墳の円筒埴輪

3. 野崎4号墳の家形埴輪 (第2図・図版第1, 10)

この家形埴輪の出土状況と4号墳への帰属については、前号で報告した通りである。当初、家形であることすらわからず、復原はかなり困難な印象を受けたが、接合を試みるうちに、相当数の破片が残されていたことが判明し、どうにか全体をうかがい知るに足る程度には復原できたものと思われる。

寄棟(四柱)造りで、堅魚木の上端までの高さ81cmを測る。底部で平部の幅は44cm、妻部の幅は27cmである。底部での横断面は隅丸長方形を呈するが、上部に行くに従って隅丸部分のアルが大きくなり、屋根部に至っては、四方流れのはずが、稜線すら定かたなく、むしろ楕円錐形とも言うべき形を呈する。

製作工程を追って細部を観察すれば、先ず壁体部(屋台)は、帯状の粘土を環にしたものを6~7段積み上げて作っている。この時、コーナー部分を意図的に隅丸にしたかどうかは知るよしもないが、結果として上述したような形になっている。屋根部は、壁体に続けて、次第に小さくした環状の粘土を10(~12)段に積み上げて成形している。その後に屋根の出の小さい軒先部分を貼りつけて作っており、この軒先部分は全周の大部分が剥離して失われていた。

この段階で器体外面全体に非常に細かいハケ目で覆っている。次に、床を表わす凸帯を円筒埴輪のタガの如くに貼りつけて、両側を丁寧にナデた結果、この部分の本体のハケが消えている。入口は、平部の中央に縦20.4cm・横9.2cmの長方形の穴を抉って表現し、ヘラ描きの線刻で周囲を囲っている。この線刻は床凸帯上部のナデよりも後である。入口のある面に向かって右手の妻部上方に隅丸方形であつたらしい透し穴(窓か)を抉っている。

屋根の上端部の破片は少なく、推定によって復原したところもあるが、以下のものであつたと思われる。横断面楕円形で上方にすばまってきた屋根は、17.6cm×6.5cmの楕円形に開放したままである。泥障板や妻隠板の破片はなく、またその痕跡も残っていない。ただ、屋根最上段の環積み粘土が、すぐ下の段の上部に重なるように貼りつけられ、若干ではあるが、外側に膨らんだ様相を呈している。あるいはこれが泥障板を表わしているのかも知れない。この上端部は波状を呈しているが、その波の1つおきに堅魚木が載っていたらしい。堅魚木は、1本しか出土していないが、棒状の両端を上げた形態であるために、上端部に4本以上は並べられないので、3本を吹き抜けの棟に載せていたものと復原した。

この家形埴輪の胎土はかなり密で、構成はやや軟質である。色調は部分によってさほど変わることなく表面淡橙色・内部淡褐色を呈する。

中丹地方の家形埴輪は今まで、中期後半の中坂1号墳(切妻造と入母屋造)、同2号墳(入母屋造)、後期の稲葉山10号墳等の福知山市の例が知られていたが、今回の野崎例は、

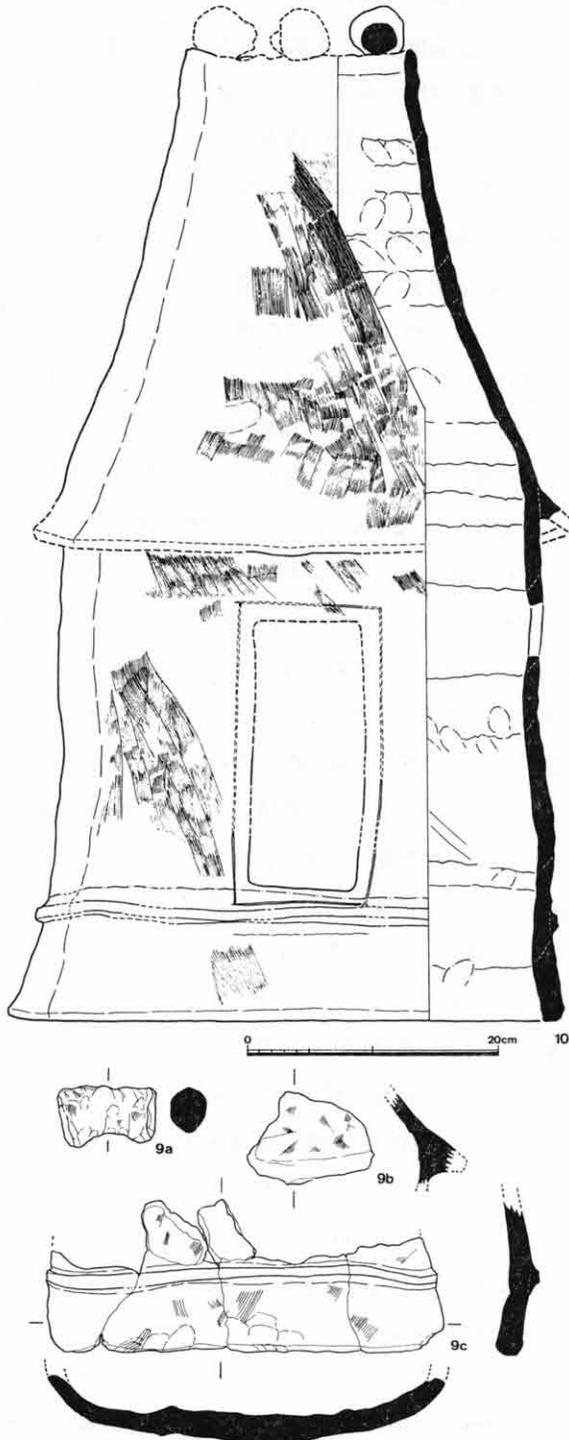
綾部市では初めての出土となった訳である。

寄棟造の家形埴輪は、全体の形が判かるものが全国で30数例出土しているが、野崎例と同型式と言えるものはあまりない。プロポーシオンは関東の高萩式に近く、横断面が隅丸方形を呈する点では同じく関東の美土里式(注3)に似ている。また、棟上を透し、その上に堅魚木を渡す例は、千葉県(注4)の殿部田1号墳や殿塚古墳等(注4)にあり、特に堅魚木の形態は、これらに酷似する。

しかしながら、柱や横棧を立体的に表わさず、装飾を省いた造形は、やはり近畿地方の諸例(注5)に近く、奈良県や三重県で出土している石見遺跡例タイプ(注5)に含めておくのが妥当であろう。

*

野崎2号墳の周濠からも家形埴輪と思われる破片が出土している。いずれも同一個体に属すると思われる。比較的大型の破片(第2図9a~9c)を見ると、4号墳と同様の家形埴輪になるようである。壁体部の角は、4号墳例と同じ隅丸方形であるが、屋根部の成形は屋根と軒先とを連続して作っている点異なる。胎土はやや砂っぽく、赤褐色を呈する。



第2図 野崎古墳群の家形埴輪

4. 野崎古墳群の土器 (第3図・図版第1, 27)

当古墳群から出土した土器片の内、図示可能なものは40点程度である。ほとんどが古墳の周濠(周溝)の埋土から出土した遺物である。必ずしもその古墳に伴うとは言えないかも知れないが、一応古墳別に概観する。

1号墳からは、土師器細片以外には須恵器の小型短頸壺(11)が出土しているだけである。須恵器第2型式前半のものであろう。円筒埴輪の共伴遺物として矛盾はない。

2号墳の須恵器片(12)は、後述の27と同じ(短頸?)壺と思われ、底部には同様の平行タタキ目を残す。体部はケズリの後ナデ調整をしている。

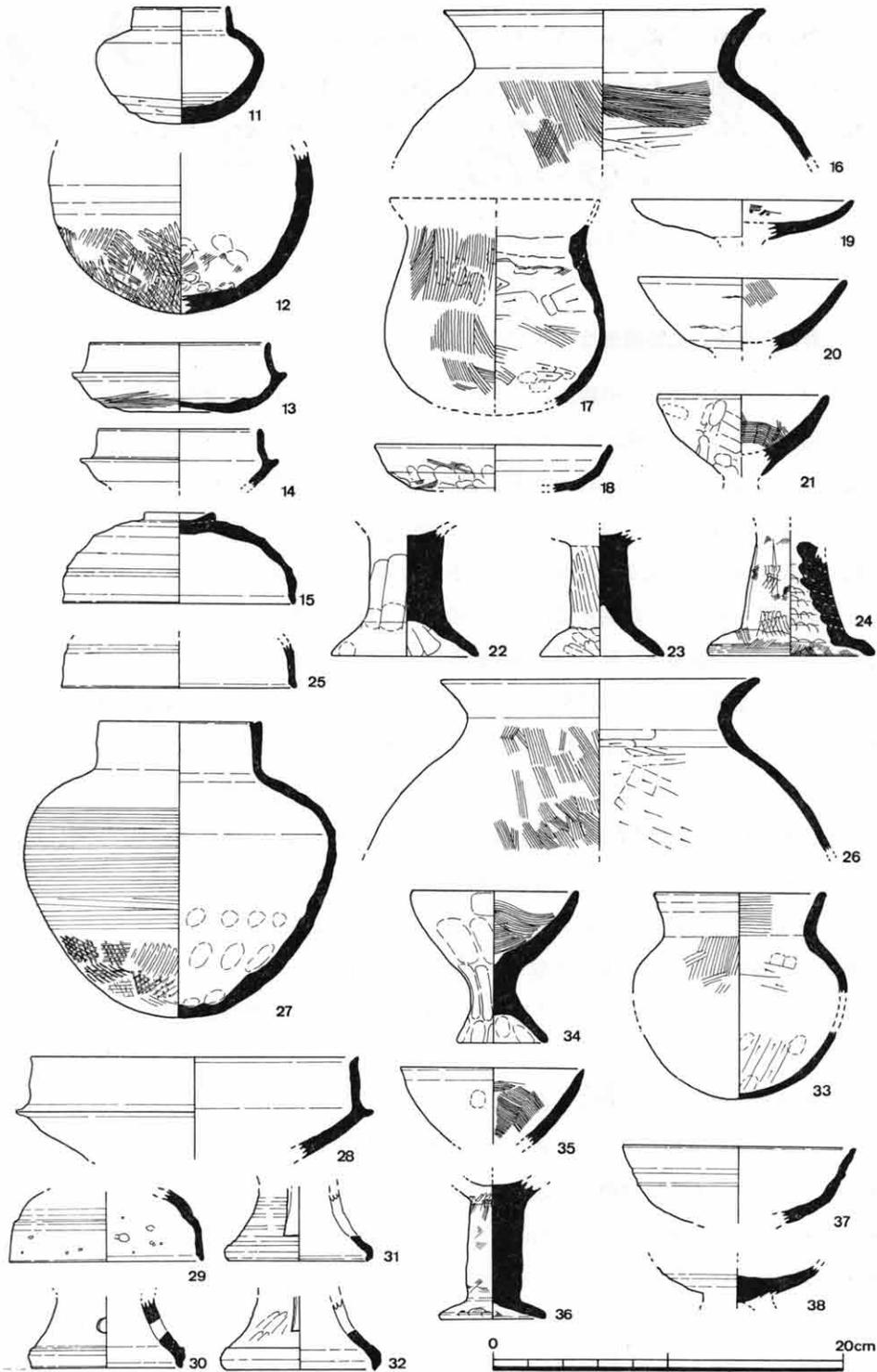
3号墳からは土器がややまとまって出土した(13~24)。須恵器蓋杯の身(13)は、口径10.4cmを測る。口縁端部には面を作らず、丸くおさめている。高杯蓋(15)は、焼成軟質である。口縁端部内面に面を持つが、天井部と口縁部境界は、浅い溝でわずかにそれとわかる。土師器には、甕(16・17)と高杯(18~24)があるが、21は(34とともに)台付鉢と言うべきか。高杯の脚部には中実のもの(22・23)と、中空で内面を調整せずに粘土紐を積み上げた痕跡を露骨に残すもの(24、他に数点)とがある。甕(16)は、4号墳の26とともに、青野・綾中の7世紀前半の甕の前身と言ってよいほどよく似ている。

4号墳の周溝から出土した土器は、須恵器蓋(25)と土師器甕(26)であり、須恵器短頸壺(27)は、溝1で家形埴輪(10)と共伴していたものである。頸部はやや長めで直口壺と言ってもよいが、蓋をかぶせて焼成したらしい痕跡が肩部表面にあり、有蓋短頸壺と見ておく。体部は整美な倒卵形で、底部に平行タタキ目を残し、体部はカキ目である。類例が少なく、編年の位置づけは難しいが、口縁端部の広い面に溝をもつ点や底部のタタキ目等をやや古い要素と考え、須恵器第1様式の末頃と見ておきたい。

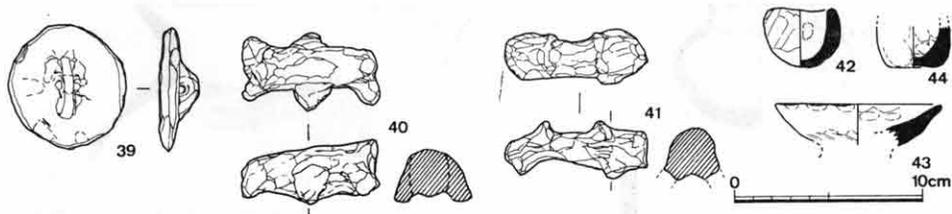
5号墳周濠からも3号墳とともに多くの遺物が出土した(28~36)。須恵器は、杯蓋(29)・短脚有蓋高杯の脚部(30~32)など古相を呈しており、第1型式に属するものと考えておく。須恵器(28)は、杯か高杯の身であろうが、口径がかなり大きい。焼成軟質のこの須恵器は破片であり、口径も復原値(18.8cm)であるが、さほどの誤差が出ているとは考えにくい。受部の立ち上がりも口径に比例して大きく、大型の杯と考えておきたい。土師器には、小型の甕(33)や台付鉢(34・35)がある。

6号墳は、図示した高杯片2点(37・38)が挙げられる程度である。

以上、概略報告した土器の内、須恵器は陶色編年のTK47(Ⅰ-5)型式前後からTK10(Ⅱ-2)型式に比定され、5世紀末から6世紀中頃のおよそ半世紀にわたっている。古墳周辺は全面発掘したが、古墳関係以外の遺構・遺物は江戸時代まで下るものである。従って、上記した6世紀前半を中心とする時期を、野崎古墳群の造営年代と考えることができる。



第3図 野崎古墳群の土器



第4図 野崎3号墳の土製模造品

5. 野崎3号墳の土製模造品 (第4図・図版第1, 39・40)

京都府では非常に珍しい遺物として、3号墳の北西に位置する陸橋部(前号22頁参照)の両側の周溝内から、土製模造品が4点出土している。

鏡形土製品(39)は、直径6.3~6.6cm・厚さ1.0cm・鈕の高さ1.1cmを測る。手づくねで作られ、鈕部分は貼り付けによっており、径5mmの孔を通してている。

獣形土製品(40)は、長さ7.3cmを測る。手づくねである。脚と見える突起が6か所にある。実測図の左側の4つが貼り付けであるのに対し、右の2つ(1か所は欠損)はひねり出しているところを見ると、前者が4本の脚を表わすのであろう。とすれば尾が表わされていないことになる。一方、右側を頭部と見ると、ここにも問題がある。上述の下方両側の突起物と上方にややひねり出されたいまひとつの突起がそれぞれ何を表わすのかわからない。従って、この動物が何であるか明言できないが、あるいは牙を強調した猪かも知れない。

馬形土製品(41)は、長さ7.5cmを測る。頭部・4本の脚・尾が欠損しているが、背部に鞍と思われる部分が作ってあるので馬と判断した。

42~44は手づくねのミニチュア土器である。44だけは2号墳の周溝から出土した。42は完形品で口径3cm・器高3.1cmを測る。43は径8.8cmで、土製模造品としてはやや大きいようであるが、全体に雑な造りの3号墳の高杯の中で一際不細工であるのでこの項で報告した。

土製模造品と呼ばれる遺物^(注7)は、石製模造品の盛行の後をうけて古墳時代後期にはほぼ全国的に見られる祭祀遺物である。遺跡は集落や祭祀関係が多く、野崎のように古墳からこの種の遺物が出土したのは11例(3.13%)にすぎない。遺物の種類は、手捏土器(44%)と丸玉・勾玉・管玉等の玉類(47%)が圧倒的に多く、鏡(3%)がそれに次ぐ。その他の人形・馬・猪・農工具・什器類・舟等の模造品が出土した遺跡はかなり限られる。府内では中久世遺跡など数か所が知られているが、土玉・土馬・手捏土器が数例報告されている程度である。野崎の鏡・獣・馬・手捏土器というセットが本来のものかは不明であるが、古墳の周溝から出土したという点もあわせて、今後の課題としたい。

6. 野崎古墳群一総括

本誌前号で、遺構から見た野崎古墳群の特徴を、1. 築造時期、2. 周濠(周溝)と陸橋、3. 埴輪の出土、4. 前方後円墳の4つの観点からまとめて見たが、遺物の概要を見た今、その総括を試みたい。

野崎古墳群の築造時期に関しては、出土土器の項で触れたように、5世紀末から6世紀前半ないし中頃と見てよかろう。しかし、各古墳の築造順序については、遺物の検討を終えた今も、まだ確信はないが、一応結論じみたものを提示して、叱正を乞いたい。

(1) 1号墳は、4号墳→3号墳→1号墳、及び2号墳→1号墳という周溝の切り合い関係から見ても、後期に属する円筒埴輪から見ても、6基の内、最後に位置づけられる。

(2) 比較的まとまった土器資料が出土した3号墳と5号墳の土器相を比べてみると、5号墳(TK47)→3号墳(MT15)の順序が得られる。一方、2・4・6号墳の土器は各々1～2点で位置づけが難しいが、あえて言うなら2・4号墳の土器は5号墳、6号墳のは3号墳のそれに近いように思われる。

(3) 2号墳と4号墳は、墳丘規模(径9mと8m)が似ており、断片的な資料ではあるが、出土遺物はそれぞれ家形埴輪と須恵器短頸壺がセット(?)のように出土したが、円筒埴輪を持たないという点が共通する。一方、3・6号墳も墳丘規模(径15mと12m)は近い。

(4) 5号墳は全長26mの前方後円墳であり、後円部に限ってみても径19mと群中最大である。また、出土土器も最古の様相を呈しており、この古墳群の盟主墳と考えられる。おそらく5世紀末の5号墳の築造を契機として6世紀前半期に群集墳(あるいは相互の距離を見れば密集墳)が形成されたのであろう。

以上の諸点から、当古墳群の築造順序としては、5号墳→4号墳・2号墳→3号墳・6号墳→1号墳と考えておきたい。

内部主体に関しては、削平された古墳群であり、推測にとどまらざるを得ないが、4号墳に主体部底部が残っており鉄鏃3点(内1点は篋被広鋒片丸造三角形式で、他の2点は同様であるが両丸造)が出土した。他の古墳においても石室を示唆する所見は皆無で、後期初頭から前半(TK47～TK10)の当古墳群に、現在のところこの地方では高谷3号墳(TK10)が最古とされる横穴式石室の存在を無理に求める必要はなく、6基とも木棺直葬系と推定される。

周濠に関しては、当地域では5世紀前半に段築・葦石・埴輪・周濠を具備して突如出現する菖蒲塚・聖塚の2大方墳に始まるが、5世紀中頃以降前方後円墳等には受け継がれず、小型の方墳の中坂1～4号墳や、小型の円墳に溝を半周前後掘った高谷古墳群を経て、前方後円墳を含む6基に周濠(溝)を設けた当古墳群に至る。その後、後期中葉から後半にか

けの栗ヶ丘古墳群^(注8)に引き継がれている。

周溝を掘り残して陸橋を数か所に設けるという当古墳群の顕著な特徴の類例に関しては、中期の方墳に同様の陸橋が見られる城陽市芝山遺跡^(注9)や、大阪府長原古墳群中の数基^(注10)があり、また長岡京市長法寺七ツ塚^(注11)にもそれらしい施設が見られるようである。円墳や前方後円墳にも例があるようで、今後資料を集めてみたい。本誌前号(25頁)に挙げた当古墳群でのあり方は、ひとつの視点となる。

先にも触れたが、2号墳と4号墳には奇妙に共通する点が多い。ともに1個体の家形埴輪を持ちながら、円筒埴輪は1片すら出土していない。墳丘の径は9mと8mで共に群中最小で、家形埴輪がもし墳丘頂上に置かれてあったとすれば、相当目立ったことであろう。両墳とも家形埴輪に須恵器の壺が共伴しており、何らかの祭祀的行為が行われたか、呪的意味が込められていたのかも知れない。家と壺の組み合わせはともかく、形象埴輪のみで円筒を伴わない例はあるにはあるが稀である。

当古墳で円筒埴輪列を墳丘裾に巡らせていたのは、これも小規模な1号墳(径10m)であった。上述したように、前方後円墳の5号墳は、当古墳群中最古で盟主と見られ、埴輪の使用はこの古墳、あるいはそれに次ぐ3号墳にこそふさわしいと思われ、事実稲葉山古墳群(MT15前後)でも盟主の前方後円墳10号墳が円筒や多彩な形象埴輪を持っていたのである。しかしながら、当古墳群での埴輪のあり方は、墳丘が大きければ有力、埴輪を持っておれば傑出していると考えがちの我々に、ひとつの教訓を与えてくれたようである。

3号墳の土製模造品については既にその項(20頁)でまとめておいたが、府下では珍しい遺物であり、広く他府県に類例を求めていた。ところが最近、同じ綾部市の三宅遺跡でこの種の遺物(鏡等)が出土し、削平された古墳の周溝も検出された。今後、この報告を待って再度検討してみたい。

最後にこの古墳群と周辺古墳との関係について概略まとめておきたい。野崎古墳群を後期前葉に位置づけたが、これに後続する古墳として横穴式石室をもつ狐塚古墳(本誌前号第1図3)と上杉1号墳(同9)がある。いずれも全壊しており、遺物も充分には報告されていないが、後期中葉頃と考えられる。野崎での埴輪の使用は上杉1号墳に受け継がれている。この古墳は綾部市では石室を持つ最初の前方後円墳であると同時に、20基近く営まれたうち最後の前方後円墳である。野崎古墳群に先行する古墳は決定しがたい。谷を距てた対岸の高槻茶臼山古墳(同4)の時期が決定できないからである。同墳で採集されたという須恵器に関しては諸説あって今だ決着を見ていない。いずれにせよ、野崎古墳群は、上杉1号墳と茶臼山古墳のいずれも当地方最大級の前方後円墳の狭間にあって、小規模ながら極めて特異な古墳群の存在を我々の知見に加えたのである。

付論 寄棟造家形埴輪の分類

野崎4号墳の家形埴輪を全国の出土例の中に位置づけるために、試案として30数例の全体がほぼ明らかな寄棟造の家形埴輪を分類してみた。^(注12) 現在たどりついた方法のひとつは、屋根部と屋台部のそれぞれのプロポーションを高さ/幅長×100の指数で表わし、グラフ化する方法である。その結果、6つのグループに分かれ、それぞれが外観と一致し、またある程度は時代差も表われているようである。

A₁(宮山)型(屋根比:45前後, 屋台比:40~60)——奈良宮山古墳例に代表され、奈良鳥見山、福井西塚古墳に類例がある。どっしりとした安定感があり、造りも丁寧である。いずれも中期に属する。A₂型として、高床倉庫の群馬赤堀茶臼山古墳例があり、屋台比がやや大きい(80)。また、岡山女男岩遺跡の弥生後期に属する器台付家形土器の家部分もA型の寄棟造である。

B₁(蕃上山)型(屋根比:60~70, 屋台比:75~105)——大阪蕃上山古墳例のほか、島根平所遺跡、京都青山1号墳、奈良勢野茶臼山に例がある。A型に比してやや屋根・屋台とも高くなっているが、まだ家としての均衡を失なっていない。中期末から後期初頭に集中する。

B₂(長瀬)型(屋根比:70前後, 屋台比:70前後)とB₃(経の塚)型(屋根比:56, 屋台比:82)は、鳥取長瀬高浜遺跡と宮城経の塚古墳の例であり、網代・押縁や柱などを立体的な造形と線刻で表現している。いずれも中期の地域色であろう。

C₁(高萩)型(屋根比:90~120, 屋台比:80~110)——後藤博士のいわゆる「高萩式」で、屋台もさりながら屋根部の高さを特に強調している。千葉殿部田1号墳例もこれに含まれる。外観的な特徴としては、屋台部の柱の他に節状隆起帯を3~5本巡らせた独特のものである。後藤博士によって家(本稿のA・B型)と高家(同じくC・D型)の中間様式とされた群馬の2例(「聚成」No.102と89〔各々、図では100と86〕)は、C₂と細分しておくが、屋根の高さがC₁ほどには強調されていない。千葉殿塚古墳例は、上記殿部田例に近いが、装飾的部分がほとんどなく、ここではC₃としておく。C型はいずれも関東地方の後期に属する。

D(石見)型(屋根比:100~140, 屋台比:105~145)——屋根・屋台ともに高さを強調して行きついた究極の高家である。奈良石見遺跡、三重木ノ下古墳、同鈴鹿市個人蔵例、それに京都野崎4号墳例を加えると、不明の鈴鹿市例を別にして、いずれも近畿の後期の高家と言えよう。東国の高萩型に比べて、外面にはヘラの簡単な線刻程度しか表現されていない。

E(美土里)型(屋根比:推定90前後, 屋台比:150~180)——屋根は高家としてさほど高

くはないが、鏢状の突帯を持つのを特徴とし、装飾の少ない屋台は極端に高く、かつ横断面は隅丸方形を呈する。後藤博士の「美土里式高家」である。

F(白石茶臼山)型——高床式建物の床下が高く表わされ、二階家と見まごう形の一括するが、床下の柱だけの吹きさらし部分はずして考えると、上記のA～Eの各型式に含めることもできる。群馬白石稲荷山古墳例を代表とし、他に大阪一ヶ塚古墳、三重木ノ下古墳、同上出遺跡等に例がある。

以上の各型式をやや図式的に編年すれば、近畿地方ではA₁(中期)→B₁(中期末)と変化し、後期になると高さを異様に強調したDが現われ、これが前代のB₁と共存するという変遷が追える。一方、東国では中期のB₃からC₂を経て、東国後期に特徴的なC₁とEが出現するのである。このように見れば、野崎4号墳例は、近畿地方の寄棟式家形埴輪の系譜上の最後に現われるD(石見)型の後期初頭例として位置づけられよう。

(こやま・まさと=当センター調査第2課第3係長)

- 注1 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号, 1978
- 注2 綾部・福知山地方の古墳に関しては、『丹波の古墳Ⅰ』(山城考古学研究会), 1983, 及びその引用文献を参照されたい。
- 注3 後藤守一「埴輪家聚成」『上野國佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』所収, 1933
- 注4 『形象埴輪の出土状況』(第17回埋蔵文化財研究会<資料>), 1985
- 注5 注3, 及び末永雅雄「磯城郡三宅村石見出土埴輪報告」『奈良縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十三冊, 奈良縣 1935
- 注6 田辺昭三『須惠器大成』(角川書店) 1981; 中村 浩『陶邑』Ⅰ～Ⅲ(大阪府文化財調査報告第28・29・30輯) 大阪府教育委員会, 1976～78
- 注7 この項の数値は、「祭祀関係遺物出土地地名表」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集附篇), 1985の古墳後期とされる遺跡数・遺物総数を集計し、操作したものである。
- 注8 引原茂治「栗ヶ丘古墳群昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第23冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注9 小池 寛「芝山遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注10 古市古墳群研究会編『古市古墳群とその周辺』(摂河泉文庫) 1985
- 注11 原 秀樹 「長法寺七ツ塚古墳群第1次調査概要」『長岡京市文化財調査報告書』第17冊, 長岡京市教育委員会, 1986
- 注12 以下の例は, 注3・注4文献の他, 三木文雄『はにわ』(日本の美術 No.19, 至文堂), 1967; 『よみがえる古墳文化』(宇治市歴史資料館特別展図録), 1986; 『東海の古墳時代』(名古屋市博物館特別展図録), 1980, その他の報告書によった。

志高遺跡出土の縄文時代草創期の 土器をめぐる

三好博喜

1. はじめに

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和61年度事業として舞鶴市志高遺跡の第7次調査を実施した。ここで取り上げた資料は、当該調査に伴い、縄文時代前期の遺物が大量に出土したA地区の最下層部から検出したもので、縄文時代草創期にまで遡る可能性がある^(注1)と先に指摘した土器の一群である。

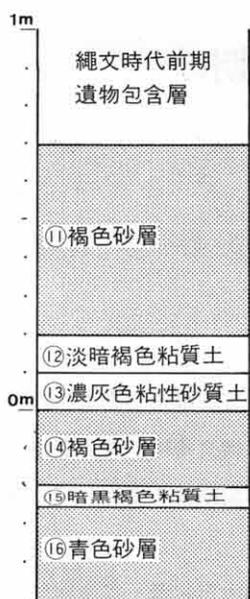
近畿地域でみると、草創期に属する土器の報告例は、京都府福知山市武者ヶ谷遺跡^(注2)で単独で出土した1個体があるだけである。近接地域でみても、福井県鳥浜貝塚^(注3)が知られているだけであった。したがって、志高遺跡で検出した草創期の土器群は、近畿地域でのまとまった土器群として重要なだけでなく、草創期の土器の出土例が多い南日本地域と東日本地域とに挟まれた希薄地域での出土資料としても価値の高いものと考えられる。加えて、土器の施文手法には、爪形文をはじめとして条痕文や種々の回転縄文・隆線をもつ土器などの多くのバリエーションが認められ、これらがひとつの様相を構成している可能性も考えられる。また、志高遺跡では、標高0m付近・現地表下約6mという極めて低位で草創期の遺物の包含層を確認した。検出した土器には、ローリングを受けたようすを認めるものが少ないため、遺跡の立地についても考慮すべき点がある。

以上のように、志高遺跡出土の草創期の土器は、多くの問題点を秘めているものと思われる。このため、報告をまとめるにあたり、大方の御指導と御教示とを仰ぎたく、ここに資料の紹介を行うこととした。拙稿を草すにあたり、片岡 肇・土肥 孝・宮崎朝雄・細田 勝・金子直行・中島 宏の各氏には資料を実見いただき、多くの御教示をいただいた。



第1図 志高遺跡と関連主要遺跡位置図

1. 志高遺跡 2. 武者ヶ谷遺跡 3. 鳥浜貝塚



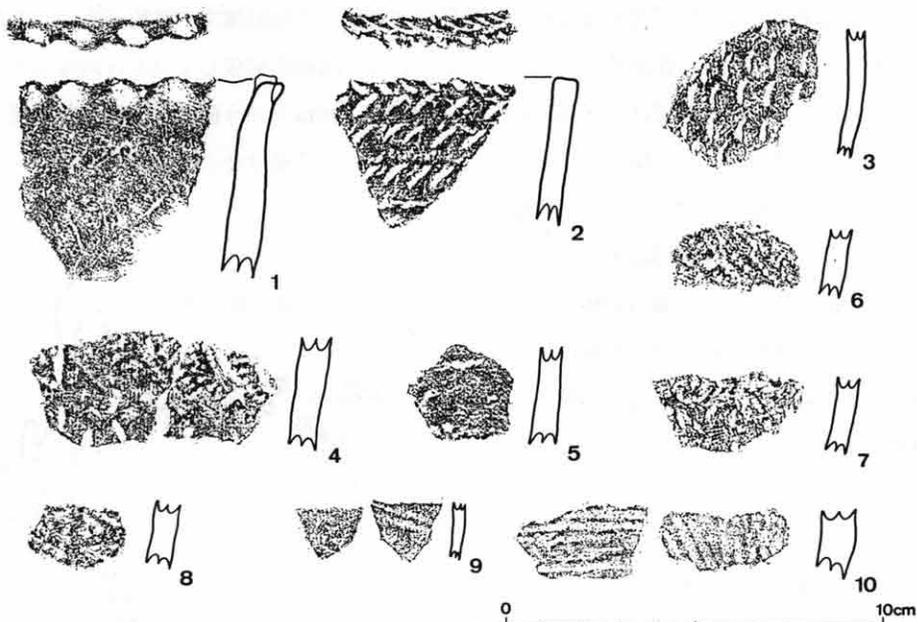
第2図 土層柱状図

記して謝意を表わしたい。なお、遺物は整理途中であり、すべてを図示し得た訳ではないことを断わっておく。

2. 層 位

弥生時代の包含層から2m近い無遺物層(粗い砂層)を挟んで縄文時代前期の包含層となる。前期の包含層は、約1.5m堆積しており、前期全般の遺物を層位的に包含していた。前期の包含層から、0.5m程度の無遺物層(粗い砂層)を経たのち、草創期の遺物の包含層に至る。草創期の遺物を確認できた包含層は、標高約0.2m~0mの間で、包含層は2層に分かれる。上層は12層の淡暗褐色粘質土で、下層は13層の濃灰色粘性砂質土である。地点によっては、この2層の間に緑黄灰色砂質土が間層として認められる部分もあった。なお、草創期の包含層の下層でも約0.2mの褐色砂層を挟んで15層の暗黒褐色粘質土を確認

したが、遺物を検出することはできなかった。この層の下には無遺物の青色砂層が続いていた。なお、草創期の包含層の掘削面積は、約50m²である。



第3図 13層濃灰色粘性砂質土出土遺物

3. 出土遺物

(1) 13層・濃灰色粘性砂質土出土遺物(第3図1～10・第4図11)

1は、口縁端部と口唇部とを棒状工具を用いて交互に押圧したものである。このため、口縁部は、小さな波形を連ねたような形態を呈している。1では頸部以下の形態を知り得ないものの、同様の口縁部形態をもつものに第6図27がある。27でみると、頸部には粘土紐を貼り付けて段帯を形成している。粘土紐上には爪形を押圧し、頸部下にも爪形文を配している。口縁部は、頸部からわずかに外反して立ち上がっている。

2・3は、爪形文を施す土器の一群である。いずれも横方向に整然と爪形文を配している。特に2は、口縁部形態を知り得る資料である。口縁端部には口縁部以下の爪形文の方向とは逆方向の爪形文を一行配している。このため口縁端部の爪形文は、横向きの「ハ」の字状となる。また、口唇部にも爪形文を連ねている。

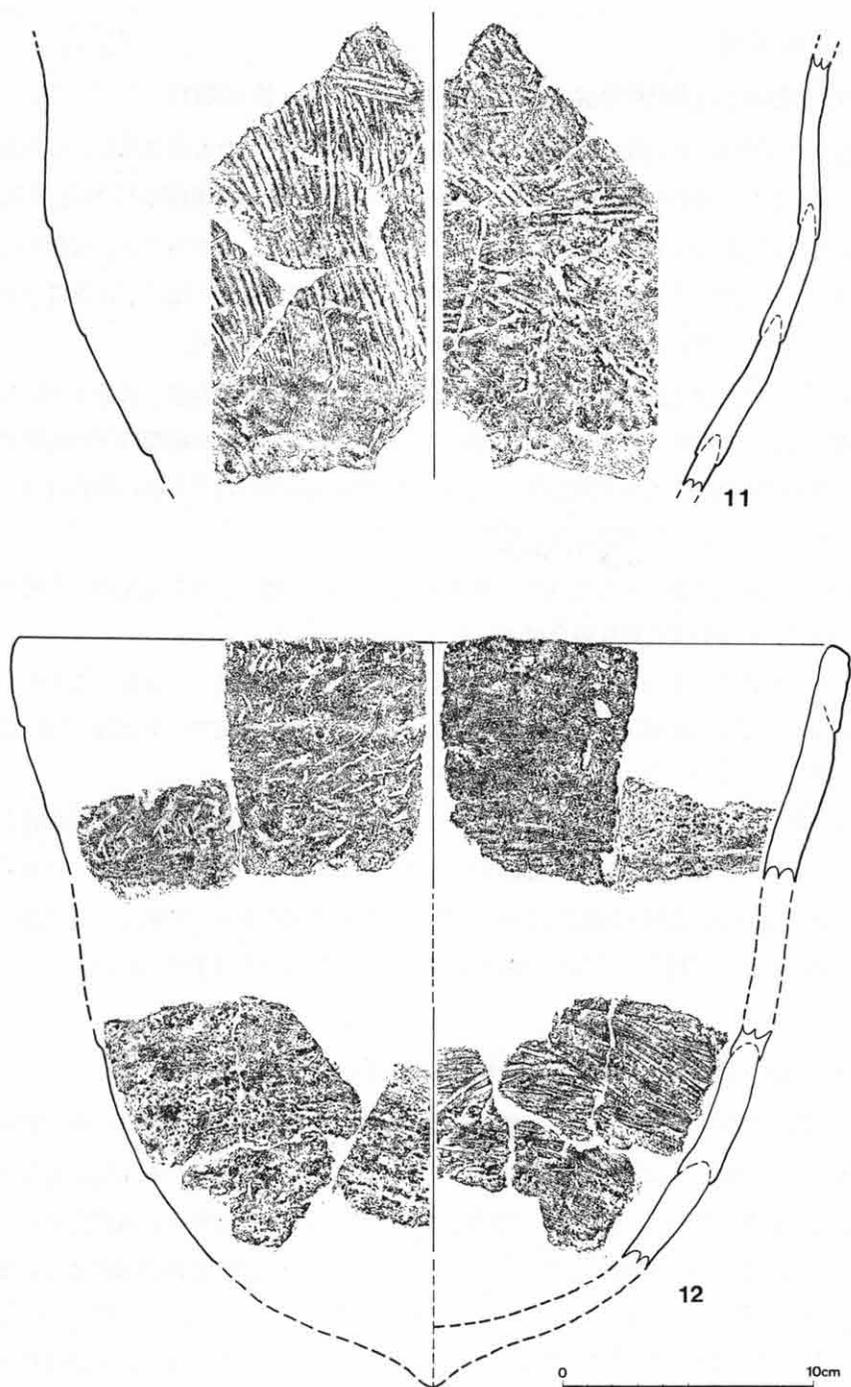
4は、回転縄文を地文として爪形文を施す土器である。地文となる縄文は、右撚りと左撚りの縄を撚り合わせた正反の合によるものと思われる。

5～8は、施文原体として縄が用いられている土器の一群である。5は、破片の上部に押圧縄文、下部に回転縄文が認められる。6はRLの単節斜縄文で、7は緩い回転縄文もしくは押圧縄文であろう。8は押圧縄文と考えられる。

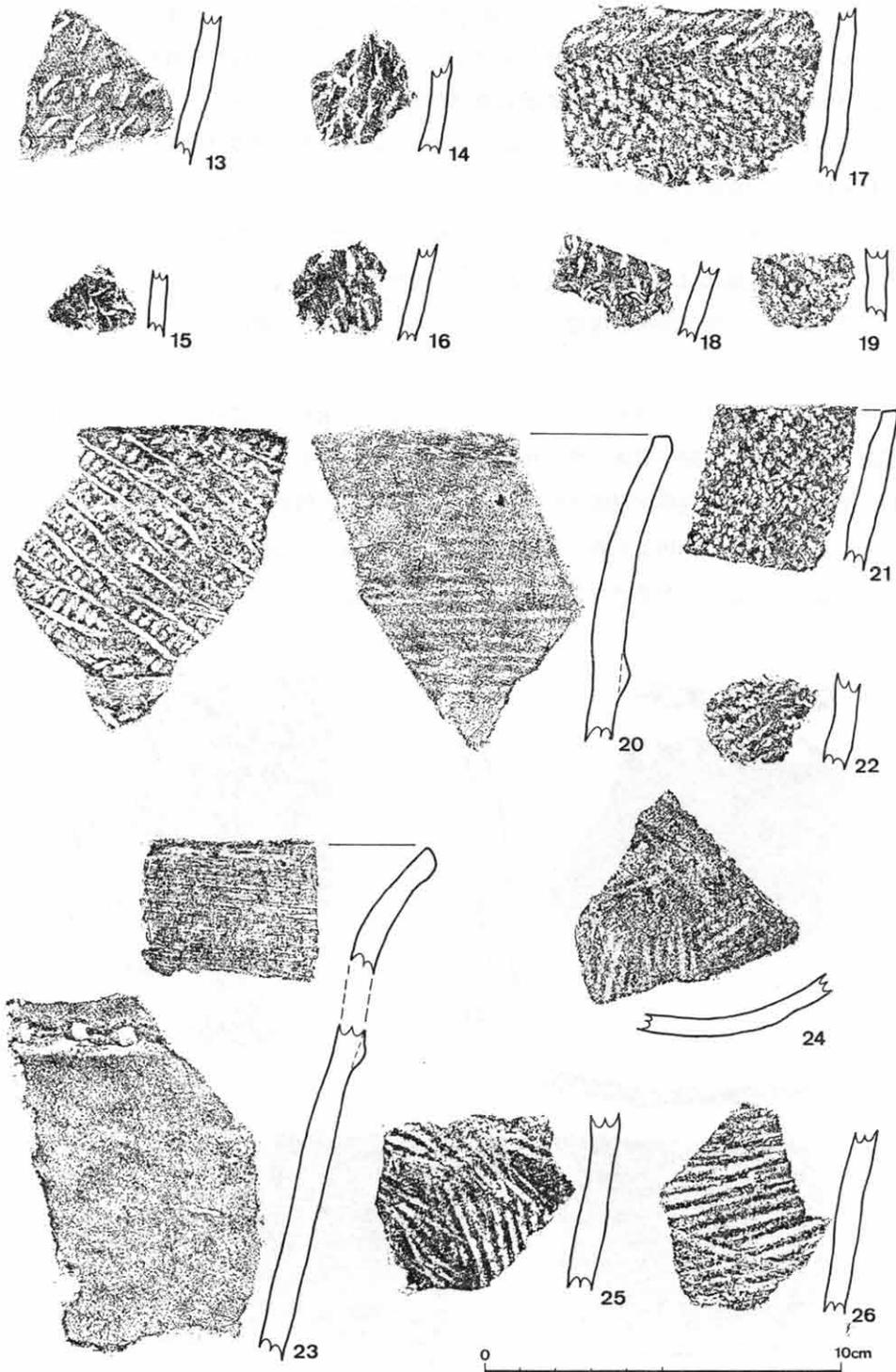
9～11は、条痕文を施す土器の一群である。9は内面、10は外面と内面とに条痕文が認められる。11は比較的大きめの体部破片で、粘土紐の継ぎ目を明瞭に残すものである。外面の条痕文はおおむね縦方向に施され、破片上部に横方向の条痕文を施して文様帯を構成している。内面の条痕文は、斜め方向が主で、横方向のものも若干みられる。

(2) 12層・淡暗褐色粘質土出土遺物(第4図12・第5図13～26)

12～16は、爪形文を施す土器の一群である。12は、比較的厚手の土器で、破片数も多く、底部を欠くものの、ほぼその全容を知り得る個体である。口縁部は、粘土帯の折り返しによってやや肥厚している。底部は、乳房状に納まるものと予想される。爪形文は、口縁端部から体部上半にかけて施されている。爪形文には、鋭い爪形文と鈍い爪形文との2種類が認められ、施文原体が複数存在しているようである。これらの爪形文の構成には規則制が認められず、任意に爪形文を施したように思える。また、口縁端部には縦方向の爪形文を小刻みに連ねている。体部内面には、下半部を主として条痕文風の擦痕が認められる。13～16は小破片であるため、明確にはわからない資料が多いものの、「ハ」の字状に爪形文を配置しているものと思われる。これらのうち、13は「ハ」の字状の爪形文が明瞭に表



第4図 13層濃灰色粘性砂質土および12層淡暗褐色粘質土出土遺物
11・13層出土 12・12層出土

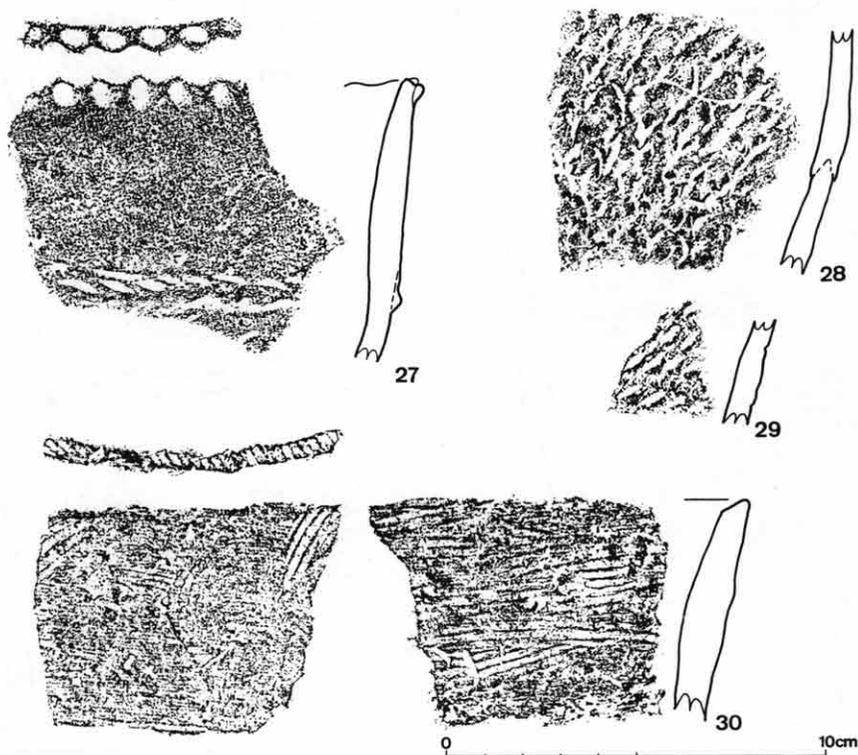


第5図 12層淡暗褐色粘質土出土遺物

われているものである。14は、爪形文が密に施されているため、互いに重なり合っているものの、やはり「ハ」の字状を意識しているものと考えられる。同様の資料としては、第6図28があげられる。28も爪形文が密に施されているものの、「ハ」の字状を強く意識している。15・16については、爪形文が施されてはいるが、その構成は明確にはわからない。

17・18は、回転縄文を地文として、爪形文を施す土器の一群である。17に用いられた縄文原体は、明確にはわからないものの、0段もしくは1段の3本撚りの原体を用いているらしい。破片上部には爪形文が数段にわたって施されているものと思われる。18は、RLの単節斜縄文で、縄文原体の端部が表われているものである。破片上部に爪形文が施されている。

19~22は、回転縄文を施す土器の一群である。19は、RLの単節斜縄文である。20は口頸部の資料であり、同一個体と思われる頸部破片が他にある。これらによると、頸部には粘土紐を貼り付けて段帯が形成されている。口縁部は、頸部からやや外反ぎみに立ち上がっている。縄文は、付加条を施した回転縄文で、口縁部と頸部段帯下に施されている。内面には横方向の条痕文が施されている。21は複節の斜縄文である。口縁端部は、角頭形を



第6図 草創期遺物包含層採集遺物

なしている。22はRLの単節斜縄文である。

23は、同一個体と思われる10片近い破片のなかから、口縁部と頸部とを抜き出したものである。これらによると、頸部には粘土紐を貼り付けて段帯を形成している。段帯の角部には、棒状工具によって押圧が加えられている。口縁部は、頸部からやや外反ぎみに立ち上がっている。口縁部外面には、横方向の条痕文が認められる。また、体部の内面にも部分的に条痕文が認められる。

24～26は、条痕文を施す土器の一群である。24は底部の資料で、底面四角形を呈している。25・26は、いずれも体部の破片である。

(3) 草創期遺物包含層採集遺物(第6図27～30)

27～30は、草創期の遺物包含層の断ち割りを行った際に出土した土器で、12層・13層のどちらに帰属するのか判断し難い資料である。

27は、既述のように1と同一個体と考えられるものである。28についても既述したように「ハ」の字状爪形文が施されている資料である。29は爪形文で、横方向に整然と連なるタイプである。30は、比較的大きな破片で取り上げられたものの、焼成が悪いためか非常に軟弱で、水に対してきわめて脆いものであった。このため、比較的残りのよかった口縁部破片でしか資料化できなかった。施文は、内外面ともに条痕文である。口唇部には、条痕文の原体で押圧が加えられている。

4. おわりに

最後に、志高遺跡における資料の特徴と若干の疑問点とを羅列しておきたい。

志高遺跡では、草創期の遺物を包含する層として、2つの層を確認した。まず、この層が、草創期の純粋な文化層なのか、由良川の流れによる二次堆積なのか、が問題となろう。数次にわたる志高遺跡の発掘調査の成果からすれば、奈良時代・平安時代にしろ古墳時代・弥生時代にしろ、遺構面は粘性のある砂質土もしくは粘質土にあり、同時にこれらの層が純粋な遺物包含層となっている。縄文時代前期の約1.5mという包含層のなかでも大きな混乱もなく前期初頭から前期末まで層位的に並べることができる。また、12層および13層から出土した遺物を見ても磨滅したものがあまりなく、30のような水に対して非常に脆い土器も存在することから、著しい流れのなかを流転してきたものが多いとは考え難い。層序の点だけで言えば、純粋な文化層とみても大過ないと思われる。この問題は、他の検証手段も含めて検討しなければならない問題である。

志高遺跡では、同一層でみても幾つかの種類の施文方法が認められる。それぞれの土器

を個別にみた時、爪形文土器に関しては草創期の土器としても間違いないものと思われる。しかし、11のような条痕文を草創期の土器とした場合には、異和感を持つむきが多いであろう。志高遺跡の草創期の遺物を包含する層位から出土した土器の施文手法の比率からいえば、何らかの形で条痕文手法を用いているものは、全体の1/3程度である。考え方を換えれば、条痕文手法が志高遺跡でのこの時期のひとつの特徴であるともいえるのではないだろうか。施文手法の多様性の問題は、まず層位的な問題を解決しなければならないが、隆起線文系土器→爪形文系土器→多縄文系土器という草創期の時間的序列に対し、これらは単なる施文手法の違いで、各種の施文手法が同時存在していたのではないかという疑問を生じさせることにもなる。

器形では、20や23・27のような土器が志高遺跡での特徴といえよう。いずれも施文手法は異なるものの、頸部に粘土紐を貼り付けて段帯を構成し、そこから口縁部にかけてやや外反ぎみに立ち上げるという器形が基本形となっているようである。

また、12や23・27が草創期の土器であれば、新しいタイプのものとなるのかもしれない。

以上、浅学のため多くの叱責を受ける部分も多々あることと思われる。可能な限り多くの方々に当該資料を実見いただき、御指導と御教示とを得ることを願うところである。

(みよし・ひろき＝調査第2課第2係調査員)

注1 三好博喜・肥後弘幸「舞鶴市志高遺跡第7次の発掘調査(A・B地区下層)」(『京都府埋蔵文化財情報』第23号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

注2 渡辺 誠・鈴木忠司他『武者ヶ谷遺跡発掘調査報告書』福知山市教育委員会 1977

注3 福井県教育委員会・若狭歴史民俗資料館『鳥浜貝塚 1983年度調査概報・研究の成果—縄文時代を主とする低湿地遺跡の調査4—』 1984

参考文献

『埼玉考古—埼玉考古学会30周年記念—シンポジウム資料』 埼玉考古学会 1986

盤上遊戯史から見た方格規矩紋について

小 泉 信 吾

1. はじめに

前漢末から後漢にかけて多く製作された鏡に、方格規矩四神鏡等がある。その一部は日本に舶載され、多くの出土例を数えている。今日では鏡の研究が進み、その背面の図像解釈は細部に及び、かなりの研究成果をあげている。特に方格規矩紋鏡については、林巳奈夫氏のすぐれた見解^(注1)があり筆者もほぼ賛同しているところである。しかしながら最近、中国・湖南省博物館の傅挙有氏が、『考古学報』1981.1「论秦汉期的博具，博戏兼及博局纹鏡」という論文を發表し、「方格規矩四神鏡及び獸紋鏡等を博局紋鏡とすべきである」という説をうちだした。筆者は鏡に関しては全くの素人で研究の対象外出であったが、「博局」すなわち「六博」及び「博戯」に関しての研究であったので見逃すわけに行かず一読してみた。傅挙有氏の研究は近来あまり深く研究されなかった「六博」について、豊富な出土例をあげ詳細に検討を加えている。従来、賭博及び遊戯に関しての研究者は皆無に等しく、その点では賞賛したい。しかしその詳細な検討にもかかわらず「六博」についての考え方には初歩的な誤まりがあり、六博を象棋(現代の中国象棋)^(注2)の前身とする見方には、とうてい賛成できず浅学にも筆をとることになった。

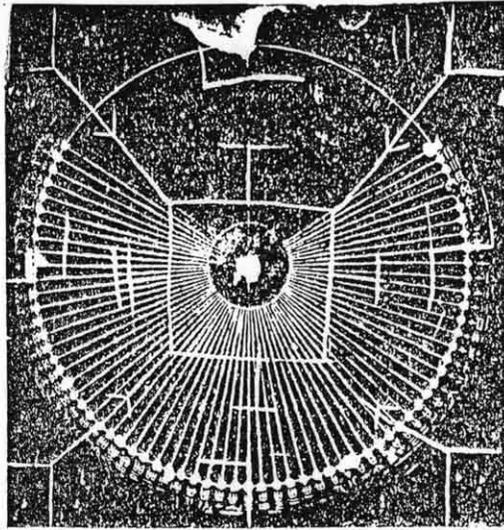
2. 方格規矩紋と六博との関係

鏡の中央の鈕を正方形で囲み、その外に、T・L・V字形の図形が配され、その間に四神や動物の図形が見られる、方格規矩四神鏡・獸紋鏡は古くはT・L・V^(注3)式鏡と命名されていた。そのT・L・Vの各字形について最初に研究した、中山平次郎はその著「支那古式鏡鑑沿革」及び「TLV鏡の發達に関する知見追加」^(注4)の中で、T・L・Vの形のルーツを前漢の中期から後期の草紋鏡・葉紋鏡の文様の一部分に当て、その変形された結果できたものとして詳しく述べている。また、方格規矩の図形が画像石に見られる遊戯に認められることから、早くもその関係を見抜いている。しかし中山は六博としては認識しておらず囲碁または将棋の類の勝負事としている点が惜しまれる。方格規矩紋と六博との関係をはっきり認識し、画像石及び磚に見られる遊戯盤に対し、六博であると明快にいったのは駒井和愛で、その著『中國古鏡の研究』^(注6)の中で論じている。駒井の論及した六博と規矩紋に対

する考え方は、林氏も賛同しており、筆者もほぼ同意見である。

他に方格規矩紋が日時計とする劉復^(注7)の説があるが、その説に対しては林氏が詳細に述べ反論しているので林氏の見解に譲りたい。

さて、方格規矩紋と六博との関係を知るうえで、駒井の考え方を引用すると次のようになる。「…上記博局及び日晷などに見ゆるTLV文即ち規矩文と漢式鏡に多い同じ文様との関係であるが、これに就いては天圓地方の思想に基く此の種の文様が博局の基道としても、日時計としても用いられ、またそれを施して装飾とするに適してゐた鏡鑑の圖様として應用されたものと看たい。…」この考え方は自然な見方であり的を得たものである。六博についての説明は、楊聯陞、水野清一、勞幹、李松福、傅掬有らの研究があり、また駒井自身も多く語っている。しかし、その競技内容やルールについてはかなり研究されているものの、その復原は現在の所まだ解明されていない。本



第1図 漢日時計図拓本「藏石記」より



第2図 「淮南子」天文訓方角名稱図、林巳奈夫氏論文より引用

稿では、方格規矩紋の解釈について駒井説及び林説を支持しているので、その概略を述べた後、六博についての私見を若干語ってみたい。前述の駒井説の天圓地方の思想とは、古代において天を円いものとし、地を方なるもの即ち四角形と考え、それに規(コンパス)・矩(曲尺)を配した見方であり、鏡のT・Lが地の四方、天の四方を表し、Vは天の四維を示した、とするものであった。一方、林説では駒井の天圓地方の考え方を認めながらも規矩紋に表されたT・L・Vの部分については、カンマン^(注9)及びプリング^(注10)の考え方を踏まえ、『呂氏春秋』・『淮南子』等の史料から次のような図像解釈をなした。T字形については、『淮

南子』墜形訓「墜形之所載，六合之間，四極之内」の高誘注に、「四極，四方之極，無復有外，故謂之内」とあり四極がすなわち四方の極みで、それ以上がなく故に「内」とした、という点であった。それゆえ鏡の図紋で正方形を以て象られた地の果てに出るT字形は水平の梁である極と、それを支える柱である、としている。さらに、V字形については、『淮南子』天文訓から引用して、北南を結ぶ子午と、西東を結ぶ卯酉を二繩といい、丑寅、辰巳、未申、戌亥を四鉤といい、東北を報徳之維、東南を常羊之維、西南を背陽之維、西北を號通之維、と呼び第2図のように示している。また方格規矩の図形で象られた宇宙では、四方の果に柱が立ち、上に梁をのせているのであるから、「天は蓋笠を象る」といわれるような「蓋」や頭にかぶる笠のような形をして、表象されることに疑いない、と考え、維は「蓋」の四方をつなぐ維に違いないと結んでいる。そして、この維をつなぐ装置に「鉤」があり、ゆえに「鉤」と呼ばれる位置にV字形のカギの手が配されているとしている。L字形については、「繩は直なり」と注されている点から考えて、「繩」はただのなわでなく、直線を引く糸ないしは繩とし、^(注13)第3図のトルフェン・アスターナ唐墓発見の、伏羲・女媧像の持つ、曲尺と墨壺の図に、L字状の取手のついた糸巻から、「L」はクランク付きの糸巻をシンボル化したものである、としている。簡単にまとめてみると方格規矩の図柄は宇宙全体を表現しており、地は正方形で、その四方の果てには、柱(T字の|の部分)がありその上に梁(T字の一の部分)があり、天が支えられ、天は「蓋」の形をなし、東西・南北を結ぶ線は、L字(L字形の糸巻)が配され、ドーム状の天をつなぎとめる、紐があり「維」と呼ばれ、その連絡する「鉤」(V字形で表わされている)があるという解釈になる。ただ林氏の解釈のなかで、方格規矩紋のT・L・V以外に見られる四乳ないし八乳の説明がないのが気にかかる。^(注14)一説にいわれるように、四方の門であるかは、今後の問題点として残したい。以上、方格規矩紋に対する解釈及び考え方はこのへんで止めるとして、次に六博について考えてみたい。



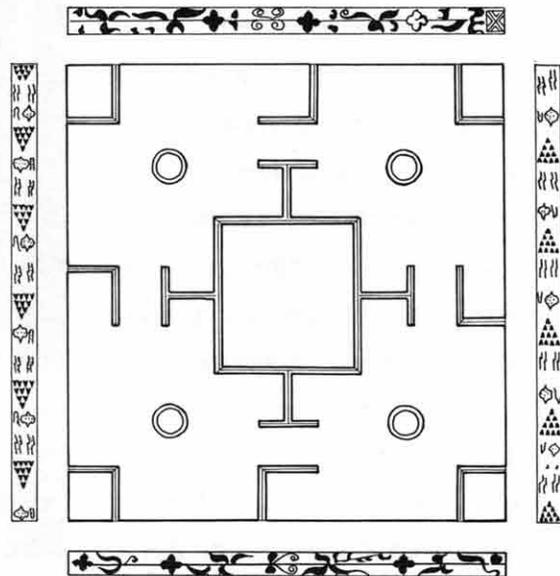
第3図 伏羲女媧絹画

3. 六博の成立と実体

^(注15)六博は、古代中国の春秋(B.C.770~B.C.476年頃)・戦国(B.C.475~B.C.221年頃)時代に行われ、秦から前漢にかけてかなり流行したゲームである。しかし、その実体があきらかにされたのは近年のことで、考古学の成果によるものが大きい。最近では、^(注16)馬王堆3号墓出土のものが有名で、特にそのセット一式の出土が目される。一方、文献では、『楚辞・招魂』に「篔簹象棋，有陸博些」とあり、朱熹集注には「六博以篔簹作箸，象牙為碁也」と記されており、このあたりが最も古い記録である。ただ、この記載に関しては、かなり解釈に誤りが見られ六博と象棋について、混同しやすくなっている。六博は、^(注18)云梦睡虎地秦墓、M11墓、M13墓出土のものについて考えてみると、1：局、2：棋子、3：箸の三つがセットになっている。日本的に解釈すると、盤(局)・コマ(棋子)・サイコロ(箸)となる。局については、現代でも使われており、将棋・碁をする場合、対局と言うし、その駒のない石の置かれているようすを局面という具合に存在している。局という言葉は多方面に使用され、今日では薬局・郵便局・放送局など種々使われている。簡単にいえば、しきる、かぎられた場所・部分の意味で、または役所などの事務を区分して取り扱う場所となる。盤は、四角にしきられたものとして、局が当てられたのである。

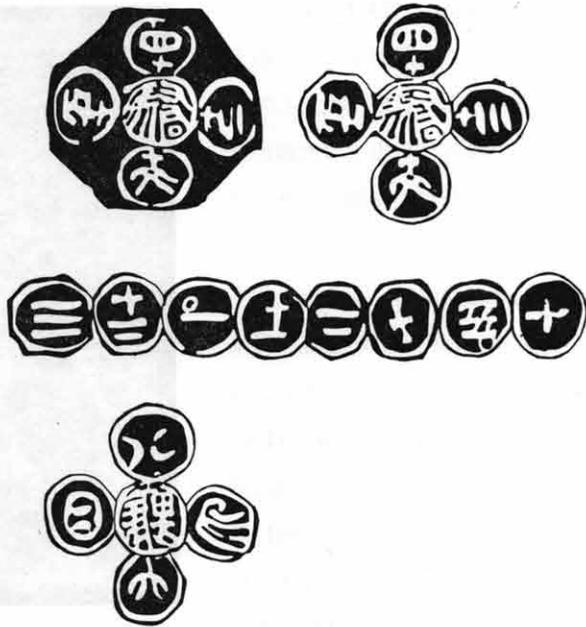
棋子は、骨製のもので感じとしては麻雀牌のようなものであり、それが象牙で作られれば、象牙の棋すなわち象棋と呼ばれたわけである。箸は現在われわれが日常使用している箸と若干異なり半截竹管状の箸であり、篔簹・箭・博と呼ばれている。この半截竹管状の箸を六本使用して、U面∩面の出た目によ

ってサイコロのように数え、棋子を進めることが、六博のゲーム内容である。そして博(篔簹・箭・博)を六本使うことから六博と呼ばれたのが始まりと考えられる。盤上ゲームにおいて、コマを使用しないゲームは今のところ存在していない。たとえそれが、簡単な棒切れであれ、路傍の石くれであれ、ゲームに使用されたなら立派なコマである。春秋・戦国時代の盤上ゲームは^(注19)博奕と呼ばれており、また囲碁とされていた。もちろん六

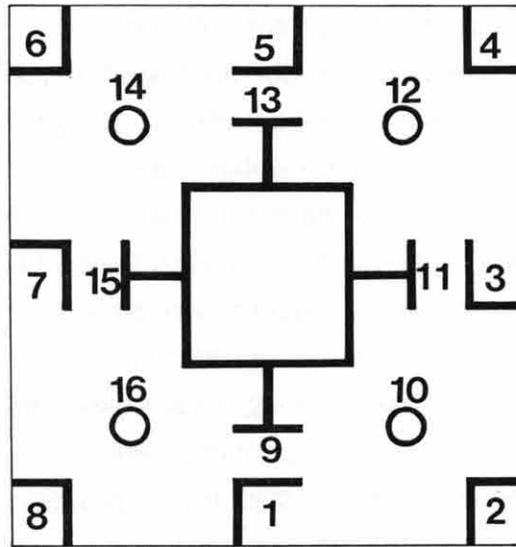


第4図 云梦大坟头一号汉墓出土六博盤平面図

博のことが主であろうが、博を使用するから博奕と呼ばれたのである。従って、六博が現在おこなわれている中国象棋の前身でないことは明白である。やはり中国象棋については別のルートで考えるべきであり、中国将棋に限らず、チェスや日本将棋のルーツは古代インドの盤上遊戯であるチャトランガに由来していることは明白である。また、六博がいかなるゲームかは、あまり明確ではないが、多少は研究されている。既略すれば、L字部のところに棋子をならべ箸の目によって、棋子を進めていき、中心の方形部に入ると梟という位になり、棋子の立方体の長辺を立てて梟碁となり特別の力が与えられ、他の棋子とともに敵陣を通過し、早く出発点に戻ったものが勝ちとなったのであろう。こういったコマを進める競争ゲームは、世界各地にあり、現在、最古と考えられるものは、上エジプトのアビドスで発掘されたものがあり、B.C.4,000年頃のものとされている。他の



第5図 馬王堆三号墓出土土甃拓本図



第6図 六博進行模式図（筆者想像図）

例については、ここでは挙げないが競争ゲーム自体がかなり古くからあったことは了解しただけのものであろう。さて六博であるが、これにも二種類あって、大博と小博の二つが存在していた。『顔氏家訓』卷七雜芸に、「古爲大博則六箸，小博則二甃」とあり甃とは、立方体のサイコロのことである。大博とは、六つの箸を使い棋子を進めるのに対し、小博

は一つの檠(サイコロ)を使い、その目で進むことができたのである。小博と考えられる出土例としては、長沙馬王堆三号墓出土の六博には、二つの球形をなす18面体のサイコロが付いている。同様なものに、湖北江陵鳳凰山10号漢墓^(注21)出土のものがある。時代は、馬王堆三号墓が、漢文帝十二年(B.C.168年)、鳳凰山10号漢墓が、恵帝四年(B.C.160年)頃であるから、ほぼ同時期といえる。前述の云夢睡虎地11号墓の年代が秦始皇三十年(B.C.217年)の頃であるから約50年の開き



第7図 中山王陪葬墓出土六博盤

がある。当然、六箸を使う大博は云夢睡虎地11号墓の六博が相当し、檠(サイコロ)を使用する、馬王堆三号墓及び鳳凰山10号漢墓のものは、小博に相当される。細い竹を半截した箸を六本用い、その白・黒の表裏の種別で目を決めていた。六博=大博が、球面状の18面体の檠(サイコロ)を使用し、一瞬にして目を判別できる小博になったのは、後のことであろう。すなわち、春秋・戦国時代に盛んに行われていた六博の改良と考えたい。盤上ゲームに限らず、およそ遊戯自体は、単純なものから発展し複雑化し、さらに淘汰されて時間の簡略化が進むものである。平面的な箸を使う大博より、球面の檠(サイコロ)が好まれたのも当然といえる。大博および小博の並行期はあったであろうが、小博が後出のものである可能性が強い。檠については第5図に示めたようなものになり、一から十六の数字があり、数字のほかに、駢・𩇑(馬王堆三号墓出土檠)や駢・𩇑(鳳凰山10号漢墓出土檠)の字が刻まれている。この点については、熊伝新の言うように、駢の字は梟の字の同音仮借とするのが妥当であろう。梟は、棋子が方格の部分に入った場合、棋子を立てて、その力が増すことであり、六博では重要なゲームのポイントである。従って駢・𩇑の目が出た場合には一発で方格の部分に棋子を進めることができたのであろう。なお、馬王堆三号墓出土の檠には一から十六の数字と駢・𩇑が刻まれている。この点から考えて六博盤にはT・L・V及び円点を含め16か所の部分がある。また画像磚や陶俑にはL字部に6枚の棋子をのせ互いに向きあっている様子がしばしば見られる。このことから、筆者の勝手な想像が許されるならば、L字部においた棋子は檠(サイコロ)の目によって第6図の部分に示された位置



第8図 加彩木製六博俑(武威磨咀子出土)

に進んだものと思われる。またおそらく図示したように、時計と反対回りに出た目によって
 棋子を進め方格のある中心に向っていったのであろう。方格の中心に行けば、梟になるこ
 とは、河北省平山県中山王陪葬墓から出土した博局^(注22)(第7図)の文様を見れば説明がつくか
 もしれない。この中山王陪葬墓出土のものは、非常に豪華で石板に規矩紋のT・L・Vの間
 に蟠螭紋・獸面紋・虎紋を施し、方格の中には梟の絵が描かれており、戦国時代の六博を
 知る上で好資料といえる。ただこの六博盤には、従来の盤に見られる、四個の圓点がなく、
 VとL字間に横棒が各一本ずつ記されている。これは他にあまり例がなく、今後の課題と
 いえよう。また六博ではないが、戦国後期式の方格規矩蟠螭紋鏡には、方格規矩四神鏡お
 よび獸文鏡にある乳がない。これは、規矩紋を考える上で重要な課題といえる。また、中
 山王墓からは銅製の18面体のサイコロ^(注23)が銅銭とともに出土している。銅銭は、宮中行楽銭
 と呼ばれ、40枚出土しており、第1～第20までである。残りの20枚は、三字・四字の文字を
 陽鑄し、全体で詩文になっている。樋口隆康氏は、^(注24)「銅銭とサイコロをいっしょに使用し、
 酒席で行う遊戯の道具であろう。」と推定された。当然考えられることであるが、六博との
 関連からみて、行楽銭は小博の棋子に使用された可能性も考えられる。六博の現資料だけ
 でなく、そのようすは画像石・磚などにも多く見え、陶俑・木俑もあり、その実態を知る
 上で重要である。

甘肅省、武威磨咀子48号墓出土の加彩木製六博俑は、非常に興味深い資料であり六博を^(注25)

考えるうえで重要である。すなわち規矩文のV字にあたる。Vの頂点から方格の四角の隅に線が引かれており、今まで見られた四個の圓がなくなっている点である。年代としてはいっしょに出土した五銖銭の型式から見て昭帝以後(B.C.87年以降)としている。馬王堆3号墓や中山王の頃からは少し新しくなり、俑からの類推ではあるが、新形式の六博と考えたい。従来、六博についての分類等はなされておらず今日まで来ているが、その始まりを春秋・戦国期に置き、その衰退を後漢中期以降に置くとしても約千年から五百年の間行われていたことになる。およそ他のゲームと比較しても、何らの変化がないわけではなく、そのルールおよび・形態等は若干変化しているはずである。また後漢末から六朝にかけて盤上遊戯の主流は、^(注26) 樗蒲になり、また雙陸になった。当然六博から変化し、流行していったことはいうまでもない。確かに熊傳新氏ならびに傳挙有氏の言うように、規矩紋を有する鏡は、博局文鏡および博局蟠螭文鏡さらに、博局四神鏡と呼ぶ方が、六博の盛行した時代にも合致し、その紋様から見て妥当な線にも思えるであろう。しかし六博盤に表わされた規矩文については、一体なんであったかを考えると短絡的と言えよう。

やはり従来から命名されている、方格規矩紋の方がその起源から考えても自然といえる。また傳挙有氏の論文の中で英文訳された、「…this Kind of bronze mirror should be called “chessboard mirror”.」とした部分は明らかに誤訳である。御承知のようにチェスボードとはチェス盤のことで、市松文様の白・黒のものとなる。どう考えても、方格規矩紋の鏡が、市松文様の白黒の鏡になるわけではなく、博局を英訳するのに誤まったといえる。しかしこれまで十分研究されていなかった六博について豊富な考古資料及び文献史料を挙げて、深く研究したことは意義があり、規矩紋鏡の誕生を博戯が盛んな頃に置き、その衰退を博戯の衰退の時に関係づけたことは、疑問のない所である。

以上やや冗長な感じで六博についてと規矩紋についての説明となったが、紙面の関係で他の出土例や、文献等は割愛した。六博等についての遊戯関係の研究はこれからであり、また資料の増加にともない、修正される部分も多いであろうが、六博と現在行われている中国将棋とは全く別のルーツであることを明記して今後の研究を深めたいと考えている。

なお、他の六博の出土例および画像磚等に見られる六博についての例や、方格規矩紋鏡の出土例の対比等、あるいは本稿でふれる機会のなかった論文や、文献史料等については次号で叙述したいと考えている。

(こいずみ・しんご=将棋博物館学芸員)

注1 林巳奈夫「漢鏡の図柄二、三について」『東方学報』京都第44冊 1973年

注2 傳挙有氏は、「博即簿，古代又叫象棋，是现代象棋的前身」として考えているが、現代中

国で行われている象棋とは、全く結びつかない。

- 注3 後藤守一『漢式鏡』(日本考古學大系, 第一卷) 1926年
- 注4 中山平次郎「古式支那鏡鑑沿革 七」『考古學雜誌』九卷八號 1919年
- 注5 〃 「TLV鏡の發達に関する知見追加」『考古學雜誌』十一卷五號 1921年
- 注6 駒井和愛 『中國古鏡の研究』1953年, (第八節規矩文及び六博圖)
- 注7 劉復 『國學季刊』西漢時代的日晷 1932年
- 注8 L. S. Yang: A Note on the so-called TLV mirrors and the Game Liu-po; Harvard Journal of Asiatic Studies IX, 1945
水野清一, 『東洋史研究』新一, 五・六, 「博箸博碁博鎮博局」1947年
勞榘, 『中央研究院歷史語言研究所集刊』三五 “六博及博局演變” 1964年
李松福 『象棋史話』「第二章 春秋战国与秦汉时期的象棋」p. 9~p. 19 1972年
傅学有『考古學報1』「论秦汉时期的博具, 博戏兼及博局紋鏡」 1986年
- 注9 Camman, Schuyler: The TLV Pattern on Cosmic Mirrors of the Han Dynasty; Journal of the American Oriental Society, Vol. 68, 1948.
- 注10 A, Bulling: The Decoration of Mirrors of the Han Period: Aribus Asiae, 1960.
- 注11 『呂氏春秋』十二月紀, 序意に「爰大圓在上, 大矩在下」とあり天円地方の考え方が表わされている。
- 注12 『淮南子』本經訓にも, 「裁圓履方, 抱表懷繩…」とあり同じく天円地方の考え方を示す。
- 注13 伏羲女媧絹画 吐魯番阿斯塔那出土1964年に出土した唐時代のものであるが, 規矩紋を考えるうえでは参考になる資料である。
- 注14 A, Bulling は, 方格内の十二乳は広間の中心をかこむ小柱・内区の八乳は四方の門であるとしている。もし筆者の恣意的な想像が許されるならば, 円形では門の形を表現しにくく, 他の可能性があると思われ, 前掲の伏羲・女媧図に見られる, 円形紋ではないかと考えている。2つの円形文は陰(月), 陽(太陽)の可能性が大である。V と L の間に円形紋が配されているのは, おそらくそれを表現していると考えている。すなわち四乳は天王日月の意であり, 八乳は陰陽の組み合わせを丁寧に表現したのではないかと勝手に想像している。
- 注15 六博の起源は, 今のところ明確にされていないが, 『象棋史話』李松福編では, 春秋戦国時代に置いている。筆者は漢代に隆盛を極めた背景から, 戦国時代後期頃と考えている。
- 注16 『文物』1979年4, 「谈马王堆三号西汉墓出土的陆博」熊传新
- 注17 『楚辞』「招魂」卷之七, 十五~十六, 成化十一年版(1475年)に, 「…投六箸行六碁故爲六篋也…」と記され, 六箸と六碁を使うため六篋とされた。
- 注18 云梦睡虎地秦墓, 文物出版社刊
『文物』1973年9期, 「湖北云梦西汉墓发掘简报」图39, M11号墓出土
- 注19 『象棋史話』李松福編, 「春秋战国时期的象棋」p. 9
- 注20 増川宏一『盤上遊戯』法政大学出版局刊
- 注21 『文物』1974年6期, 「湖北江陵凤凰山西汉墓发掘简报」
- 注22 中山国王陪葬墓出土, 石製品
- 注23 樋口隆康『古代中国を発掘する』新潮社刊 1975年3月, 230~231頁。
- 注24 同 上, 228~231頁。
- 注25 『文物』1975年12期, 「武威磨咀子三座汉墓发掘简报」甘肅省博物館
- 注26 渡部 武「賭博・中国古代の盤上遊戯」『月刊百科II』No 241, 1982年

昭和62年度発掘調査略報

1. 鳥 取 城 跡

所在地 熊野郡久美浜町浦明1381

調査期間 昭和62年5月18日～6月24日

調査面積 約200m²

はじめに 鳥取城の調査は、国営農地浦明団地の開発に先立つ試掘調査である。鳥取城は、川上谷と佐濃谷を隔てる山魁から北西にのびる丘陵に位置する。一色家の家臣、栗田内膳正の守城で、細川氏の丹後攻略の際に落城したとされている。これまで、丘陵基部の標高51～53mの地点に平坦地が見られ、掘り切りと土塁が認められ、この地点のみが城跡として認識されていた。しかし、丘陵先端付近の標高16～19mの地点で広い平坦地が認められ、城に関係する何らかの施設の存在が予想されたため、試掘調査を行うこととなった。

調査概要 調査は、平坦地のほぼ中央に、T字とL字の2か所のトレンチを設定して行ったが、ピットを検出したため随時トレンチを拡張した。調査の結果、門と考えられる掘立柱建物跡1棟(SB05)、2間×2間の掘立柱建物跡1棟(SB03)のほか、溝(SD04)・土塼(SK10)・ピットを検出した。SB05は3基のピットの列が平行に並び、中央のピットのみが小型である。SK10は、形状から土塼墓の可能性が考えられる。

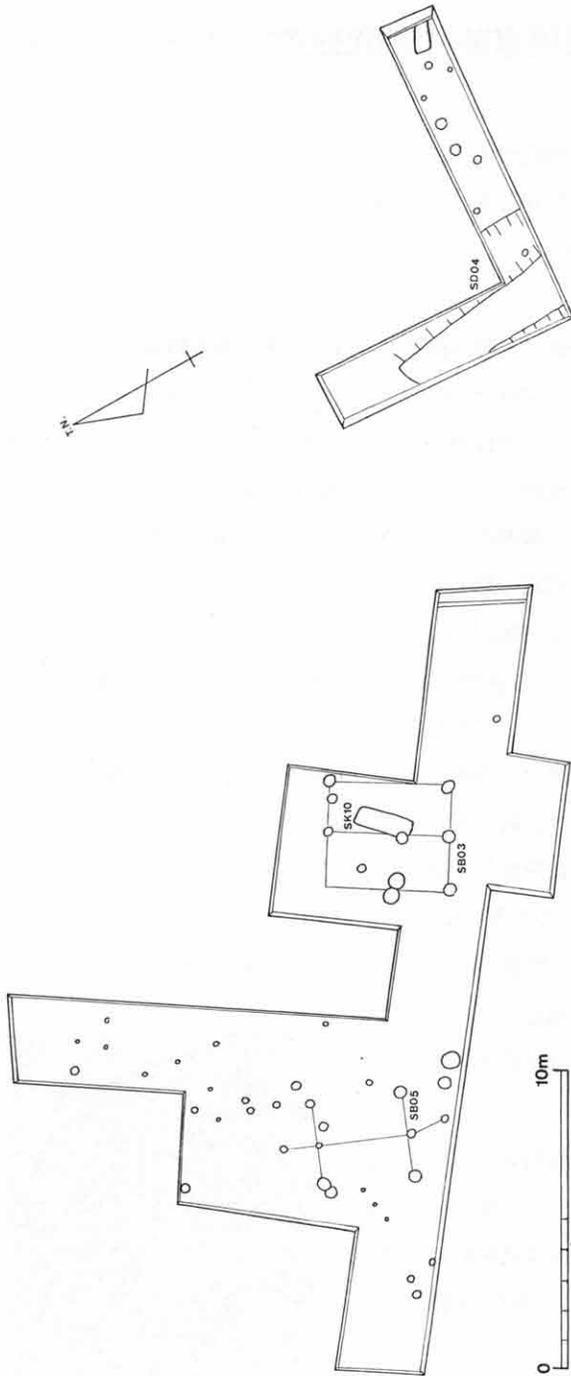
出土遺物には、須恵器(杯・甕)・土製紡錘車・土師器・青磁碗・白磁碗・摺鉢等がある。

まとめ 今回の調査においては、柱穴の中から土師器が数点出土しているが、細片であるため建物の時期を決定することはできなかった。しかし、SK10から13世紀の白磁片が出土し、そのSK10を切ってSB03が建てられているため、13世紀以降の時期とすることができる。このことは文献の示す城の年代と矛盾しない。またトレンチ周辺にも、土塁や樹形状の地形が確認できることから、調査地が城の一部であることはほぼ間違いなであろう。

(荒川 史)



第1図 調査地位置図 (1/25,000)



第2図 トレンチ実測図

2. 長岡京跡右京第266次 (7ANKHT-4 地区)

所在地 長岡京市開田 4 丁目
調査期間 昭和62年 6 月 8 日～昭和62年 7 月23日
調査面積 約90m²

はじめに 今回の調査は、府道開田神足線交通安全施設整備工事に伴って実施したものである。調査地は、緩やかな扇状地に位置し、標高は19m前後である。長岡京跡の右京六条二坊八町にあたり、また、全長30mの前方後円墳と推定されている塚本古墳がある。調査の目的は、この古墳を検出するとともに、長岡京の造営との係わりを解明することである。

調査概要 本調査は、塚本古墳の後円部相当部分を東西に横ぎる形で幅2mの細いトレンチを5本設定した。調査の結果、2か所で周濠、墳丘部で柱穴、外堤を想起させる落ち込み(SX01)等を確認し、周濠内から多くの埴輪を検出した。

濠SD01 想定ラインより西側0.5mの位置で確認した。近世の溝、土塚などによって大きく削平を受けているが、わずかな立ち上がりを見出した。濠の堆積土は、上層から、茶褐色土、黒褐色土、黒色土の順である。黒褐色土には、円筒埴輪、形象埴輪が多く含まれており、長岡京期の土器類も混在している。濠の底は、黄褐色土・褐色砂礫の地山で形成され、標高18.5m前後を測り、墳丘側へと徐々に高くなる。

濠SD02 推定ラインより西側1.2mの位置で確認した。幅3.2m・深さ0.6mを測り、断面は碗状を呈している。堆積土は、濠SD01とほぼ同様である。茶褐色土は、固くしまっており整地層である。黒褐色土には、長岡京期の土器、円筒埴輪のほか盾形埴輪の破片等がある。

SX01 濠SD02の東側約3mの位置に落ち込み状の遺構を確認した。幅3.5mを測り、東側の肩は南北方向に直線的にのびる。SD02の堆積土と酷似しており、埴輪が含まれている。

出土遺物 I、IIトレンチの近世溝、土塚から染付、陶器類が出土した。数多くある埴輪等は、周濠内からの出土がほとんど



第1図 調査地位置図 (1/50,000)

であり、長岡京期の土器も含まれることから、周濠の埋没時期を考える上で重要な資料である。

(埴輪) 円筒埴輪, 盾形埴輪(石見型), 家形埴輪, 蓋形埴輪, 不明形象埴輪

(土器) 古墳時代 土師器高杯

長岡京期 土師器杯・甕, 須恵器杯, 土馬

平安時代 土師器甕(柱穴出土)

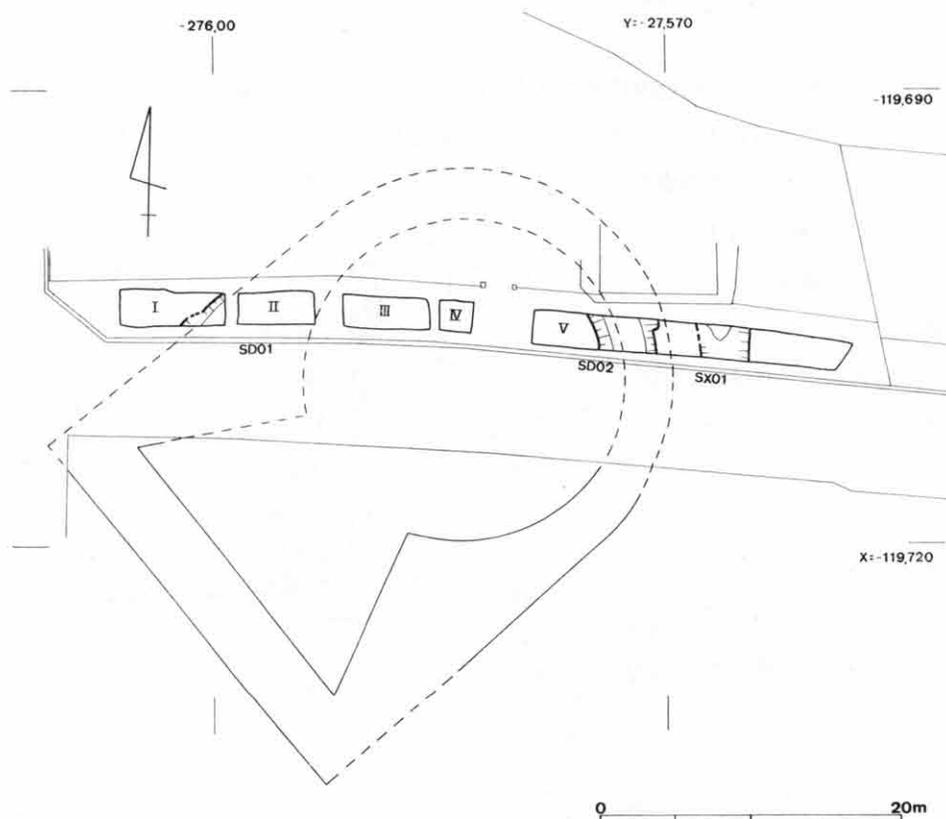
中・近世 土師器皿, 染付, 陶器

まとめ 今回の調査の結果, 次の事柄がわかった。

- ① 塚本古墳は、従来の復原^(注1)どおり盾形周濠を有する前方後円墳である。
- ② 濠SD02とSX01までの約3mの間は、古墳の「外提」の可能性はある。
- ③ 長岡京の造営に際しては、濠は完全に埋没しておらず、墳丘もこの時期に削平されはじめたものと思われる。

(竹井治雄)

注1 復原図は、『長岡京市埋文センター年報 昭和59年度』「右京第172次(7ANKHT-3地区)調査略報」によった。



第2図 遺構配置図

3. 谷内遺跡 第4次

所在地 中郡大宮町谷内
調査期間 昭和62年5月7日～昭和62年7月24日
調査面積 約1,100m²

はじめに この調査は、昭和62年度府営大宮地区は場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査として行ったものである。谷内遺跡の調査は、昭和61年度に、当調査研究センター及び、京都府教育委員会により、試掘及び範囲確認調査が行われ、縄文～鎌倉時代の複合集落跡の可能性が指摘された。今年度の調査は、これらの結果を踏まえ、さらに遺跡の内容を明らかにするため、切土工事部分を中心に調査を実施した。

調査概要 今回の調査では、合計9か所のトレンチを設定した。主な検出遺構には、弥生時代後期及び古墳時代中期の竪穴式住居跡などがあるが、全体的に遺構の分布密度は低い。出土遺物は前回調査と同様な傾向だが、特筆すべきものに、縄文時代早期の押型文土器の一括出土がある。

遺跡は、竹野川右岸の低位段丘上に立地し、中央を東西に自然流路が走り、扇状地を形成している。集落の立地は、この谷をはさんだ両側に分布しているものと思われたので、地形に応じてトレンチを設定した。以下、主なトレンチの概要を述べる。

3トレンチでは、自然流路の北岸を検出した。流路は、砂、シルトの互層により堆積し扇状地性の堆積を示すが、出土遺物はなかった。

7トレンチでは、谷状地形に堆積する遺物包含層を確認した。分層は可能だが、各層から縄文～古墳時代の土器が混在して出土した。縄文土器は、二次堆積によるものであるが、出土破片数が50点

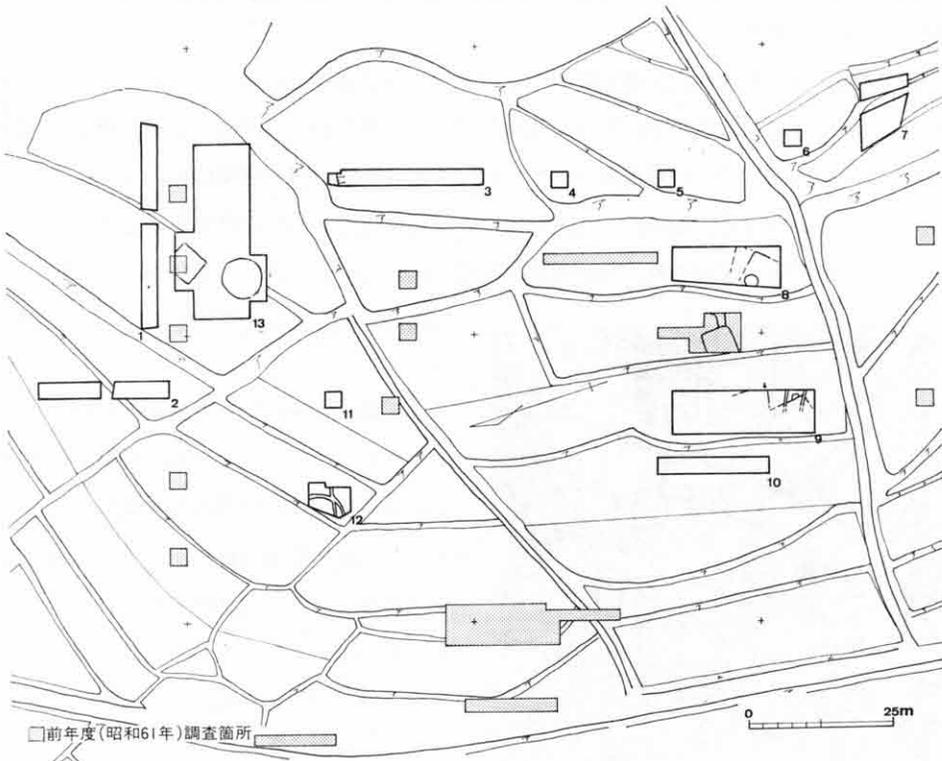


第1図 調査地位置図 (1/50,000)

を超え、分布密度の高いものとなっている。外面には押型文(楕円・山形・菱目)が、内面には斜行沈線が施されている厚手のもので、高山寺式に比定される早期の土器である。

8・9・13トレンチでは、竪穴式住居跡を合計6基検出した。13トレンチの一基を除きすべて方形で一辺5m前後を測る。周壁溝・貯蔵穴を持つものと持たないものがある。出土遺物は土師器のみで、布留式併行でも新しい段階のものであると考えられる。一方、13トレンチでは、直径7mを測る円形住居を一基検出したが、これは竪穴埋土中に弥生時代後期の土器片を含み、この時期の所産と考えられる。

まとめ 以上、谷内遺跡の第4次調査について、成果の一部の概要を報告した。現在整理作業中のため細かな検討は後日に期すとして、2・3の問題点を指摘してまとめに代えたい。まず、今回一括して出土した押型文土器は、遺構に伴わないものの、出土量の多さが注目され、府北部の縄文早期の土器研究に新たな資料を提供した。次に、弥生後期の住居跡は、これまで不明だった当遺跡の弥生後期の集落のあり方を、わずかに垣間みることができた。また、古墳時代中期の住居跡群は、散発的であり、集落の全体像を明らかにすることはできなかったが、丹後地方の古墳時代集落の様相、とりわけ近在の大谷古墳との関係(墓と村)を考える上で興味深い資料といえよう。今後検討していきたい。(細川康晴)



第2図 調査地トレンチ配置図

4. 平山城館跡

所在地 綾部市七百石町
調査期間 昭和62年4月20日～8月21日
調査面積 約2,300m²

はじめに 平山城館跡は、近畿自動車道舞鶴線の工事に先立ち、昭和61年度及び62年度に発掘調査を行った。昨年度は第一郭の、今年度は第二郭と西側斜面の調査を実施した。

調査概要 第二郭は、幅約10m・長さ約35mの比較的狭い郭であるが、平山城館のなかでは最高所に位置する郭で、背後には土塁と堀切りを備えている。この第二郭で検出した遺構は、礎石建物(SB04・SB05)、柵列、土坑、石組状遺構、柱穴などである。SB04は東西2間×南北2間、SB05は東西3間×南北2間の規模を持つ。1間の長さは約2mを測る。SB05は、礎石を含めた6.6m×4.9mの範囲内に粗密はあるものの拳大から人頭大の石を乱雑に敷いたように広がっていた。SB04・SB05ともほぼ全面が焼土に覆われていたため、焼失したものと考えられる。

西側斜面では、14本存在する竪堀のうち13本について調査を行った。これらは、いわゆる畝状竪堀と呼ばれるもので、斜面に連続して築造されている。調査の結果、規模や構造によって、(A)竪堀1、(B)竪堀2～7、(C)竪堀8～13、(D)竪堀14の大きく4グループに分けることが可能となった。A・Dは、両端に位置し、40m前後の規模を持つもの。Bは、やや放射状に配置され、20m前後の規模を持つもの。Cは、上部に横の堀を持ち、

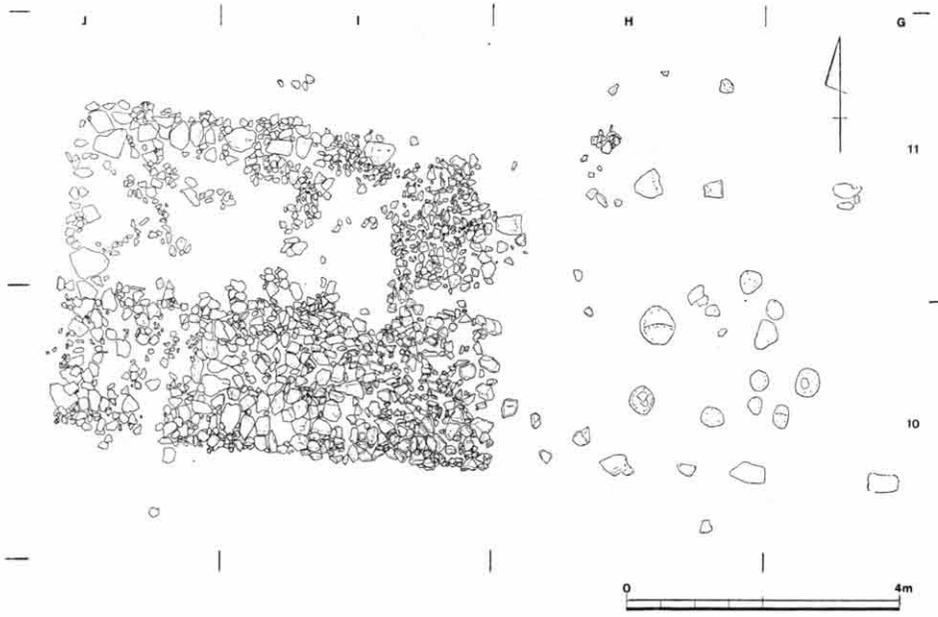
直線的に並ぶ35m前後のもの、などの特徴がある。

まとめ 今回の調査では調査例の少ない畝状竪堀について多くの成果を収めるとともに第二郭では、城の最も重要な施設と考えられる礎石建物を検出するなど山城の研究に貴重な資料を提供するものとなった。城の使用された時期は、主に戦国時代であるが、竪堀の築造年代、建物の焼失年代などさらに検討を加えたい。

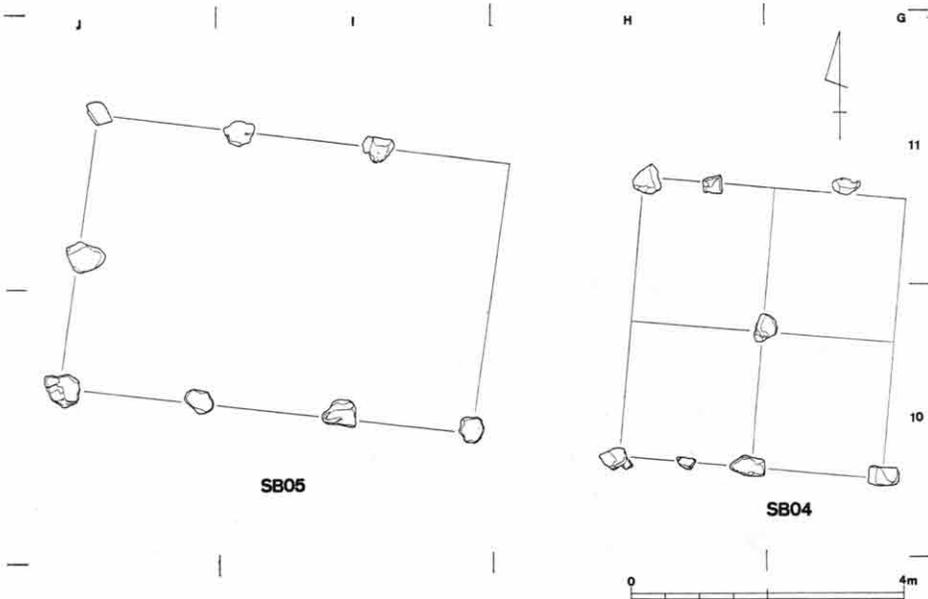


第1図 調査地位置図 (1/50,000)

(鍋田 勇)



第2図 礎石建物跡検出状況



第3図 礎石建物跡平面図(礎石部分のみ)

5. 南 稻 八 妻 城 跡

所在地 相楽郡精華町南稻八妻
調査期間 昭和62年5月6日～同年7月15日
調査面積 約300m²

はじめに 今回の南稻八妻城跡の発掘調査は、顕著な遺構・遺物を確認し得なかった昨年度のA地点に引き続き、谷部(政ヶ谷)をはさんで北側に連なる尾根部(B地点)について実施したものである(第1・2図)。南稻八妻城跡は、奥田裕之氏によってその復原図が作成されており、今回のB地点は同氏が想定するK・L・Mという3つの郭を包括する。「三の丸」から「大手道」を隔てて東にのびる山城の重要部分と推定され、京奈バイパス道路建設に先立って調査が必要となった。

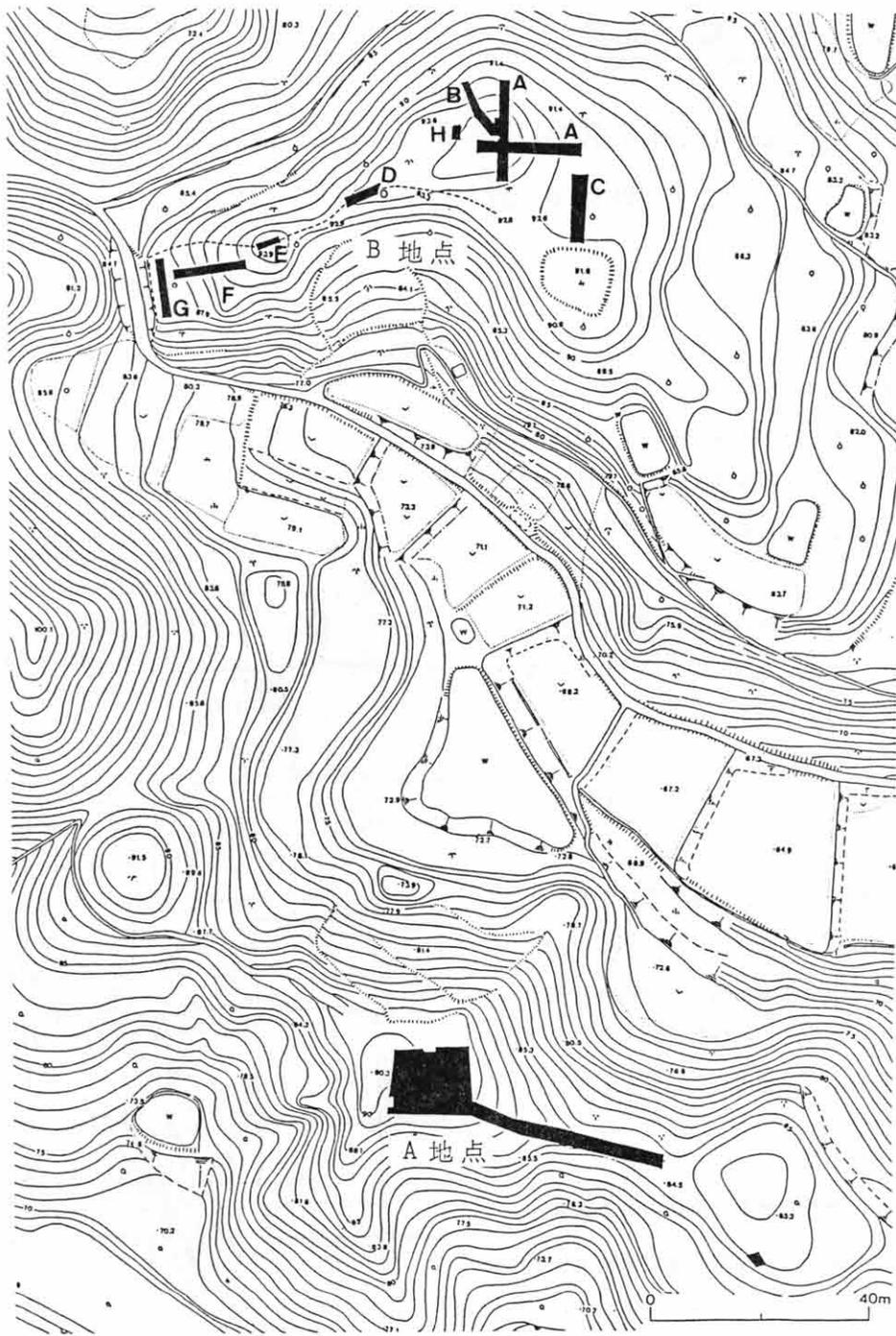
調査概要 掘削の結果、約93mと最も標高の高いAトレンチから、黄褐色粘質土の地山面に掘り込まれた溝状遺構が検出された。規模は幅約2m・深さ約30cmを測り、約3.5m分確認している。溝内およびその周辺部に遺物の出土はみられず、時期・性格等は不明である。全体に出土遺物はわずかながら、比較的Cトレンチにまとまっていた。須恵器甕細片・土師器質皿などがある。他のトレンチからは、耕土中に若干の近代以降の遺物が出土したのみで、山城跡の存在と直接結びつく遺構・遺物はなかった。

おわりに 郭とされる平坦部を主な対象に掘削したが、昨年度のA地点と同様、今回のB地点でもさしたる成果は得られなかった。『大乘院寺社雑事記』に初見する「稻屋ツマ



第1図 調査地位置図 (1/50,000)

之城」は山城国一揆の中心となるが、江戸時代頃には所在不詳となる。しかし、中世の文献に記され、山城国一揆から松永久秀の支配の間、二回の落城と一回の炎上に見舞われている。こうした山城が現在その所在すら明らかでない点は意外である。今回の調査地が推定南稻八妻城跡の限られた範囲で、後世の土地改変を受けていることなどから、今回の調査結果のみから山城跡の存在を否定することはできない。今後、推定本丸跡を中心に検討が必要である。 (黒坪一樹)



第2図 トレンチ配置図

資 料 紹 介

長岡京跡左京第115次調査で出土した玉作り
関係の遺物について

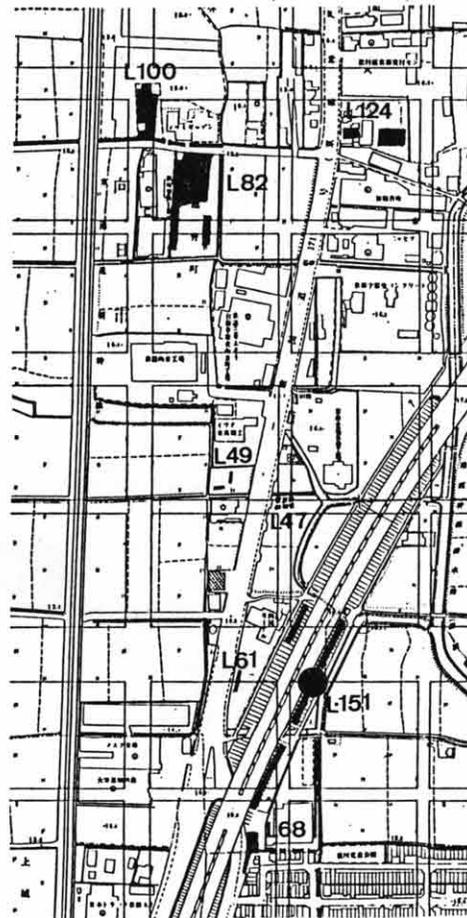
田 代 弘

1. はじめに

昨年度、当調査研究センターでは、長岡京跡左京第115次調査として鶏冠井清水遺跡推定地の一角を発掘調査した。このときに弥生時代中期の土坑から玉作りに関すると思われる緑色凝灰岩と紅簾片岩の破片を各一点ずつ確認している^(注1)。畿内地域では弥生時代の玉作り関係遺跡、遺物の確認事例が少ないため、玉生産及びその素材や製品の流通の実態があまりわかっていないのが実情である^(注2)。今回確認した資料はごく限られた内容のものではあるが、このような現状においては一定の資料的価値をもつものと思われる。概要報告では紙幅の関係もあり、この資料について十分に説明できなかったため、ここで出土状況と共伴遺物についてやや詳しく報告することにした。あわせて当該資料のもつ問題点についても記しておくことにする。

2. 調査の経過と遺物の出土状況

この調査は、名神高速道路羽束師川改修工事に伴い、日本道路公団大阪管理局の依頼を受けて実施したものである。調査対象地は、向日市鶏冠井町南金村・清水、京都市伏見区久我町井手浦・井戸田地区にまた



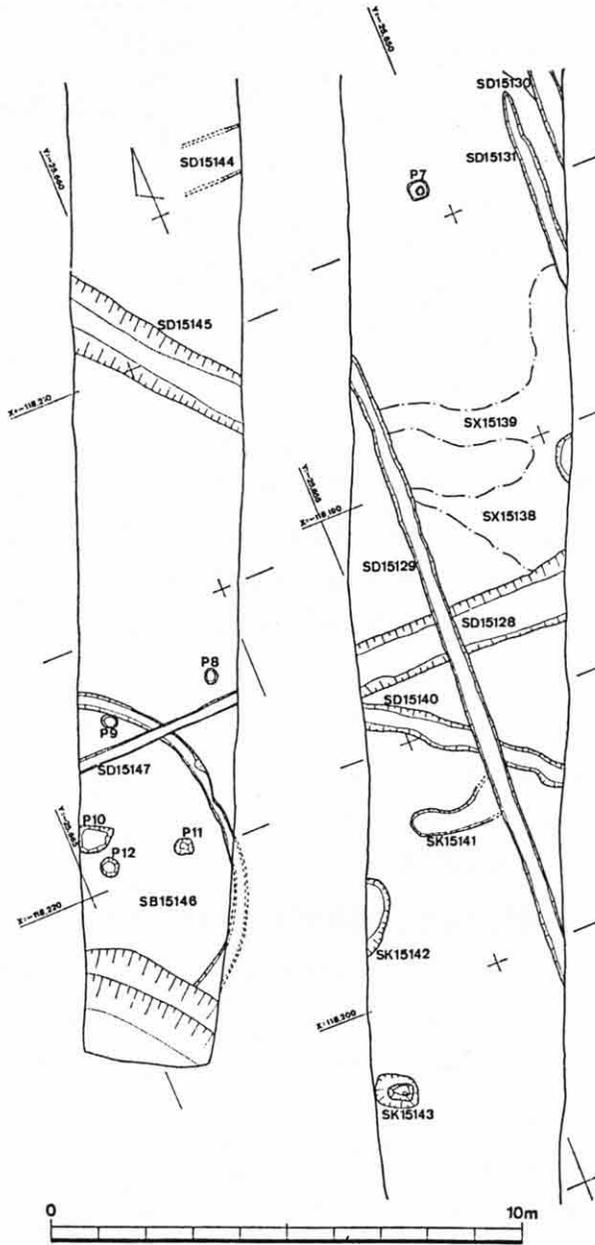
第1図 調査地位置図 (●印)

がる延長約70m部分であるが、そのうち基礎工事が地下深くにおよぶ鶏冠井町清水地区の約1,000m²を対象として発掘調査を行った。そのほかの工事か所については工事の進展^(注3)に応じて立会調査を実施した。

調査地は、長岡京跡左京三条三坊一町・同二町・同八町、二条三坊四町・同五町にあたり二条大路、三条第一小路、東三坊第一小路が通過する範囲を含んでいる(第1図)。また、当該地は弥生時代の集落跡の推定範囲の一角にあっている。付近では、これまでの調査で弥生時代中期の遺構や遺物が確認されている。今回の調査地の南側に位置する左京第47次調査でも弥生時代の遺物が出土している。隣接地に弥生時代中期初頭の集落跡として著名な鶏冠井遺跡^(注4)があるが、この付近にはこの遺跡と関係する集落があった可能性が指摘されており、鶏冠井清水遺跡の名で呼ばれている^(注5)。調査の結果、これらに関する様々な遺構を検出することができた。

検出遺構の詳細については概要報告書に譲ることとして、ここでは主に、玉作りに関係すると思われる遺物が出土した土塚と遺物の出土状況について記すことにする。

この土塚はSK15142と名づけた長楕円形の土塚である。調査範囲内の壁面が崩落するの



第2図 遺構検出状況(部分)

を防ぐために打った綱矢板のために半分以上が壊れていたが、残存部では遺物の残りもよく比較的多くの情報を得ることができた(第2・3図)。

土坑は断面形がU字状で、浅い舟

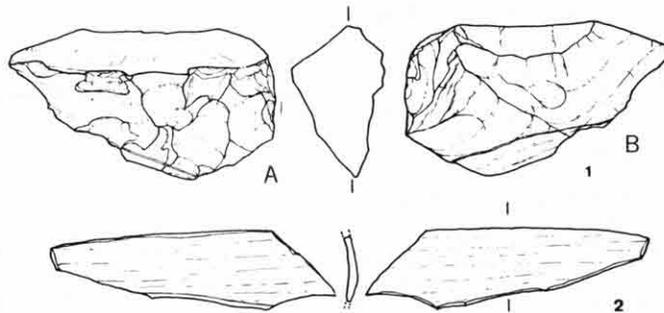
底形を呈していた。残存長は長径で1.6m、短径で0.5m、深さは40cmを測る。遺物は土器がほとんどで、ほかに石製品と木屑が少量あった。土器は壺と甕の二器種のみである。残りが良好であった一個体分の破片を除くと細片ばかりであった。後に記すように、どれも弥生時代中期前半(第Ⅱ様式)に属するものである。

緑色凝灰岩と紅簾片岩の破片はこれらの土器に混じって出土している。玉作りに関すると思われる遺物はこの2点のみである。破片や削片、砥石など、この場所での生産を示すほかの関連資料はみつかっていない。

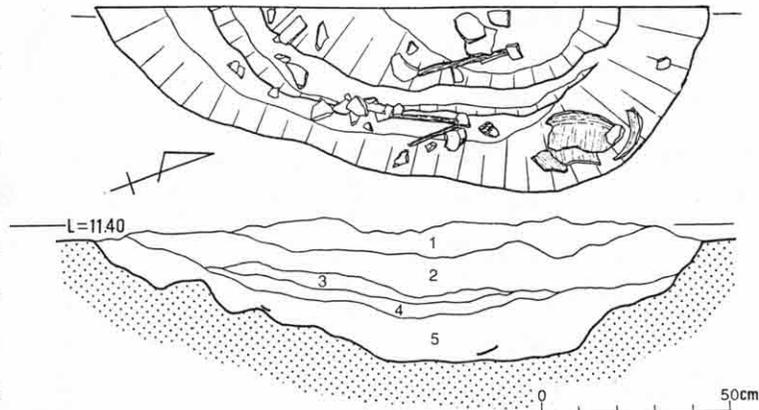
3. 遺物について

① 緑色凝灰岩と紅簾片岩(第4図・図版第2参照)

緑色凝灰岩は、縦長4cm・横長7cm、上面での幅4cm・最大厚2.4cmを測る。硬質である。握り拳の1/3ほどの大きさのもので、礫核状を呈している。上面には大きな剝離面があり、この剝離面が平らになるまで丁寧に研磨した跡が認められる。側縁はいずれも剝離面に覆われている。A面側には母岩から当資料を割り取る際にできたと思われる大剝離面がそのまま残っており、B面側には器体調整のために施されたと思われる多方向からの剝離面が認められる。



第4図 玉作り関係遺物(1/2)



第3図 SK15142 実測図

上面の研磨面と側縁の剝離面の切り合い関係をみると、研磨後のある段階で打割していることがわかる。しかし、打割にあたって擦切施溝を施したかどうかなど、技法上の問題は現状からは判断できない。

この資料は、管玉製作のための碧玉原石とみて誤りないだろう。

紅簾片岩は、長さ7.3cm・幅2.1cm・厚さ0.2cmほどの小さな破片である(第4図)。加工痕や使用痕は認められない。

この剥片が重要であるのは、碧玉原石を分割する技法(擦切施溝分割)との関連においてである。擦切施溝分割技法とは、分割対象となる原石の一面を研磨して施溝し、分割を繰り返して原石を方柱状へと形を整えてゆく手法である。紅簾片岩はこの際の施溝具の素材として用いられ、この技法を伴う玉作り遺跡から数多くみつまっている。この施溝具は石鋸と呼ばれている。

石鋸は、地域によっては珪化木や雲母片岩、流文岩など節理面の発達している石材を素材として用いている場合もあるが、京都府扇谷遺跡・途中ヶ丘遺跡・志高遺跡、滋賀県市三宅遺跡、福井県吉河遺跡・加斗下屋敷遺跡などでは紅簾片岩が石鋸素材として独占的に結びつく傾向にある。^(注6)

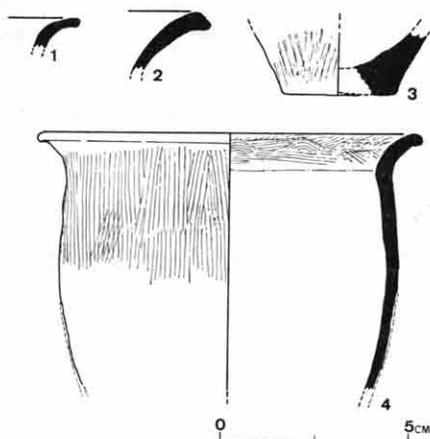
石鋸は扁平で直線的な刃をもつ工具であるが、大きく加工することはなく剥片の長片のひとつに刃部をこしらえるだけのものがほとんどである。この資料は、未加工品ではあるが碧玉原石と相伴していることや形状などからみて、上述したような用途を目的として集落内に搬入されたものと考えられることができる。

② 共伴遺物

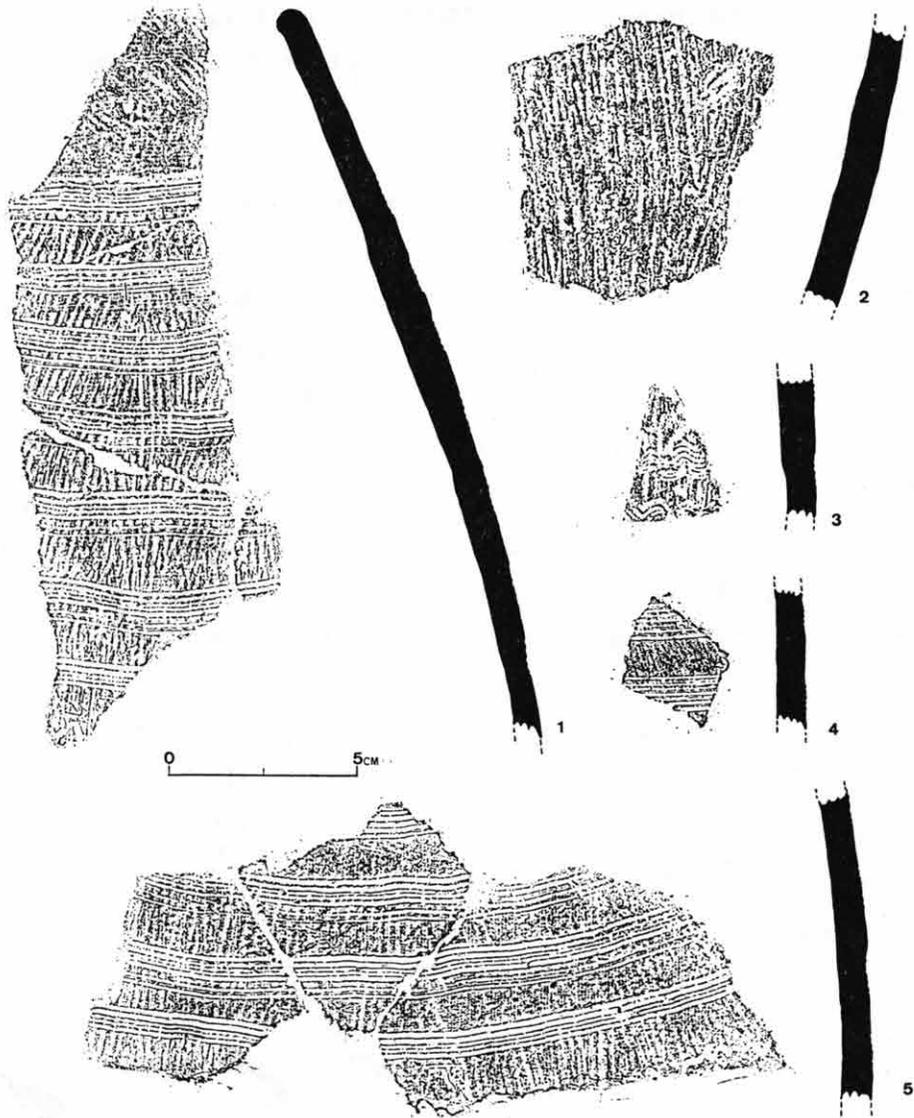
土器(第5・6図) 壺と甕の2器種のみである。

壺(第6図1~3・5)は体部の破片のみが認められた。いずれも縦方向のハケによる調整痕を残している。ナデやヘラミガキによる最終調整をせずにハケの上から直接、楕拙直線文(1・4・5)や波状文(3)を施している。文様は単体構成である。

甕(第5図、第6図2)は、口縁部破片(第5図1・2・4)、底部破片(第5図3)、体部破片(第6図4)など細片化したものが多い。第5図3は、残りが良好で上半部分をほぼ復元することができた。この土器は、口縁部がゆる



第5図 SK15142出土土器実測図(1)



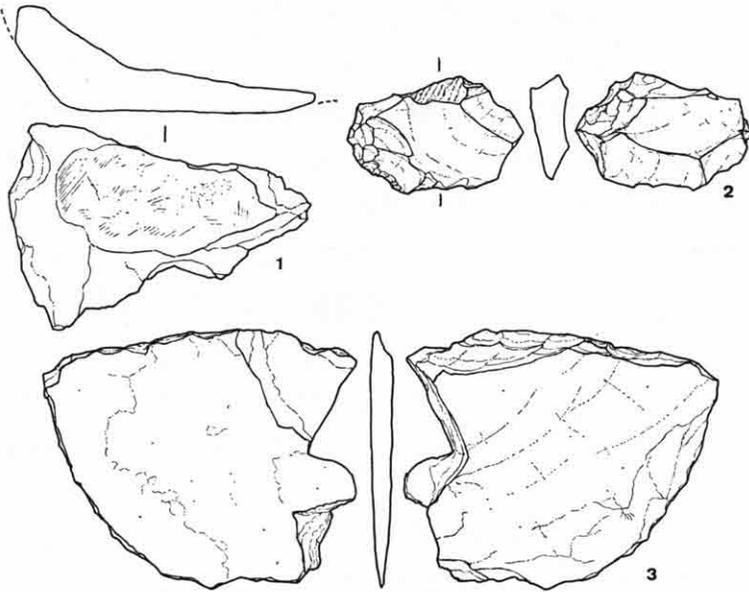
第6図 SK15142 出土土器実測図(2)

やかに外反して立ち上がるもので、端部はやや丸みを帯び、口唇部下端に肥厚する傾向が認められる。口縁内面には調整原体を用いて波状の櫛描文を施している。体部外面は縦方向の粗いハケ調整、内面はナデにより仕上げている。いわゆる大和形甕の特徴の一部を備えるものである。他の破片もこれと同種の器体の一部であると考えられる。

これらの土器は、上述の諸点から第Ⅱ様式に属するものと考えてよいであろう。

石器類(第7図1~3) 石皿状の石製品、調整痕のある剝片、粘板岩の剝片などがあつた。

1 は、上面がやや凹んでおり研磨及び擦痕が顕著に認められる。大型の石皿状の石製品の一部分が割れたものであろう。部分的に赤変し、器表にはススが付着している。砂岩製である。



第7図 SK15142 出土土器 (1/2)

2 はサヌキトイドの剝片であ

る。主要剝離面側に調整痕とみられる小剝離が連続して残っている。上端には発達した流状構造をもつ自然礫面がある。長さは縦約3cm・横約4.7cm, 厚さは約1cmである。

3 は大型の粘板岩の剝片である。上端が厚く、下端にいくにしたがって薄くなる。半ばで割れているが、もとは杏仁形の剝片であろう。周縁に階段状の剝離痕が連続して認められる。整形段階で折損したため廃棄したものと思われる。石庖丁、あるいはそれに類する石器の未製品であろうか。縦約7cm・横約8cm, 厚さは約0.5cmを測る。風化が進行しており、やや軟質である。

4. おわりに

以上、遺物の出土状況、観察結果等を記し、あわせて私見を若干述べた。上述の諸点は次のようにまとめることができる。

① 緑色凝灰岩と紅簾片岩は、碧玉製管玉生産に関する資料である。土坑埋土中から一括して検出されており、共伴関係にある。また、伴出した土器の検討から、弥生時代中期初頭(第Ⅱ様式)に属するものと考えられる。

② これらは、紅簾片岩が出土していることから、擦切施溝分割手法を伴う製作技法をとっている可能性が高い。

③ 当遺跡からは当該資料のほかに剝片や削片はみつかっていないことなどから、玉生産

の形態はごく小規模なものであったと考えることができる。

京都府下では、日本海沿岸の緑色凝灰岩産出地帯に隣接する地域において弥生時代の玉作り遺跡が数多くみつがっているが、^(注7)丹波や山城など内陸部の原石非産出地帯においては少なく、^(注8)2例が知られているにすぎない。

今回報告した資料は、内陸部における数少ない事例に一例を加えたことになったのみならず、山城地域においても弥生時代中期初頭(第Ⅱ様式)の段階には集落内へ原石を搬入し、小規模ながら生産を行っていたことを確実なものとした点で貴重なものと言えらる。^(注9)特に、製作にあたって擦り切り手法を用いた可能性を示唆したことは意義深い。^(注10)

(たしろ・ひろし=当センター調査第1課企画係調査員) <1987.8>

注1 辻本和美「長岡京跡左京第151次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987.3.25

注2 近年、大阪府守口市八雲遺跡で前期に遡る可能性のある玉作り工房に関する遺構がみつがっているようである。原石だけでなく工具類が豊富に出土していると言うことであり、おそらく畿内周辺部では現段階で唯一の本格的な工房跡になるものと思われる。(『八雲遺跡現地説明会資料』大阪府教育委員会) 1987.3.14

注3 注1と同じ

注4 ①佐原真・田辺昭三「鶏冠井遺跡」(『東海道新幹線の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』) 1965

②山中章・國下多美樹他「長岡京跡左京第82次(7ANEIS地区)～左京二条三坊一町・鶏冠井遺跡第2次～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第10集 向日市教育委員会) 1983

③山中章・國下多美樹他「長岡京跡左京第100次(7ANEHD地区)～左京二条三坊一町・鶏冠井遺跡第3次～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第11集 向日市教育委員会) 1984など

注5 高橋美久二・國下多美樹「長岡京跡左京第68次調査(7ANEKZ-IV地区)発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1982)』京都府教育委員会) 1982

注6 置田雅昭「石製玉作り」(『弥生文化の研究』8 雄山閣) 1987

注7 久美浜町函石浜遺跡、弥栄町奈具遺跡、峰山町扇谷遺跡、同・途中ヶ丘遺跡、舞鶴市志高遺跡などが主な例である。これらの遺跡からは、碧玉原石や管玉未製品、石鏝などがみつがっている。碧玉生産を自己消費的に行う遺跡である。

最近、大宮町谷内遺跡、舞鶴市桑飼上遺跡においても散発的ながら碧玉原石及び未製品が出土しているとの報告を受けている(当センター肥後・細川両調査員の教示による)。加悦町須代遺跡でも以前に碧玉未製品が一点表採されている(加悦町教育委員会社会教育主事佐藤晃一氏より教示)。

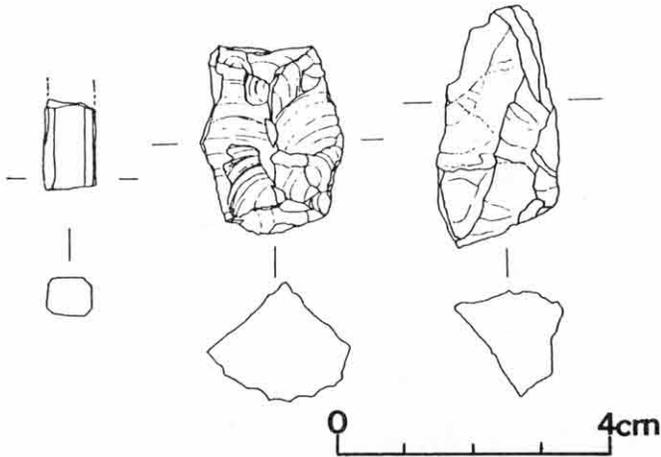
注8 向日市鶏冠井遺跡(注4の③文献)、八幡市金右衛門垣内遺跡(『八幡市史』第1巻 1986)。前者は無遺物の土塚から出土している。包含層の状況などから中期初頭に属する可能性が考えられている(注4の③に同じ)。後者は表採資料に限られており、時期の比定は難しい。中期(中葉～後葉)の土器が多量に表採されているので、これらと同様の時期を考えておく

のが無難であろう。いずれにしても、帰属時期を限定するには資料不足である。

注9 京都府南部地域では初例である。

今回報告した鶏冠井清水遺跡は、さきに玉作り関係遺物が出土している鶏冠井遺跡に隣接した地点にある。この資料は、鶏冠井遺跡での当該資料の帰属時期を中期初頭とした推論(注4の③文献)を裏づけるものである。

注10 注4の③文献では、鶏冠井遺跡出土の碧玉未製品について、形状観察や石鋸および擦り切り手法にみられる原石や剥片がなかったことなどから、擦り切り手法の不在を説き、押圧剥離を技術的特徴とする加賀技法との関連を力説した。しかし、佐藤宗男氏によれば、大中技法においても擦り切りによる四角柱作出後においても稜加工などの細部調整において押圧剥離を用いることが指摘されているし(佐藤宗男「大中の湖南遺跡における玉作りについて『古代文化』138号)、筆者も舞鶴市志高遺跡や福井県三国町加斗下屋敷遺跡などでこの工程のものを実見した記憶がある。ごく限られた資料から断片的な推論を導くことは危険であり、今回の報告例などを参考にして考えればこの資料なども大中技法的な技術的前提のもとで生じた一資料と言うことができるだろう。目的となる剥片が偶発的にであれ用意されている場合には、その剥片にむかって改めて擦り切りを施して分割する必要はなく、次の工程へ進むのが自然であるという理屈である。



第8図 鶏冠井遺跡出土資料(注4の③文献)

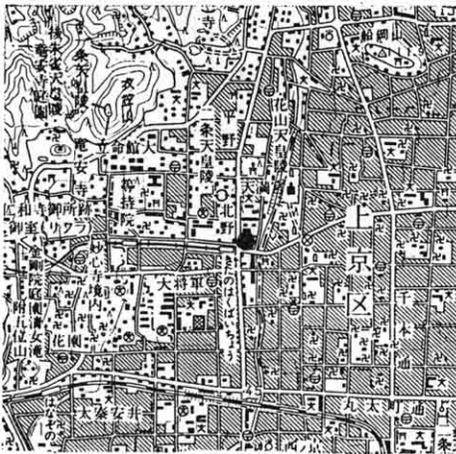
府下遺跡紹介

37. 北野廃寺跡

北野廃寺は、京都市北区北野白梅町にあって、1936年の調査で注目され、戦後は1963年の京都大学考古学教室や1965年の京都府教育委員会の調査で、多数の瓦や瓦積基壇が見つかったことで著名である。その後は、(財)京都市埋蔵文化財研究所によって発掘調査が進められている。特に、1977年3月から5月にかけての京都信用金庫白梅町支店改築に伴う発掘調査で注目すべき成果を得ている。この時の調査では、遺構自体は、竪穴式住居跡や溝のほか、南北棟の掘立柱建物跡を検出したにすぎないが、遺物の中に不思議な墨書土器があった。この土器は、平安時代の高台付の灰釉陶器皿であるが、その底部に「鶺鴒室」と判読できる墨書があった。この北野廃寺跡周辺では、1936年以後の調査でも飛鳥時代に遡る瓦が採集されており、本広隆寺とも野寺ともその寺名を決めがたいとされていた。しかし、この墨書土器の出土によって、広隆寺の移転前の寺院である蜂岡寺の比定地として再び注目を集めるに至った。

その後の調査の進展で、別の土師器で、「野寺」と墨書されたものも出土したため、飛鳥時代の蜂岡寺であるかどうかは別にして、奈良から平安時代にかけての寺院であった野寺の可能性が強くなった。野寺の位置については、福山敏男や足立康・井本正三郎等の研究によってほぼ明らかになっている。

野寺は、別名を常住寺と言い、『日本霊異記』下巻第35話に「(桓武)天皇信悲、以延暦



遺跡所在地 (1/50,000)

十五年三月朔七日、始召經師四人、爲(物部)古磨、奉寫法花經一部、宛經六萬九千三百八十四文字、動率知識、舉皇太子大臣百官、皆悉加入其知識也、天皇勸請善珠大德、爲講師、請施皎僧頭、爲讀師、於平城宮野寺備法會、爲講讀件經、贈救彼靈之苦也、」とあるのを史料上の初見とする。この史料の平城宮は、平安宮の誤りとするか、福山のように、平安宮も平城宮と呼ばれたこともあったとするかいずれかで、現在の白梅町付近にあったと推定される野寺のこ

とと解釈している。『日本後紀』延暦15年11月辛丑条にも「始用新錢，（中略）亦施七大寺及野寺，（下略）」とあって、平安時代初頭頃の史料に野寺の名前が出てくる。少し時代の下がる史料であるが、護国寺本諸寺縁起集の元興寺縁起には「丈六弥勒像也，斯像有鼻孔，不似普通像，如常住寺中尊，」とあり，元興寺の丈六の弥勒像が常住寺の仏像と似ていたことを伝えている。その分注には「云々，在王城乾方，桓武天皇遷都之時御願也，世俗呼號野寺，」と書かれており，野寺は内裏の北西方向にあったことがわかる。また、『政事要略』卷七十所載の弘仁5（814）年10月の「可禁制宮城以北山野事」のところに書かれている四至には，「西限野寺東，南限宮城以北，」とあるので，内裏北の山野の西に接し，宮城北西の比較的近いところにあったらしい。

以上の史料から，常住寺こと野寺の比定地は，北野白梅町付近に求めることができる。北野麿寺が平安時代の初頭に野寺と呼ばれた寺であったことは，ほぼ確実と思われるが，1936年以來の発掘調査の成果によって，飛鳥時代の瓦が発見されたことは注目に値する。しかも，平安時代の土器にしても「鶺鴒室」と墨書されたものが出土したことは，聖徳太子との関連を連想させるものと言わねばならない。北野麿寺が広隆寺の前身の蜂岡寺である可能性は薄くなっているため，あるいはこの墨書土器は，「広隆寺縁起」に基づく広隆寺移転の事実（前号の遺跡紹介）から付会された伝承に基づいて書かれたものの可能性が強い。この周辺では，平安時代になると，聖徳太子信仰との関連でいろいろな伝承がつけられたのかもしれない。ただ，飛鳥時代の瓦も見つかっているので，この周辺にはその時代の寺院が存在したことは確実である。その寺と野寺との関連は不明だが，あるいは平安時代の初頭頃まであって，平安遷都とともに重要視されるに至ったとも考えられる。もとより，史料があるわけではないので，確実なことはわからない。

現在は，市街地になっていて当時のようすはわからないが，京都信用金庫白梅町支店には説明板があって，調査成果が簡単にわかるようにしてある。

（土橋 誠）

<参考文献>

- 福山敏男「野寺の位置について」（『史迹と美術』87）1938
 足立 康「野寺移建説に就いて」（『史迹と美術』89）1938
 時野谷勝「北野麿寺址」（『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第18冊）1938
 井本正三郎「山城北野麿寺南遺跡の研究」（『考古学』）1941
 坂東善平「野寺址の一知見」（『古代学研究』38・39）1964
 藪田嘉一郎「野寺考」（『史迹と美術』36-3・7・9）1966
 『北野麿寺』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第7冊）1983

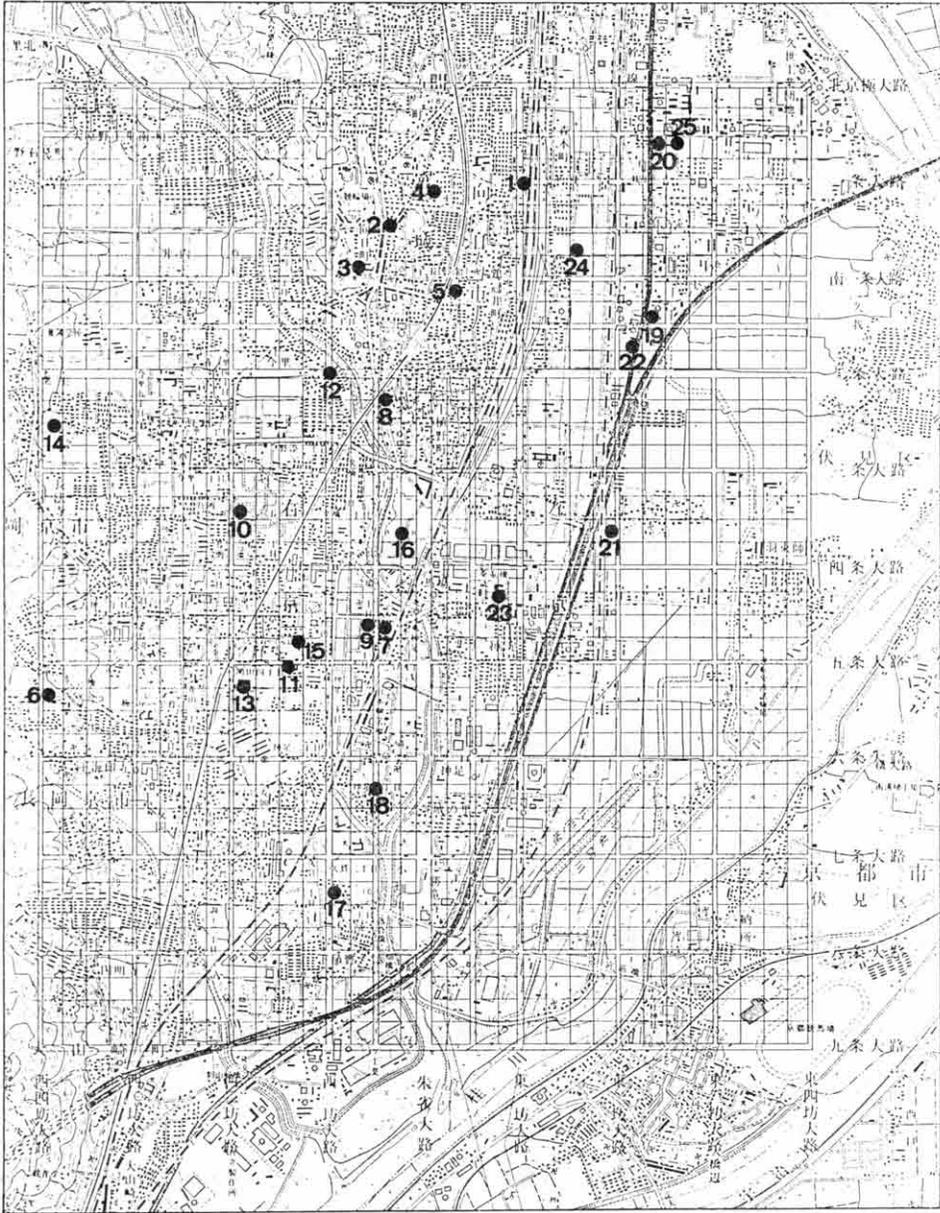
長岡京跡調査だより

8月も終わり、暑い夏もようやく過ぎ去ろうとしています。この真夏の炎天下のもと数多くの調査が行われています。6月から8月にかけての3か月間に行われた長岡京跡の調査は、下記表のとおり宮域5件・右京域13件・左京域7件の計25件ありました。この

調査地一覧表

	次 数	地 区 名	調 査 地	調 査 機 関	調 査 期 間
1	宮内第191次	7AN2A	向日市森本町下森本	向日市教委	62. 5.25～ 6. 7
2	宮内第192次	7AN13I	向日市寺戸町中ノ段13	向日市教委	62. 6.12～ 6.25
3	宮内第193次	7AN19F	向日市向日町南山3	向日市教委	62. 6.22～ 8.12
4	宮内第194次	7AN12F	向日市寺戸町東野辺2	向日市教委	62. 6.29～ 7.15
5	宮内第195次	7AN9T	向日市鶏冠井町祓所	向日市教委	62. 7. 8～ 7.18
6	右京第259次	7ANPOT	長岡京市奥海印寺岡本	(財)長岡京市埋	62. 5. 6～ 6.19
7	右京第262次	7ANMBB	長岡京市神足1丁目15-3	(財)長岡京市埋	62. 5. 7～ 6. 3
8	右京第263次	7ANFKK	向日市上植野町切ノ口26-1	向日市教委	62. 5.13～ 5.28
9	右京第264次	7ANLTR	長岡京市馬場1丁目20-1	(財)長岡京市埋	62. 6. 3～ 6.24
10	右京第265次	7ANIKE-3	長岡京市長岡3丁目25-41	長岡京市教委	62. 7.14～ 8. 4
11	右京第266次	7ANKHT-4	長岡京市開田3丁目	(財)京都市埋	62. 6. 8～ 7.23
12	右京第267次	7ANIKR	長岡京市今里河原9-1	(財)長岡京市埋	62. 7. 4～ 7. 9
13	右京第268次	7ANKID-2	長岡京市開田4丁目522-1	(財)長岡京市埋	62. 7.14～ 8.22
14	右京第269次	7ANJJK-2	長岡京市長法寺北畠17	長岡京市教委	62. 7.21～ 8.25
15	右京第270次	7ANKTR-3	長岡京市開田3丁目5-5	(財)長岡京市埋	62. 7.15～ 8.12
16	右京第271次	7ANFDC	向日市上植野町段ノ町11-1	向日市教委	62. 8. 1～ 9.10
17	右京第272次	7ANQNK-3	長岡京市久貝2丁目310	(財)長岡京市埋	62. 8. 1～ 9. 3
18	右京第273次	7ANQND	長岡京市勝竜寺28	(財)長岡京市埋	62. 8.10～ 8.27
19	左京第172次	7ANEKD-2	向日市鶏冠井町小深田	向日市教委	62. 4.30～ 6.30
20	左京第173次	7ANDII-5	向日市森本町戌亥3	向日市教委	62. 5.15～ 5.16 62. 6.16～ 7. 8
21	左京第174次	7ANXWD	京都市伏見区羽束師菱川町	(財)京都市埋	62. 6.29～
22	左京第175次	7ANEKZ-6	向日市鶏冠井町清水5, 6	向日市教委	62. 7. 4～ 8. 3
23	左京第176次	7ANLZS	長岡京市馬場図書地内	(財)長岡京市埋	62. 7.20～
24	左京第178次	7ANEJS-8	向日市鶏冠井町十相11-5	向日市教委	62. 7.31～
25	左京第179次	7ANVMK	京都市南区東土川1-1	(財)京都市埋	62. 8.19～ 8.20

長岡京条坊復原図



数字は本文（ ）内と対応

ほか長岡京市では、奥海印寺遺跡の調査が行われています。これらの調査では、長岡京跡の道路側溝や建物跡、古墳周濠等が検出されています。

それでは以下に、6月24日・7月22日・8月26日の長岡京連絡協議会で報告された調査のうち主だったものについて簡単に紹介します。

宮内第193次(3)

向日市教育委員会

調査地は、長岡宮西辺官衙の推定地に当り、西一坊第2小路の延長線上に位置する。宮内でも西辺に近く、すぐ西には向日神社があり、向日丘陵の一端の高台に位置している。

この調査では、長岡京期の約5m離れてほぼ平行に走る南北溝や土壇、南北方向2間以上・東西方向2間以上の規模を測るL字状に曲がる柵列跡等が検出されている。南北に2本併行してのびる溝は、途中で切れるが、あるいは道路の側溝ではないかと推測されている。溝幅は4m前後を測る。調査地の東端部付近には整地層が存在し、その下層からは、上層東側の南北溝とほぼ同位置で南北方向に走る溝とピット、土壇等が検出された。

遺物としては、長岡京期の土師器・須恵器・軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦・埴・緑釉陶器・鉄製刀子・凝灰岩等のほか、縄文時代の石棒が出土している。石棒は、頭部径が10.4cmを測る大きさのもので、全体の約5分の1残存している。なお、出土した軒瓦類は、難波官式のものが多い。

宮内第195次(5)

向日市教育委員会

調査地は、内裏外郭部に当り、大極殿院と内裏との間の旧地形の傾斜面を埋める長岡京期の整地土層が確認された。遺物としては、平・丸瓦片や灰釉陶器等が出土している。

右京第259次(6)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

調査地は、長岡京の右京五条四坊十五町の推定地に当り、京城の西辺に位置している。

この調査では、奈良時代の掘立柱建物跡4棟と古墳時代の竪穴式住居跡1基・土壇1基が検出されたほか、近世の土壇や、鎌倉時代の井戸・土壇・溝・石組み遺構等が検出されている。奈良時代の建物跡は、方位が北に対し西ないし東へやや振り、前後2時

- 期に分かれると推測されている。建物の規模は、いずれも2間×3間ないし2間×4間を測り、計画的に配置されている。
- 遺物は、須恵器・土師器・瓦器・磁器等のほか弥生土器やサヌカイトの剥片も出土している。
- 右京第262次(7) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 古墳時代のやや蛇行する東西方向の溝、長岡京期の柱穴、鎌倉時代の柱穴列等が検出されている。溝からは、須恵器の長脚高杯等が出土している。
- 右京第264次(9) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 古墳時代の竪穴式住居跡や中世の柱穴・土塚等が検出された。土塚の埋土には、焼土や炭が含まれている。遺物としては磨製石剣等も出土している。
- 右京第265次(10) 長岡京市教育委員会
- 調査地は、西二坊大路の推定地に位置している。
- この調査では、西二坊大路の東側溝と長岡京期の土塚、古墳時代の竪穴式住居跡・土塚・溝等が検出された。西二坊大路東側溝は、幅2m余りを測る。竪穴式住居跡は2基検出され、平面形は方形を呈し、北辺にカマドを有している。
- 右京第266次(11) (財)京都府埋蔵文化調査研究センター
- この調査では、以前の調査で前方後円墳と推定されていた塚本古墳の後円部周濠を確認するとともに、長岡京期と思われる柱穴をいくつか検出した。また、古墳周濠の外側約3mの位置で埴輪等を包含する溝状遺構が検出された。埋土も周濠内の埋土と酷似しており、塚本古墳の関連施設と考えられる。遺物としては、円筒埴輪や蓋形埴輪、石見型の盾形埴輪等のほか家形埴輪が出土した。また、長岡京期の土師器・須恵器等も出土している。
- 右京第268次(12) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 調査地は、長岡京の右京六条二坊十六町及び六条第1小路の推定地に当るが、この調査では、古墳時代前期の川跡等が検出された。川跡は、南北方向に流れ、幅6m程を測るものである。
- 遺物としては、布留式の土師器のほか、弥生土器や土師器・須恵器・サヌカイトの剥片等が出土している。

右京第269次(14)

長岡京市教育委員会

この調査は、長岡京跡とともに、七ツ塚2・3号墳を対象にして行われ、2号墳と3号墳の間にある水田が発掘調査された。

その結果、長岡京期の遺構は検出されなかったが、幅約3.1m・深さ約0.3mを測る3号墳の周溝が検出され、以前の調査成果と併せ、3号墳は一辺約13mの方墳であることが判明した。また、この周溝は途中でなくなり、古墳西側に、陸橋を有していたことも明らかとなった。

右京第270次(15)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

この調査地は、長岡京の右京五条二坊五町の推定地に当り、長岡京期の土壇や平安時代の掘立柱建物跡等が検出された。掘立柱建物跡は、南北2間・東西5間以上の規模の東西棟で、方位が北に対しわずかに西に振る。出土遺物には、銭貨(神功開寶)等も見られる。

右京第271次(16)

向日市教育委員会

調査地は、長岡京の右京四条一坊三町の推定地に当り、長岡京期のピットや中・近世の溝が検出されている。遺物は、須恵器・平瓦・丸瓦・瓦器等のほか、弥生土器や古墳時代の須恵器等が出土している。

右京第272次(17)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

この調査地は、恵解山古墳の南に位置し、長岡京の西一坊大路等の推定地に当る。近世の大溝や柵列、中世の溝、平安時代の掘立柱建物跡・土壇等が検出されている。

左京第172次(19)

向日市教育委員会

この調査地は、長岡京の左京二条三坊七町及び二条条間大路の推定地に当り、二条条間大路の北側溝や長岡京期の掘立柱建物跡1棟・井戸1基・土壇1基・溝1条等が検出された。二条条間大路北側溝は、幅5m近くを測り、溝底から獣骨等が出土している。掘立柱建物跡は、東に廂を有する東西3間・南北5間の南北棟で、身舎の柱掘形が一辺1m前後を測る立派な建物である。このほか、中世の溝や、弥生時代の溝及びしがらみ、縄文時代の土器溜り等も検出されている。

遺物は、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・弥生土器・縄文土器・瓦・土馬・銭貨(神功開寶)・鉄釘・柱状片刃石斧・木製品・種子・獣骨等が出土している。弥生土器は弥生時代中・後期、縄文土器は縄文時代後・晩期のものが出土している。

左京第173次(20)

向日市教育委員会

中世の掘立柱建物跡1棟と柵列跡2条・土塚1基等が検出され、土師器や銭貨(開元通寶)等が出土している。

左京第174次(21)

(財)京都市埋蔵文化財研究所

この調査地は、長岡京の左京四条三坊三町及び東三坊大路と四条四坊六・十一町及び東四坊坊間小路の推定地に当り、東三坊大路東側溝や東四坊坊間小路東西両側溝、長岡京期の掘立柱建物跡・柵列跡・溝・石敷き遺構等が検出された。このほか、平安時代から中世の川状遺構や奈良時代の水田跡も検出されている。

左京第175次(22)

向日市教育委員会

この調査では、長岡京期の掘立柱建物跡や柵列跡、弥生時代の自然流路・土塚、中世の溝等が検出され、土師器・須恵器・瓦器・弥生土器・縄文土器・石鏃等が出土した。検出された掘立柱建物跡は、東西2間・南北2間以上の規模を有する総柱建物である。

左京第176次(23)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京の東一坊第2小路東西両側溝や長岡京期の掘立柱建物跡等が検出されている。また下層では方形周溝墓も検出されている。

左京第178次(24)

向日市教育委員会

調査地は、長岡京の左京南一条二坊十一町の推定地に当り、長岡京期の井戸や弥生時代の自然流路が検出されている。

奥海印寺遺跡
第3次・第4次

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

鎌倉時代の掘立柱建物跡や井戸・土塚等が検出されている。3次調査では、2間×2間の総柱建物も検出され、出土遺物には北宋銭等もある。

(山口 博)

センターの動向 (62.6~62.8)

1. できごと

6. 1 稲荷古墳群(弥栄町)発掘調査開始
6. 2 高山古墳群(丹後町)7・8号墳発掘調査終了(4.13~)
6. 3 全国埋蔵文化財法人連絡協議会コンピューター等導入研究委員会(東京)出席(山口企画係長・土橋調査員)
6. 6 平安京跡(京都市一府民ホール)発掘調査終了(61.10.6~)
6. 8 長岡京跡右京第266次(長岡京市)発掘調査開始
福山敏男理事長, 恩賜賞日本学士院賞受賞
6. 11・12 全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会(諏訪市)出席(荒木事務局長・中谷次長・田中総務課長・安田総務係長)
6. 18 昭和61年度監事監査
高山古墳群12号墳発掘調査開始
6. 24 長岡京連絡協議会開催
6. 26 第19回理事会・役員会一於・平安会館一福山敏男理事長, 樋口隆康副理事長, 藤井 学・川上 貢・原口正三・藤田价浩・堤圭三郎の各理事, 荒木昭太郎常務理事, 堂端明雄監事出席
鳥取城跡(久美浜町)試掘調査終了(5.18~)
6. 29 第40回研修会開催一別掲一
7. 6 桑飼上遺跡(舞鶴市)試掘調査開始
7. 9 谷内遺跡(大宮町)発掘調査現地説

明会実施

7. 10 アバタ古墳群(久美浜町)発掘調査開始
7. 13 瀬後谷遺跡(木津町)試掘調査開始
栗ヶ丘横穴群(綾部市)発掘調査開始
7. 15 恭仁京跡(木津町)発掘調査開始
南稻八妻城跡(精華町)発掘調査終了(5.14~)
7. 17 福山敏男理事長恩賜賞・日本学士院賞受賞祝賀会開催(於・京都ホテル)
7. 20 平安京跡(京都市一山城高校)発掘調査開始
長岡京跡右京第266次発掘調査関係者説明会実施
7. 22 長岡京連絡協議会開催
7. 23 長岡京跡右京第266次発掘調査終了
7. 25 平山城館跡(綾部市)発掘調査現地説明会実施
7. 29 橋爪遺跡(久美浜町)発掘調査開始
8. 1 遠所古墳群(弥栄町)発掘調査開始
8. 3 上中遺跡(京北町)発掘調査開始
亀山城跡(亀岡市)発掘調査開始
8. 8・9 第41回研修会開催一別掲一
8. 12 全国埋蔵文化財法人連絡協議会「全国考古資料展」企画実行委員会第1回全国会議(大阪市)出席(杉原調査第2課長)
8. 23 高山古墳群12号墳発掘調査説明会実施(於・丹後町立豊栄小学校)

- 8. 25 第42回研修会開催一別掲一
- 8. 26 平山城館跡発掘調査終了(4.14~)
今井京都府教育委員会産業医、千代川遺跡(亀岡市)発掘調査現場視察
長岡京連絡協議会開催
- 8. 28 臨時理事会一於・当センター研究室一福山敏男理事長、樋口隆康副理事長、中沢圭二・川上 貢・藤田价浩・堤圭三郎の各理事、荒木昭太郎常務理事出席

2. 普及啓発事業

- 6. 29 第40回研修会開催一於・京都社会福祉会館・埋蔵文化財保護の現状と課題一長谷川 達「昭和61年度の京都市内の発掘調査について」、山口 博「(財)京都市埋蔵文化財調査研究センターの業務について」、木下 均「国庫補助事業事務について」
- 8. 8・9 第41回研修会開催一於・峰山町

中央公民館：丹波・丹後地域の古代の村と墓一肥後弘幸「舞鶴市志高遺跡の貼り石のある周溝墓をめぐって」、鍋田勇「峰山町古殿遺跡の発掘調査」、小山雅人「綾部市野崎古墳群について」、引原茂治「綾部市栗ヶ丘古墳群の発掘調査」、安藤信策「丹後地域の市町村の最近の調査から」

- 8. 22 第6回小さな展覧会一昭和61年度発掘調査の成果から一・京都市内巡回展示「鏡と古墳」一景初四年鏡と芝ヶ原古墳一開始(～9.6)
- 8. 25 第42回研修会開催一於・向日市市民会館：昭和61年度の発掘調査の成果から一伊野近富「平安京跡の遺構・遺物について」、竹原一彦「尊勝寺跡から出土した瓦について」、伊賀高弘「木津町瓦谷遺跡から出土した木製品・埴輪について」

受贈図書一覧 (62.6~62.8.10)

(財)北海道埋蔵文化財センター	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第35~43集
(財)福島県文化センター	福島県文化財調査報告書 第172~180・182集
(財)茨城県教育財団	年報6 (昭和61年度)一調査課10年のあゆみ一, 茨城県教育文化財調査報告 第38~43集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書 第13・15集
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	埼玉考古 第23号一埼玉考古学会30周年記念一特集号, 埼玉考古一埼玉考古学会30周年記念一シンポジウム資料
(財)千葉県文化財センター	千葉県文化財センター年報 No.1, 千葉県文化財センター研究紀要11, 佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡, 沓掛貝塚, 佐倉市腰巻遺跡, 八千代市井戸向遺跡, 千葉市小中台遺跡 千葉都市計画道路3・4・43号磯辺茂呂町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2, 千葉県山武郡大網白里町 北後谷横穴一千葉県立山武農業高等学校グラウンド造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 関宿城跡一東葛飾郡関宿町久世田輪に所在する関宿城確認調査概報一, 大井東山遺跡・大井大畑遺跡 一級河川手賀沼河川浄化に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 主要地方道成田松尾線 V 中台貝塚・松尾東雲遺跡・八田太田台遺跡, 東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ, 千葉県埋蔵文化財分布地図(3)一市原市・君津・長生地区一, 研究連絡誌 第17~19号
(財)茂原市文化財センター	茂原市文化財センター年報 No.1 一昭和59・60年度一
(財)山武郡南部地区文化財センター	財団法人山武郡南部地区文化財センター年報 No.2, 千葉県東金市滝東台遺跡・油井古塚原遺跡, 千葉県東金市 森ノ木台遺跡
(財)印旛郡市文化財センター	財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第3~8・11集
山梨県埋蔵文化財センター	研究紀要3, 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第11・20・28・31集
(財)長野県埋蔵文化財センター	(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書1
(財)愛知県埋蔵文化財センター	年報 昭和61年度, 愛知県埋蔵文化財情報2, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第1~2集
(財)滋賀県文化財保護協会	新守山川改修工事関連遺跡発掘調査概要Ⅲ一守山杉江遺跡一, 県道下豊浦鷹飼線道路改良工事に伴う金剛寺遺跡発掘調査報告書, 宇曾川災害復旧助成事業に伴う妙楽寺遺跡Ⅰ~Ⅱ, 琵琶湖大橋有料道路建設工事に伴う栗東町高野遺跡発掘調査報告書, 県道片岡栗東線特

	殊改良第1種工事に伴う芦浦遺跡発掘調査報告書, ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ-1, 同Ⅳ-1, 同Ⅳ-2, 県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ-2, 一般国道8号(長浜バイパス)関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ, 黒田B遺跡—伊香郡木之本町黒田所在一, 昭和60年度 滋賀県文化財調査年報, 昭和61年度調査 埋蔵文化財展
(財)枚方市文化財研究調査会	枚方市文化財年報Ⅶ
奈良県立橿原考古学研究所	大宇陀町文化財調査報告書 第1集
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター	埋蔵文化財発掘調査報告書 第20~23集
札幌市教育委員会	札幌市文化財調査報告書 XXIX~XXXIII
仙台市教育委員会	仙台市文化財調査報告書 第78集
井川町教育委員会	大野地遺跡—第3次調査概報—
米沢市教育委員会	米沢市埋蔵文化財調査報告書 第18~20集
成田市教育委員会	成田市の文化財・第17集, 宗吾西鷲山遺跡
東京都北区教育委員会	北区埋蔵文化財調査報告 第1集
新島本村教育委員会	新島本村文化財調査報告 第2集
富山県教育委員会	昭和61年度 富山県埋蔵文化財調査一覧表, 都市計画街路 七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(5), 北陸自動車道遺跡—朝日町編3— 馬場山D遺跡・馬場山G遺跡・馬場山H遺跡
富山市教育委員会	昭和61年度 富山市埋蔵文化財調査概要, 県営畑地帯総合土地改良事業地区内遺跡試掘調査報告書(昭和61年度), 富山市開ヶ丘狐谷Ⅱ遺跡 県営畑地帯総合土地改良事業に先立つ発掘調査の概要報告, 富山市飯野新屋遺跡 主要地方道富山環状線工事に伴う古墳時代前期集落跡の調査概要, 長岡杉林遺跡—富山県富山市長岡杉林遺跡発掘調査報告書
小矢部市教育委員会	小矢部市埋蔵文化財調査報告書 第19~22冊
加賀市教育委員会	三木だいまん遺跡
韮崎市教育委員会	中本田遺跡・堂の前遺跡
湖西市教育委員会	西笠子第64号窯跡発掘調査報告書, 国道1号線潮見バイパス(湖西地区)埋蔵文化財発掘調査報告書 長谷元屋敷遺跡, 33kv 富士電化 鷲津線一部増強工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
上野市教育委員会	上野市文化財調査報告 16・20~21
滋賀県教育委員会	宇曾川災害復旧助成事業に伴う妙楽寺遺跡Ⅰ~Ⅱ, 県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ-1, 同Ⅲ-2, 新守山川改修工事関連遺跡発掘調査概要Ⅰ~Ⅲ, ほ場整備関係遺跡発掘調査報告

	書Ⅷ-1, 同Ⅷ-3, 同Ⅸ-1, 同Ⅸ-2, 山ノ神遺跡発掘調査報告書 国道1号京滋バイパス関連遺跡発掘調査報告, 錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要 I, 県道下豊浦鷹飼線道路改良工事に伴う金剛寺遺跡発掘調査報告書 II, 県道片岡栗東線特殊改良第1種工事に伴う芦浦遺跡発掘調査報告書 I, 琵琶湖大橋有料道路建設工事に伴う栗東町高野遺跡発掘調査報告書, 一般国道8号(長浜バイパス)関連遺跡発掘調査報告書 IV, 国道161号線バイパス関連遺跡調査概要7 高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要一吉武城遺跡一, 昭和60年度 滋賀県文化財調査年報
大津市教育委員会	大津市埋蔵文化財調査報告書(12)
彦根市教育委員会	彦根市埋蔵文化財調査報告 第10・14集
野洲町教育委員会	野洲町文化財資料86-2 小堤遺跡発掘調査報告書一昭和61年度一, 野洲川左岸遺跡発掘調査報告-2
羽曳野市教育委員会	古市遺跡群Ⅶ 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書14
吹田市教育委員会	(昭和61年度)埋蔵文化財緊急発掘調査概報 吉志部瓦窯跡
豊中市教育委員会	豊中市文化財調査報告 第19集, 摂津豊中 大塚古墳, とよなか探訪(史跡マップ)
松原市教育委員会	松原市遺跡発掘調査概要昭和61年度
阪南町教育委員会	阪南町埋蔵文化財報告 IV
尼崎市教育委員会	尼崎市文化財調査報告 第18集
三田市教育委員会	天神遺跡 一公共下水道管理埋設にかかる発掘調査報告書(I)一
西紀・丹南町教育委員会	丹波国大山荘現況調査報告 III
奈良市教育委員会	奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1986, 平城京東市跡推定地の調査 IV, 同 V, 奈良市埋蔵文化財調査概要報告 昭和60年度, 同 昭和61年度
平群町教育委員会	生駒十三峠の十三塚 重要有形民俗文化財調査報告書, 平群町廿日山(初香山)遺跡 昭和60年度発掘調査概要
岡山県教育庁文化課	岡山県埋蔵文化財報告 17
総社市教育委員会	総社市埋蔵文化財発掘調査報告 4~5
邑久町教育委員会	邑久町の文化財
久世町教育委員会	目木条里発掘調査報告書
山口県教育委員会	山口県埋蔵文化財調査報告 第98~104集
徳島県教育委員会	黒谷川郡頭遺跡 II
福岡県教育委員会	福岡県文化財調査報告書 第75~78集, 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 9~11, 九州歴史資料館収蔵資料目録 4, 大宰府史跡 昭和61年度発掘調査概報, 浮羽町文化財調査報告書 第2~3

	集, 志摩町文化財調査報告書 第6~7集, 宗像市文化財調査報告書 第8・10~12集, 八女市文化財調査報告書 第12・14~15集, 甘木市文化財調査報告 第18~20集, 碓井町文化財調査報告書 第2集, 古賀町文化財調査報告書 第7集, 菟田町文化財調査報告書 第7集, 立花町文化財調査報告書 第3集, 太刀洗町文化財調査報告書 第1集, 宝珠山村文化財調査報告書 第1集, 津屋崎町文化財調査報告書 第5集
清川村教育委員会	岩戸遺跡 大分県大野郡清川村 所在旧石器時代遺跡第3次発掘調査報告書
宮崎市教育委員会	源藤遺跡 宮崎市文化財調査報告書, 中岡遺跡
串間市教育委員会	串間市文化財調査報告書 第1集
鹿児島県教育委員会	鹿児島県埋蔵文化財調査報告書 (40)~(44)
八戸市博物館	八戸市博物館研究紀要 第3号
岩手県立博物館	岩手県立博物館調査研究報告書 第3冊
大船渡市立博物館	大船渡市立博物館調査研究報告 岩手県大船渡市蛸の浦貝塚
群馬県立歴史博物館	群馬県立歴史博物館紀要 第8号
埼玉県立歴史資料館	研究紀要 第9号, 埼玉の古代窯業調査報告書(末野・南比企窯跡群)
埼玉県立さきたま資料館	埼玉古墳群発掘調査報告書 第5集
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告 第13~15集
千葉市立加曽利貝塚博物館	貝塚博物館紀要 第14号, 加曽利貝塚博物館20年の歩み—野外博物館をめざして—
流山市立博物館	流山市立博物館年報 No.9
小田原市郷土文化館	小田原市郷土文化館研究報告 No.23
長岡市立科学博物館	長岡市立科学博物館研究報告 第22号
高岡市立博物館	年報 第1号
福井県立朝倉氏遺跡資料館	福井県の中・近世城館跡, 一乗谷朝倉氏遺跡 一乗小学校校舎改築に伴う事前調査報告書
敦賀市立歴史民俗資料館	敦賀市立歴史民俗資料館紀要
松本市立考古博物館	図書目録—原文庫—
茅野市尖石考古館	磯並遺跡—静香苑進入道路第Ⅱ期工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告—, 矢ノ口遺跡—昭和61年度県営圃場事業湯川地区内埋蔵文化財発掘調査報告—, 古田城跡—茅野市立八ヶ岳総合博物館用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—
大阪城天守閣	大阪城天守閣紀要 第15号

大阪市立博物館	大阪市立博物館報 No.26
柏原市歴史資料館	柏原市遺跡群発掘調査概報 1986年度, 安堂遺跡 1986年度, 高井田横穴群 II
兵庫県立歴史博物館	総合調査報告書(Ⅲ)西脇・多可, 博物館普及資料 第7集, 播磨総社一つ山三つ山
尼崎市立地域研究史料館	尼崎市史 第11巻
和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所	紀伊風土記の丘年報 第9～13号
福岡市立歴史資料館	福岡市立歴史資料館年報 No.15
北九州市立考古博物館	「北九州の横穴墓」展
北海道大学北方文化研究施設	環太平洋北部地域における狩猟獣の捕獲・配分・儀礼
東北大学埋蔵文化財調査委員会	東北大学埋蔵文化財調査年報 2
早稲田大学図書館	古代 第83号
お茶の水女子大学読史会	お茶の水史学 第30号
國學院大學文学部考古学研究室	國學院大學文学部考古学実習報告 第13～14集
東洋大学文学部史学科研究室	東洋大学文学部紀要 第40集, 白山史学 第23号
富山大学人文学部考古学研究室	富山大学考古学研究報告 第1冊, 立山町文化財調査報告書 第2冊
金沢大学文学部考古学研究室	金沢城の発掘—1981—藤右衛門丸北側法面裾部発掘報告, 金大考古第14号
滋賀大学教育学部考古学研究室	滋賀史学会誌 第6号
大阪大学文学部考古学研究室	鳥居前古墳
大手前女子学園	大手前女子学園記
島根考古学会	島根考古学会誌 第4集
広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会	西ガララ遺跡 昭和61年度 広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査の記録
九州大学文学部九州文化史研究施設	九州文化史研究所紀要 第32号(考古学関係抜刷集)
山武考古研究所	井出村東遺跡
名著出版	歴史手帖 第164～166号
大和書房	古墳発生前後の古代日本 —弥生から古墳へ—, 東アジアの古代文化 第52号, 古代資料10 1985年版
東北新幹線中里遺跡調査会	中里遺跡 1～2
玉川文化財研究所	横浜市 六ツ川山王台遺跡, 藤沢市 根下遺跡発掘調査報告書
本郷遺跡調査団	海老名本郷(Ⅲ)
(財)山梨文化財研究所	義清神社内遺跡 付・昭和町の埋蔵文化財分布調査報告, 明野の文

美濃古窯研究会
 (財)古代學協會
 関西プロセス
 大阪郵政考古学会
 市島町公民館
 黒川古文化研究所
 埋蔵文化財天理教調査団
 朝鮮学会

京都市埋蔵文化財調査センター

(財)長岡京市埋蔵文化財センタ

京都府教育委員会
 京都市文化観光局文化財保護課
 向日市教育委員会
 大山崎町教育委員会
 宇治市教育委員会
 井手町教育委員会
 宇治田原町教育委員会
 山城町教育委員会
 綾部市教育委員会
 宮津市教育委員会
 大宮町教育委員会
 網野町教育委員会
 京都府立丹後郷土資料館
 京都府立総合資料館
 京都国立博物館
 京都市歴史資料館
 同志社大学考古学研究室
 京都女子大学史学会

化財第2集 普門寺遺跡

美濃古窯研究会会報 第1号

古代文化 第341~342号

平城京左京四条二坊一坪

郵政考古紀要 XII

三ツ塚廃寺跡環境整備事業報告書

第38~39・42・44~49回展観目録

考古学調査研究中間報告 12

朝鮮学報 第123輯

中臣遺跡発掘調査概報 昭和61年度, 北野廃寺発掘調査概報 昭和61年度, 中久世遺跡発掘調査概報 昭和61年度, 鳥羽離宮跡発掘調査概報 昭和61年度, 平安京跡発掘調査概報 昭和61年度, 法勝寺跡発掘調査概報 昭和61年度, 一乗寺向畑町遺跡発掘調査概報 昭和61年度, 醍醐1号墳発掘調査概報 昭和61年度, 京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度

長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和60年度, 長岡京市文化財調査報告書 第18冊

京都府遺跡地図 第2分冊第2版, 埋蔵文化財発掘調査概報(1987)

京都市文化財ボックス 第2集

向日市埋蔵文化財調査報告書 第14・21集

大山崎町埋蔵文化財調査報告書 第6集

宇治市文化財調査報告 第1冊

井手町文化財調査報告 第2集

宇治田原町史 資料篇 第3集

京都府山城町埋蔵文化財調査報告書 第4集

綾部市文化財調査報告 第14集

宮津市文化財調査報告 第12~13集

大宮町文化財調査報告 第4集

京都府網野町文化財調査報告 第5集

伊根浦の歴史と民俗(特別陳列図録21)

資料館紀要 第15号

学叢 第6号, 昭和60年度 京都国立博物館年報

京都市歴史資料館紀要 第4号

同志社大学考古学シリーズIII 考古学と地域文化

史窓 第41~43号

佛教大学図書館

精華町の自然と歴史を学ぶ会

伊野近富

置田雅昭

金下玲子

酒井清治

関口功一

武末純一

福山敏男

鷹陵史学 第11～12号

波布理曾能 第4号

中近世土器の基礎研究 II

漢代の画像埴 天理ギャラリー第78回展

南山大学人類学博物館紀要 第1・7号

資料館ガイドブック No.4

史跡上野国分寺跡発掘調査概要 7

古文化談叢 第17集, 弥生時代の青銅器とその共伴関係

季刊明日香風 第23号, 大英博物館所蔵日本・中国美術名品展

一編集後記一

9月になり、ようやく涼しい季節がやってきましたが、情報第25号が完成しましたのでお届けします。

昭和62年度も約半分が経過しましたので、本号では、これまでの調査のうちで、特に成果のあがりました遺跡を中心に掲載いたしました。また、投稿原稿もあり、小泉信吾氏は、遊戯史の立場から方格規矩紋鏡にあらわれた図文について論じておられます。小泉氏はこの続編として、次号にも投稿下さることになっておりますので、御期待下さい。

(編集担当=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第25号

昭和62年9月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
☎ (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
☎ (075)441-3155 (代)